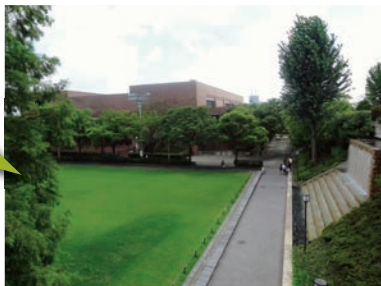


昔と今



大正 15（1926）年に完成した
第 1 グラウンド



現在、噴水のある庭の向こうに
総合図書館が見える



昭和 50（1975）年代、第 1 グラウンド
のスタンドと千里山図書館



平成 6（1994）年、簡文館（旧千里山
図書館）に博物館が開館



建設中の総合図書館



昭和 60（1985）年 4 月、総合図書館
開館



昭和 39（1964）年、専門図書館開館



平成 16（2004）年、
情報処理センター
が圓神館（旧専門
図書館）に移転し、
ITセンターとなる



大正時代、福島学舎図書館内の利用風景



現在の総合図書館 1 階東閲覧室の利用風景



千里山図書館 2 階閲覧室の利用風景



総合図書館 2 階開架閲覧室の利用風景



専門図書館奉仕カウンター



総合図書館レファレンスカウンター



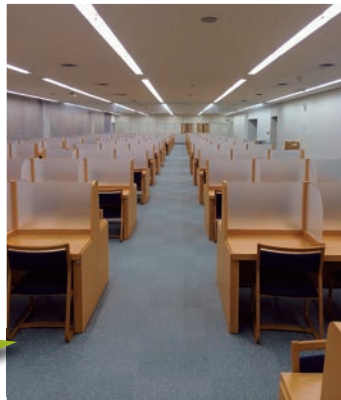
総合図書館開館当時の蔵書検索システム



現在の蔵書検索システム



平成 22（2010）年当時の図書館事務室



平成 23（2011）年 12 月、図書館事務室を移転、東閲覧室となる。

本文中で紹介した

文庫・コレクション



大阪文芸資料



長澤文庫



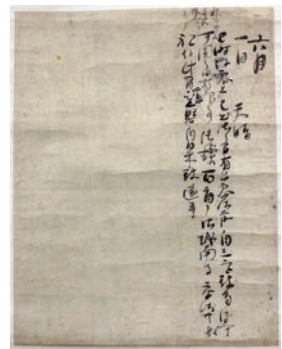
中村幸彦文庫「尚書註疏」



廣瀬文庫「廣瀬本萬葉集」



谷澤永一コレクション



「明月記」断簡

主な記念展示



第20回秋季特別展 泊園記念会設立30周年記念 泊園書院
 (会期：平成2年10月15日(月)～11月22日(木) 於：総合図書館1階展示室)



第34回学外展 関西大学図書館創設80周年記念・関西大学文学部創設70周年記念
 おおさか文藝書画展 (会期：平成6年9月22日(木)～9月27日(火) 於：大丸心斎橋店)



第 45 回学外展 大坂の書と画と本 ― 関西大学図書館所蔵 ―
 (会期：平成 9 年 5 月 30 日(金)～ 6 月 11 日(水) 於：京阪百貨店守口店ギャラリー)



臨時展 関西大学図書館 100 年のあゆみ展
 (会期：平成 26 年 4 月 1 日(火)～ 5 月 18 日(日) 於：総合図書館 1 階展示室)

「関大図書館 100 年のあゆみ展」から



福島学舎（写真中央が図書館）



館内風景

福島学舎図書館

大正 3（1914）年 7 月、福島学舎に竣工。大阪区裁判所の土蔵を改築した 2 階建て洋風館（20 坪・66㎡）で小規模ながら本学初の独立図書館として建築。独立した図書館を待ち望んでいた学生たちは、ここで勉学に励む。このころから、弁護士、判事・検事登用試験で本学出身の合格者数が増加。



館内風景



千里山図書館

千里山図書館

昭和 3（1928）年 4 月、千里山学舎に竣工。本学初の鉄筋コンクリート造（総面積 800 坪・2,640㎡）による図書館。積層式 5 階建ての書庫を有す。開館当初は、蔵書の充実のため、本学教授の欧米留学に際して図書購入を命じた。この後、2 度の増築工事を経て使用用途も拡大し、昭和 60（1985）年 4 月総合図書館が開館するまでの 57 年間、教育研究の中核的機能を果たす。現在も簡文館の一部として使用。簡文館は平成 19（2007）年に登録有形文化財（建造物）として登録。



奉仕室カウンター



天六学舎と図書館天六分館
(中央と左の建物4階に位置した)



天六分館の目録室

天六分館

昭和4（1929）年9月、天六学舎に竣工。竣工当初、図書館は地階に位置したが、昭和10（1935）年3月、天六学舎本部増築工事に伴い、地上4階に移転。その後、昭和35年（1960）年に一般閲覧室を増設。天六分館は第2部が千里山キャンパスに移転したのに伴い、平成6（1994）年3月末をもって有終閉館。



専門図書館と渡り廊下



館内風景

専門図書館

昭和39（1964）年9月、千里山キャンパスにおける第2の図書館として竣工。法・文両学部学舎に近接する従来の図書館（千里山図書館）に対し、専門図書館は、経済・商・工各学部の教員と、専門課程の学生を主な対象として開設。村野藤吾氏設計。竣工後に、当時の第2学舎2号館と渡り廊下で接続。現在は圓神館と称し、平成16（2004）年よりインフォメーションテクノロジーセンター（ITセンター）として利用。



総合図書館



建設当時の様子（毎日新聞社提供）

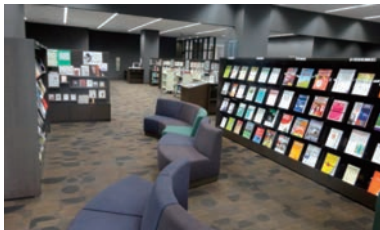
総合図書館

昭和 59（1984）年 10 月に竣工。翌年 4 月開館。総面積 19,105.87㎡、収容可能冊数約 170 万冊。開館当時は、大学図書館として日本最大規模を誇る。また、当時としては珍しい研究機能・学習機能の両方を備えた図書館として注目を集める。鬼頭梓氏設計。地上 3 階・地下 2 階からなり、3 階までの吹き抜け、豊かな自然光、ノーステップ・フラットフロアなど、利用者の視点に立った優れた構造設計を採用。



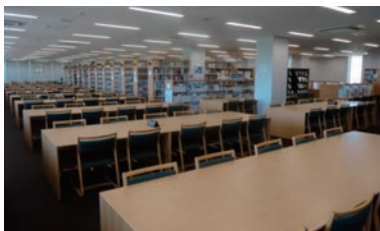
高槻キャンパス図書館

高槻キャンパス総合情報学部開設に伴い、平成 6（1994）年 4 月に開館。教室棟（B 棟）の地下 1 階にあり、総合情報学部および総合情報学研究科における学習・研究のための資料を中心に所蔵。



ミューズ大学図書館

高槻ミューズキャンパス社会安全学部開設に伴い、平成 22（2010）年 4 月に開館。西館 1 階にあり、社会安全学部および社会安全研究科における学習・研究のための資料を中心に所蔵。



堺キャンパス図書館

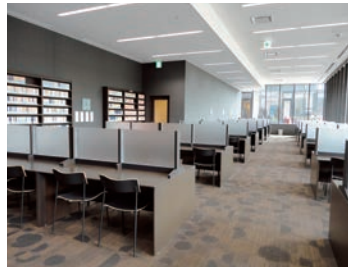
堺キャンパス人間健康学部開設に伴い、平成 22（2010）年 4 月に開館。平成 23（2011）年新棟竣工に伴い、新棟（B 棟 2 階）に移設。人間健康学部および人間健康研究科における学習・研究のための資料を中心に所蔵。

サテライトキャンパス図書館

高槻キャンパス図書館



ミューズ大学図書館



堺キャンパス図書館



関西大学図書館

創設 100 周年記念誌

記念誌の刊行にあたって

図書館長 内田 慶市

このたび「関西大学図書館創設100周年記念誌」を上梓するのはこびとなりました。図書館は、平成7（1995）年の「関西大学図書館フォーラム」の創刊の際に、80年の歴史をふり返り年史として記しています。小誌はその後の20年の図書館の歩みを館史にとどめるものです。

明治19（1886）年に関西大学の前身・関西法律学校が大阪西区の願宗寺で開校しました。その後学舎は興正寺に移り、図書室が置かれたのが、関西大学図書館の始まりです。大正3（1914）年に、福島学舎に独立した図書館が創設され、2014年を以て100年の歳月を閲することとなりました。

大正3年当時の図書館は、大阪区裁判所の土蔵を改造した20坪ほどの2階建て洋風館でした。現在は昭和59（1984）年に開設した、総面積18,500㎡、地上3階地下2階の規模を誇る総合図書館を中心に、高槻キャンパス図書館、ミューズ大学図書館および堺キャンパス図書館を分館とした4館体制を敷き、図書220万冊、雑誌約24,000タイトル、電子ジャーナル約20,000タイトル、他各媒体資料多数を所蔵する、日本の私立大学有数の大学図書館へと成長を遂げています。

小誌が記すところの20年は、技術変化の最も激しい時代であったことは論を俟ちません。米国のライフ誌は「過去1000年におけるもっとも重要な出来事と人物」として活版印刷技術の発明者ヨハネス・グーテンベルクによる聖書印刷を第一位に選定しましたが、コンピュータとインターネットに代表されるデジタル化はグーテンベルクによる活版印刷技術の発明以来の情報革命を巻き起こしたと言われています。ネットワークの発展、電子情報の爆発的増加は、「電子図書館」という言葉に象徴されるように図書館を大きく変え、今も弛まぬ技術革新の進展は図書館に新たな課題をもたらしています。ラーニングコモンズ・デジタルアーカイブズといった言葉は図書館に携わる人々の間で、すでに人口に膾炙していますが、本学図書館でのそれらの取組みは将来に向かって一歩前進したところであると言えます。この時機に図書館が果たしてきた役割を再現し確認しておくことは、その将来を考える上で、必要不可欠な作業です。

本書が、本学図書館の過去をふりかえり、将来のあり方を考える材料となることを期待します。

図書館創設 100 周年によせて

学長 楠見晴重

本学図書館は、大正 3（1914）年 7 月、福島学舎に、小規模ながら本学初の独立図書館として竣工し、図書館として業務を開始し、今年、創設 100 周年の佳節を迎えました。

現在の関西大学図書館は、昭和 60（1985）年、千里山キャンパスに開館した総合図書館を本館として、平成 6（1994）年に開設した高槻キャンパス図書館、2010 プロジェクト事業の一環として、平成 22（2010）年に開設したミューズ大学図書館および堺キャンパス図書館を分館とした 4 館体制で運営されています。

総合図書館の開館に併せて、現在の関西大学蔵書検索システムが導入され、かつてのカード目録で図書を探す時代から、インターネットを利用して、自宅やスマートフォンからでも蔵書検索できる時代へと変遷しました。また、学術情報は、電子ジャーナルやデータベースの進展に伴い、従来の紙媒体を中心にした図書資料からインターネットを活用した電子資料へ急激に変化しつつあります。

これからの大学図書館は、学術情報サービスのさらなる高度化を図り、利用者のニーズに応じていくことにより教育・研究の支援機能を発揮し、情報社会に対応した学術情報サービスを展開していくことが求められています。

本学は、平成 28（2016）年に、創立 130 周年を迎えますが、「図書館創設 100 周年」及び「博物館開設 20 周年」との連携によるプレ企画として展示会や記念行事を開催いたします。

図書館創設 100 周年、そして、来るべき関西大学創立 130 周年を新しい歴史の幕開きととらえ、図書館が学術情報の収集・発信の中核として、これまで受け継がれてきた「知」と「精神」を継承するとともに、学術情報サービスの一層の充実に寄与し発展し続けることを期待いたします。

関大図書館創設 100 周年記念誌

目 次

序文

記念誌の刊行にあたって	図書館長 内田 慶市
図書館創設 100 周年によせて	学 長 楠見 晴重

記念誌の編集について

第 1 部 この 20 年を振り返って

高槻図書室開館	広瀬 雅子	3
阪神・淡路大震災	高橋 真澄	8
図書館システムの変遷	徳岡 久実・濱生 快彦	12
図書館ビジョン 7 項目の制定	濱生 快彦	20
図書館におけるアウトソーシング	高橋 真澄	26
電子展示	濱生 快彦	36
市民利用開始	広瀬 雅子	41
図書館ウェブサイト	濱生 快彦	44
2010 プロジェクトによる新図書館	高橋 真澄・田中 恵美	48
図書館リニューアル工事	新谷大二郎	60
図書館の現在と未来	堀口 和弘	68

第 2 部 図書館に想う

関西大学図書館創設 100 周年に寄せて	市川 訓敏	79
図書館の思い出、図書館への思い	北川 勝彦	85
図書館在職時の思い出	柴田 真一	91
数々の貴重書	田中 登	95
関西大学図書館 100 周年にあたって — 私の夢想する図書館 —	内田 慶市	100

第 3 部 図書館の文庫・コレクション

文庫・コレクションの紹介	鶯飼 香織	111
--------------------	-------	-----

第4部 資料編

図書館年譜（明治19.3～平成26.7）	119
サービスに係る統計（総合図書館）	146
サービスに係る統計 （高槻図書室・ミューズ大学図書館・堺キャンパス図書館）	148
蔵書数の推移	149
図書費執行額の推移	150
展示一覧	152
他大学図書館との協定一覧	160

〔図書館コラム〕

1 新人時代の思い出	高松 和美	11
2 エレベーターにまつわる話	吉田 有輝	19
3 泣き別れたり、親子になったり	嶋田有理香	35
4 貴重なのは本だけ？貴重書担当のつぶやき	大上 良樹	40
5 会長校のころ	金 東溍	46
6 『コアラ博士』にまつわるあれこれ	松本 和剛	57
7 広報誌『KULione』誕生秘話	白髪 友賀	59
8 本と夢を運んだエレリフト	芝谷 秀司	66
9 LOUIS VUITTON	加藤 博之	75

記念誌の編集について

本誌の編集は次のような方針で行ないました。

- 本誌の構成は、「第1部 この20年を振り返って」、「第2部 図書館に想う」、「第3部 図書館の文庫・コレクション」及び「第4部 資料編」の4部としました。
- 「第1部 この20年を振り返って」の主な記述の範囲は、高槻キャンパスに高槻図書室を設置した平成6（1994）年から平成26（2014）年7月までの約20年間としました。また、各時代のエポックメイキングな出来事をチャプターとしてまとめています。

ただし、この20年の間に、アウトソーシングの拡大、図書館組織の改編、事務職員数の減少等もあり、図書館にとって大きな変革の時代でもありました。そのため、掲載した原稿の一部については、忠実に当時の状況や経緯を説明できていない場合がありますが、執筆者それぞれが、懸命に当時の資料や記録にあたって作成したもののご理解ください。

- 「第1部」のチャプターの区切りとして「図書館コラム」を挿入しました。これは、本学図書館にまつわるエピソードやこぼれ話、図書館職員それぞれの思い出等を執筆したものです。
- 「第2部 図書館に想う」では、図書館に縁の深い方々にご寄稿いただきました回想やエピソードを収載しました。
- 「第3部 図書館の文庫・コレクション」では、関西大学図書館の旧機関誌にあたる『籍苑』第20号に本図書館の個人文庫を紹介しておりますが、それ以降に設けられた新たな個人文庫及び特別コレクションを紹介しております。
- 「第4部 資料編」では、第1部及び第2部を補完するために、関連する資料及びデータを収録しました。
- 「第1部 この20年を振り返って」及び「図書館コラム」は、平成26（2014）年現在、図書館事務室に勤務する専任事務職員の分担執筆という形をとったため、文体の相違や言葉の揺れ等がありますが、執筆者の意図を尊重し、調整は最小限にとどめました。

第1部

この20年を振り返って

高槻図書室開館

広瀬雅子

総合情報学部の開設と第2部の移転

平成6（1994）年4月実施を目指した「高槻校地の利用計画の推進」と「学部第2部の千里山学舎への移転計画」の2大プロジェクトが、計画・立案・具体化されたのは、昭和から平成にかけての頃のことであった。

大学設置基準に満たぬ校地面積を充足するために取得した高槻の地に設置されることになったのは、「21世紀をリードする情報ジェネラリストを育成する」文理総合型の総合情報学部であり、夜間に授業を行っていた第2部を同時期に天六学舎（当時）から千里山学舎（当時）に移転することも発表された。

大学全体で取り組んだ一大プロジェクトであり、高槻図書室（開館当時の名称）の立ち上げと、第2部学生のための天六分館の閉館やその所蔵資料の処理、そして千里山の総合図書館での第2部授業への対応と、図書館でも様々なことを同時並行で行うことになった。

天六分館について

専門部、関西甲種商業、第二商業の学生生徒のために昭和4（1929）年に誕生した関西大学図書館の天六分館は、大阪市北区長柄の天六学舎4階に位置しており、夜間の授業を受ける学生のために朝早くから夜遅くまで開館して、小規模ながらも充実したサービスを提供していた。千里山の総合図書館所蔵資料のカード目録を備え付けて、熱心な学生のために資料の取り寄せサービスを実施しており、また、司法試験や公認会計士の受験勉強に日曜日も含めて毎日利用する人も多かったという。

第2部の移転にかかわる動き

平成3（1991）年に新学部設置委員会が発足したが、新学部の図書室はあくまでも新学部のための組織であり、全学的な委員会や文部省（当時）への認可申請事務とのかかわりなど図書館主体で動くことが難しい状況にあった。そのため図書館としては、まずは第2部の千里山移転に伴う総合図書館の開館時間の見直しと、天六分館所蔵資料の扱いが大きな課題であった。

当時、授業期間中の天六分館の開館時間は9：00～21：30、日曜は13：00～20：00だったが、移転後の第2部学生を受け入れる総合図書館では9：00～20：00で日曜は閉館しており、天六分館と同じ開館時間及び日曜開館を実現することはなかなか大変なことと思われた。平成4（1992）年に行われた移転に係る法人、大学、学生（2部学友会）の三者懇談でも、図書館の開館時間にかかわる要請が学生からなされている。

また、第2部の授業終了時刻が21：10であり、文部省が授業終了後30分は開館するよう指導していたことから、21：40まで開館する必要があるとの論議や、22：00まで開館して欲しいと教学部長から打診があるなど、様々な要望が寄せられた。

天六分館所蔵の10万冊余の蔵書についても、新設される図書室への転用を含めて、天六分館事務室での検討が始まった。

天六蔵書の内、昭和58（1983）年以降受入の図書は、当時TRC（図書館流通センター）から目録データ付きで購入しており、図書館システムで必要な詳しい書誌情報を持っていたことから、学習用資料として活用できるものは、選書をした上で、現行装備のまま高槻図書室で学習用の図書として運用することとなった。「天六」を示す背ラベルのロケーション「T」は「高槻」と読み替えられた。またその残りの一部は、背ラベルとデータの一部を変更して、総合図書館の学習用開架資料とすることが計画された。

それ以外の蔵書については、除籍・抹消することを前提としたが、重複調査を行って、一部を総合図書館の研究用資料として編入受入することになった。

新学部図書室の施設と資料

新学部図書室の施設・設備については、まずは平成4（1992）年3月に、施設課からの依頼に基づき図書館で「高槻校地における図書室部分についての図書館の考え方」を作成、その後管財局から図面が提示された。座席数190余り、図書収容能力5万冊と規模は小ぶりながら、器具・備品などは総合図書館とほぼ同一レベルを維持することが目標とされ、AV資料、マイクロ資料を閲覧するための機器や情報検索に必要なパソコンなど、一通りの設備を備え付けた図書室が計画された。

新学部設置用図書については、文部省への認可申請とのかかわりが大きく、設置委員会が選書リストの作成などの準備をすすめていたが、その後図書館への協力要請があり、図書館が原案を作成した。

教員や図書館による選書作業と並行して、設置用図書の金額・冊数、固定資産・消耗図書の割り振りなどが詰められ、平成5（1993）年6月提出の二次申請に図書13,000冊、雑誌60タイトルと明記された。

また、資料の整理については、納入業者に全面委託することになり、新学部図書室のためのロケーションや資料の配架方法、登録番号や装備についても決められた。

開館へ向かって

新学部開設の半年前に高槻キャンパス事務局が発足することになり、その半年前に図書館から2名が異動内示を受けた。開館まで1年となり、新図書室の枠組みが確定され、具体的な準備作業が進められた。

新図書室の開館時間については、平日9：00～20：00、土曜日9：00～17：00、日曜日は閉室することになった。施設同様サービスについても、総合図書館と同一レベルを維持することが基本とされた。新図書室で不足する資料については総合図書館の資料を利用できるようにするため、予約や搬送についてのしくみが整えられた。新図書室用の配架場所コードを新たに設定

し、2館で滞りなく運用できるように閲覧システムが改訂された。

規程についても検討がすすめられ、必要な改訂が行われた。

また、新学部選出の図書委員が全学図書委員会に参加することになり、それに先立って開設半年前から新学部開設準備委員の教員がオブザーバーとして図書委員会に参加することになった。

総合図書館の対応

第2部を迎える総合図書館の開館時間についても様々な論議があったが、最終的に学生のための資料を配架している開架閲覧室のみ、開室時間を21:30(休業期間中は20:00)まで延長して、日曜開館も行うことが決定された。開架閲覧室以外はそれまでどおり20:00(休業期間中は18:00)までの開館とした。

なお、第2部移転6年後の平成12(2000)年には、アウトソーシングの導入によって開架閲覧室以外についても22:00までの開館が成し遂げられ、開館時間にかかわる第2部移転時の課題がようやく解消された。

高槻図書室の開館

文部省による新学部設置用図書の事前実地調査は、高槻キャンパスに完成していた創立100周年記念セミナーハウス高岳館で平成5(1993)年秋に行われた。翌年2月に、保管されていた図書と雑誌が完成した高槻図書室に運び込まれると、いよいよ図書館をあげての開館準備作業が始まった。

3月上旬には3日間のべ50名以上の図書館職員が動員され、図書の納品・検収作業を行い、3月下旬の天六分館閉館後には、同じく30名以上が動員されて天六分館から高槻図書室に運び込まれた資料約11,000冊の配架調整に携わったのである。

平成6(1994)年4月、ついに総合情報学部が開設され、高槻図書室がオープンした。同時に第2部が天六から千里山に移転し、総合図書館は開館時

間等を変更してそれに対応した。

高槻図書室の図書費は、完成年度までは図書館予算とは別枠の総合情報学部創設経費予算で計上され、図書館の共通的な予算や基本図書費などは充当できないことが確認された。収集・整理業務は基本的には総合図書館が担当したが、選書は高槻図書室、総合図書館、教員で共同して行うことになった。単館で図書館活動のできる蔵書を構築できるような選書が求められた。

大学院総合情報学研究科の発足

完成年度をむかえた総合情報学部は平成10（1998）年4月に組織変更が行われ、高槻図書室は図書館組織に組み込まれることになった。総合情報学部用の図書予算も図書館予算に組み込まれ、全学部の共通予算や基本図書費などによって高槻図書室の資料を購入することも可能になった。

学部の完成に当たって大学院修士課程が設置されたが、社会人が働きながら学べる昼夜開講制をとることが特色の一つとされ、天六キャンパスにサテライト教室が設けられた。学生は天六キャンパスで講義を受けると共に、高槻キャンパスとのテレビ会議システムを利用した講義を受講することができ、新たに設置されたデータライブラリで新刊雑誌や参考図書、パソコンなどを利用することが可能となった。また高槻キャンパスに新設された大学院施設（D棟）にもデータライブラリが設置され、大学院生の研究環境が整備された。昼夜開講制は現在も行われているが、天六キャンパスでの受講生は減少の一途をたどり、その後いずれのデータライブラリの機能も高槻図書室に移っている。

（ひろせ まさこ）

阪神・淡路大震災

高橋真澄

平成7（1995）年1月17日早朝、阪神・淡路大震災が発生し、6人の本学学生・生徒・教職員が犠牲となった。その日は年度末試験の開始直前に当たっていた。朝から試験の実施や図書館の開館に関する問合せで図書館の電話は鳴りっぱなしであった。午前9時には、当日の試験の延期が決定され、11時には図書館も閉館を決め、被害状況の調査、館員の安否確認等を行った。当時、図書館には次長以下55名の専任職員が勤務しており、幸いにも人災に至る被害はなかったが、7名が、交通手段が絶たれた結果、通勤できない状況となっていた。

建物には段差が生じ亀裂が走った。天井の防煙ガラスが7枚破損した。書庫で図書が落下したのが約3,000冊、レファレンス室においても同じく約3,000冊であったが、最も落下散乱がひどかったのが貴重書庫であった。和漢書とともに主として線装本であり、横には並べず、棚の上に間隔をおいて置いてあった。一冊一冊が薄くて軽いため、書架から飛び出しやすく、落下し散乱したものは約5,000冊に及んだ。貴重書に関しては、装丁の違いにより和書よりもハードカバーの洋書の被害が大きかった。また、天六キャンパス4階天六分館の書架も倒れ、窓を破る恐れもあった。

幸いにして当館の被害は相対的に軽微であり、利用者からも本の貸出や開館を望む声も多く、翌日18日の午前10時には図書館を開館し、職員の安否調査と管財局への建物、設備、什器備品等の被害状況報告を行った。特に、貴重書の修復費用として、専門業者からは約267万円と試算された。管財局で取りまとめた結果、大学全体の被害状況が明らかになった。被害総額は約1億3,000万円に達した。うち、総合図書館および情報処理センターの被害総額は、先ほどの貴重書の修復費に加え、ガラス破損が約130万円、壁・床

等の亀裂が約 200 万円等、合計で約 600 万円であった。

翌 19 日には学年末試験を実施し、図書館はこの日より通常どおり 9:00～21:30 の開館を行った。17 日と 18 日分の試験については後日、振替実施することとなった。また、1 月 19 日～28 日までの試験期には、図書館内が混雑するため、第 1 学舎と第 2 学舎のゼミ教室を自習室として開放した。

20 日には、教職員の被害に関して、1 月 21 日～30 日の間、ボランティアを派遣することとなり、図書館職員も 21 日から参加し、被災者に救援物資を届ける等の活動を行った。

23 日に、関西学院大学から、同大学の学生や図書館に被害があり、入試明け以降、当館の利用について協力依頼が入り、できる限りの協力を行う旨返答した。また、全学的な取り組みとして、被害学生・生徒への義援金の募集を行うこととなり、24 日から総合図書館内 2 箇所にて義援金募金箱を設置した。募金は、家屋の全焼・全壊または学費支弁者の死亡等により、学生生活の継続が困難な学生に支給された。

同年 2 月 9 日～4 月 24 日まで、被害が大きく図書館の利用が不可能になった近隣大学のために、特別に学生が利用できる体制を整え、その旨を各大学に申し入れた。2 月 24 日に開催された私立大学図書館協会阪神地区協議会において、「今後、加盟校は学生証・教職員証により閲覧の便を供していく」との申し合わせが行われた。初日（2 月 9 日）には、甲南大学 38 名、関西学院大学 5 名、松陰女子大学 2 名、神戸大学 2 名、神戸薬科大学 2 名、流通科学大学 1 名、大阪市立大学 1 名、計 51 名が利用申込を行い、結果的に、上記期間を通じて学生が訪れ、その利用申込者数は 274 名に達した。

そして、図書館では、この震災に関連



震災時の貴重書庫

する資料を収集するために、平成7（1995）年度及び8（1996）年度予算から各500万円を割くことに決めた。平成7（1995）年10月、図書委員会により、テーマを設定した基本図書について、そのメイン・テーマとして「災害と環境破壊」（平成7～8年度実施）を決めた。また、次の6項目のサブ・テーマを設定した。すなわち、①災害の歴史と復興、②都市開発と災害、③ボランティア、NGO活動、④被災者と福祉、⑤環境保全、⑥阪神・淡路大震災の報道・記録である。これらのテーマに沿って選書・受入することとなった。

（たかはし ますみ）

新人時代の思い出

高松 和美

私が関大職員として図書館に配属されたのは37年前のことである。まだ、図書館が現在の博物館がある建物（簡文館）にあったころだ。当時、代々の新人は（と記憶しているが）、仕事に行き詰ったり、泣きたいときには、書庫6階にあったレファレンス室へ、「カード繰込みに行ってきます！」と言って2箱ぐらいの分類カードを手にして今にも壊れそうなエレベーターに揺られながら行っていたようである。かくいう私も6階へよく繰込みに行った。窓を開けると（当時は、もちろん今の法科大学院棟や総合図書館もなく）第1グラウンドからアメフトの練習する声や野球をする声が響いてきてのんびりとした時間だけが過ぎていく…そんな雰囲気の中で、一人黙々と繰込みをするのが、楽しみだったのを今でも鮮明に覚えている。先輩に怒られた時や泣きたい時にはそこで思いっきり泣いて、また仕事に励むということもしばしばだったと思います。

また、私の花粉症の一因を作った「ウナギの寝床」と呼ばれた小さな部屋で古文書等を整理したことも簡文館時代の思い出の一つである。薄暗くて近くにあった『大蔵経』の表紙が金色だったためとても怖かったし、換気が悪かったのかアレルギーを引きおこして辛かった。当時は「花粉症」という言葉さえもない時代だったため、薬もあまりなく、マスクと分厚いメガネ（スキーのゴーグルのような分厚さ）をかけて仕事をしたことも今となってはいい思い出である。あの頃はのんびりな時代だったと思う。

昔は、図書館員の仕事にセルフカード作成と繰込みがあった。今はすべてコンピュータ化されているが、簡文館時代の図書館においてセルフカードは、図書館蔵書を示す大事なカードだった。ある日、いつものようにセルフカードを繰込みしていて、何枚かをカードボックスの上に置き忘れて帰宅したことがあった。翌日、当時の課長に「セルフカードは図書館の命である！粗末に扱うとは何事ぞ！」と叱られたことがあった。だから、私の中では今でもセルフカードは大事なものである。何年前かにすべてのカードを廃棄処分した時には、とてもさみしい思いをした。諸先輩方の書いたカードが、自分が書いたカードが廃棄されていく…とは、夢にも思わなかったからである。

時代のながれ…、今後、図書館はどういう発展を遂げていくのだろうか？楽しみであるし、関西大学図書館100年の中で、少ない年数ではあるが、自分が図書館員として仕事ができたことは誇りでもある。

（たかまつ かずみ）

図書館システムの変遷

徳岡久実
濱生快彦

KULPIS——雑誌管理システムからスタート

本学図書館の機械化の歴史は、昭和 52（1977）年に遡る。当時はメーカーが提供するソフトで本学の蔵書規模の管理運用に耐えるものが少なかったこともあり、大型汎用機をベースに独自開発する前提で図書館機械化構想が策定された。館長以下 10 名による図書館業務機械化プロジェクトチームが発足し、図書館内でプログラミング言語 COBOL の勉強会なども開催された。第 1 期の基本構想では、図書館業務をトータルシステムとして機械化することを前提に、可能な部分から順次開発することとなった。また、システムは独自開発するだけでなく、稼働後の保守やシステムの修正も図書館職員が行うことを基本方針としていた。この方針のもと、最初に開発されたのが関西大学学術雑誌管理システム（*KULPIS*：Kansai University Periodicals Information System）である。

KULPIS は昭和 52（1977）年 1 月にプロジェクトチームが発足し、同年 12 月に機能の一部がリリース、本格運用開始は昭和 53（1978）年であった。*KULPIS* では、逐次刊行物の受入管理、発注・契約管理、支払、予算管理、未着管理、製本管理など、逐次刊行物に関するほぼすべての業務がシステム化された。

総合図書館開館に伴う閲覧・蔵書検索システム稼働と 簡易目録データ作成

続いて昭和 60（1985）年の総合図書館開館にむけて、昭和 56（1981）年

に第1次図書館業務機械化中期計画が策定され、サービス機能を重視した閲覧貸出システムの開発が開始された。プロジェクトチームが編成され、事務共用マシン（富士通大型汎用機）上での自館開発を目指したのである。

本学としては例のない規模の新しい図書館の開館にむけて、新規に受け入れる開架学習用図書約10万冊については、図書館流通センター（TRC）社のTRC/MARCをJAPAN/MARC仕様に変換して目録データベースを作成することとなった。また、旧千里山本館と専門図書館の書庫図書については事務用書架目録（シェルフカード）のコピーに朱書きで指示してデータパンチを外注し、100万冊の図書について請求記号、登録番号、書名、巻数表示のみの最低限のデータを登録した。図書のデータに加え、雑誌については前述の「KULPIS」からデータを抽出し、閲覧貸出システム用の「図書マスタ」と「逐刊マスタ」を完成させた。

また同時に全学の下承をえて、利用者データの提供を受け、貸出用の「利用者マスタ」とした。これらの作業をかなりの過密スケジュールで遂行し、昭和60（1985）年4月11日の関西大学総合図書館開館式と同時に、閲覧貸出システムと利用者用蔵書検索システム「KUL」が稼働したのである。この「KUL」については、その後大幅に改定されて「KUL-II」として学外から電話回線でも利用できるようになった。平成5（1993）年度には収書整理業務システムである「目録システム（図書）」、翌年には同じく「目録システム（逐刊）」を稼働することにより業務システムの電算化するなわちトータルシステムとしての完成を見ることができた。

この頃の蔵書検索システムは大型汎用機の下で運用しており、画面表示も黒画面に緑文字のものであった。学習用図書はTRC/MARCを採用しているので詳細な目録データを確認することができたが、書庫図書については書名と巻号のみの簡易データのみ情報が圧倒的で、アンバランスな状態であった。

その後、蔵書の急増により目録カードの繰り込み等の作業が負担になったこと、目録カードを置くスペースも厳しくなってきたこともあり、目録カード検索から蔵書検索システムへの移行にむけて平成5（1993）年度から「目

録情報週及入力7カ年計画」もスタートしている。必要最小限の情報しかない簡易データを文部省の共同利用機関である学術情報センター（NACSIS）の総合目録に蓄積されていた目録データに検索をかけて、ヒットしたものを関大仕様の目録データに置き換えていったのであるが、これは総合図書館開館時に全蔵書の図書マスタを構築できていたため、これを基礎にして目録データの週及を進めることができたのである。

KOALA — インターネット版蔵書検索システム

当時の本学図書館システムが使用していた大型汎用機は事務共用機で、図書館システム以外に学籍管理、成績管理、財務管理、人事管理など大学内の他のシステムも運用されており、セキュリティの観点から外部との接続は一切行っていなかった。また、図書館の開館日程に関わらず、図書館システムの運用がコンピュータの保守日に左右されるという問題も抱えていた。その後、1990年代から「電子図書館」という言葉も頻繁に使われるようになり、本学図書館でも平成6（1994）年度にプロジェクトチームが発足し、「学術情報システム拡充計画（第2期構想）」として、大型汎用機からUNIXマシンによるクライアントサーバー方式のシステムへの移行を模索することとなった。

「インターネット版蔵書検索システム」はその第2期構想の第1次中期計画の目玉として、図書館運営課（当時）の電算処理係が中心となって平成8（1996）年度から着手、平成9（1997）年度のテスト運用を経て平成10（1998）年4月から学内へのサービスを開始し、10月にはインターネットを通じて学外への公開へ至った。それまでの蔵書検索は図書館内の閉じたサービスであったが、インターネット版蔵書検索システムではまず学内公開の段階で、学内LANに接続されたパソコン、例えば個人研究室などからは簡単に利用できるようになり、秋からはインターネットを通じて学外の自宅等のパソコンからの検索も可能となった。

このシステムは Kansai University OPAC for the Library の略称として

「KOALA（愛称コアラ）」と名付けられた。この KOALA では「あらかじめタイトルや著者名が分かっている場合」と「調べたいテーマから検索する場合」の2種類の検索方法を用意し、分類記号からの検索も可能とした。また利用者に分かりやすいように分類記号をナビゲートする機能も用意した。所蔵情報は高槻図書館（当時）をも含むかたちで表示され、該当資料の利用状況は1時間おきに更新されるため若干のタイムラグはあったものの、ほぼリアルタイムの利用状況も反映されていたのである。

「KOALA」とほぼ同時期に雑誌取次大手の Swets 社が提供する雑誌の目次データを利用した「洋雑誌目次検索システム」も開発され、平成10（1998）年10月よりサービスを開始した。これにより約14,000タイトルの洋雑誌について最新の目次情報が検索可能となった。さらに「KOALA」英語版及び「洋雑誌目次検索」システム英語版についても自館開発を進め、平成11（1999）年度よりサービスを開始している。また、その後の「KOALA」においても配架場所別の検索機能も追加して検索可能とするなど、常に改良を加えていった。

LINUS——図書館業務用パッケージの導入

平成14（2002）年には本学図書館初となる図書館業務用パッケージシステム LINUS（日本電子計算社）が稼働した。システムの変更に合わせて、これまで蓄積してきた関大仕様の JAPAN/MARC を中心とした書誌データを、大学図書館で主流となってきた国立情報学研究所（NII）が提供する NACSIS-CAT 形式に準拠することを決定した。LINUS の導入にあたり、図書館がこれまでのシステム開発・運用のなかで培ってきた経験やスキルを活かすため、新たな機能拡張に関してはメーカーとの共同開発を行うことが前提となった。このため、システムリリース後も、図書館の各業務担当者と SE が共同で機能拡張のための検討を継続した。このパッケージソフトを前提とした運用をベースとしつつ、これまでのノウハウを活かして、業務担当者やシステム担当者が、メーカーと協力する形で、オンラインサービス（利

用状況照会・予約・貸出更新等)などの新たなサービスを展開することとなった。汎用機をベースに独自開発により開始された図書館業務の機械化は、運用担当者とシステム担当者の連携をベースに、順次システムの拡充を進めてきたが、最終的にはメーカーとの協働という形でひとまずの完成をみたということができよう。

iLiswave — 業務用パッケージのリプレース

平成 14 (2002) 年から稼働した本学初のパッケージシステム LINUS は、先に述べたとおり、業者と運用担当者、システム担当者が協力し、本学の運用に合った形で機能の整備を進めてきたが、平成 18 (2006) 年 8 月の教務センターの発足と同時に実施された事務組織改編による図書館 1 課体制への移行と、図書館所属職員の減少などの理由で、図書館事務室内にシステム担当専門の職員を維持することが困難となりつつあった。また、稼働後 4 年が経過し、サーバーの容量不足が問題となったこと、文字コードが多言語表示に対応しておらず、様々な言語を表示する上での制約があったことなども大きな課題であった。ちょうどその頃、全学的な IT 化推進プロジェクトが本学の情報担当部門で構想されたため、そのプロジェクトの一部として、平成 19 (2007) 年秋の運用開始を目的に新たな図書館パッケージへの移行 (リプレース) が進められることとなった。その際、システムを専門として担当する職員の配置が困難となったことを考慮して、できるだけパッケージの標準機能を使い、本学独自のカスタマイズは最小化するという方針で新たなシステムへの移行が計画された。

選択されたパッケージは富士通の *iLiswave-J* (V1) であったが、このソフトの選択は、200 万冊以上の蔵書をもつ図書館への導入実績が決め手の一つであった。*iLiswave-J* をできるだけカスタマイズしないという方針のもと、システムの窓口担当を 1 名設置し、各業務担当者と富士通の SE が業務単位ごとに、*iLiswave-J* が想定している業務フローで業務の遂行が可能かどうか、カスタマイズを実施しなければならない点はどこかを確認していった。

データ移行と運用テスト

データ移行にも課題があった。システム・リプレースにあたって、全蔵書の書誌・所蔵データを移行するにあたり、データベースに格納されているテーブルとコードのそれぞれについて、新システムに移行が必要なものと、不要なものとの判別ができない状態になっていたためである。そこで、データ移行に関して事務長のもとにプロジェクトチームを作り、すべてのテーブルの各コードの値について、プログラムでチェックをかけるなどの点検を行い、データ移行の対象を決定していった。最終的な移行データは、図書書誌データ 1,794,011 件、雑誌書誌データ 31,892 件、図書所蔵データ 2,320,845 件、発注データ 39,909 件、継続発注中データ 14,523 件、雑誌一括所蔵データ 56,832 件であった。

データ移行と並行して8月上旬の10日間を運用テストの期間にあて、ほぼすべての職員が実際に使用する予定のパソコンを使った検証を行った。想定する業務フローを、それぞれ実際の画面を使って点検し、起こりうるエラーと生成されるデータや処理のパターンをリスト化して点検した。この時に発見された障害、改善要望、質問などのうち、対処が必要と判断されたものの件数は350件に上った。学生の夏季休業明けの9月下旬のリリースを目指していたこともあって、これらの課題については優先順位をつけ、リリースまでに必ず対応が必要なものを仕分けて改善を依頼した。リリースの直前には、図書館内に作業場所を設け、富士通のSEが課題を指摘した職員と直接に連絡が取れる体制をとり、迅速な課題解決に取り組んだ。その結果、予定通り平成19（2007）年9月18日に稼働に漕ぎつけることができた。

このリプレースにより、OPACで多言語での検索・表示ができるようになった。また、LINUSではプログラム修正の際に図書館員が改修モジュールを手動で個々のパソコンにインストールしていたが、iLisでは個々のパソコンに対応する必要がなくなったことも運用面での負担軽減につながった。このリプレースにより、汎用機を使い独自開発を開始して以来、計画的にシステムの担当者を育成してきた時代が終わり、システム担当の役割が、業務

委託業者を含めた運用担当者からの障害の連絡や改善の要望を受け取り、関係する別の担当者との調整を行ったうえで、それらをメーカーに伝えること、またその改修の計画的な実行を管理するということに変わったといえるだろう。この時点でプログラミングができる職員は図書館からいなくなり、いわゆるプロジェクト・マネジメントが図書館のシステム担当が担う業務の中心に変わったという点でも、システム・リプレースは、一つの時代の終わりを示す出来事であった。

(とくおか くみ)

(はまお やすひこ)

エレベーターにまつわる話

吉田 有輝

総合図書館内のエレベーターを利用した時に、通常のエレベーターに比べ、ゆっくりとした速度に感じたことはないだろうか。1階から3階までの移動に約30秒もの時間を要している。

その理由は、エレベーターの設計がロープ式か油圧式なのかの違いがある。関西大学第2学舎4号館内のエレベーターは、1階から3階までの移動を約20秒で行うことができる。このように、一般的な速度で動く設計はロープ式と呼ばれている。屋上などの最上部に巻上モーターなどの機械を設置する必要があるが、油圧式に比べると記述したように速度が速く、消費電力も少ない。一方の油圧式は、油圧パワーユニットと油圧ジャッキが圧力配管でつながれているため、ロープ式とは異なり、機械室の場所を建物内に自由に設計することができる。建物の上部に荷重が掛からないといった利点もあるが、ロープ式に比べると油圧ジャッキを用いているため、昇降行程および速度に限界がある。

関西大学千里山キャンパスの大半は、大阪府が昭和45（1970）年に風致地区に指定しており、建築物その他の工作物の新築・改築・増築又は移転を行う際は、建物の高さが地上15メートル以下であることが義務付けられている。総合図書館の設置場所も大阪府が指定した風致地区に該当しており、地下2階、地上3階からなる高さは、風致地区により指定されている15メートル以下の制限数値ぎりぎりの高さとなっている。

つまり、総合図書館の設置場所が風致地区に指定されている以上、これを満たす条件の下に建設せざるを得なかったのである。昭和50（1975）年12月17日に、各学部推薦の委員6名と学長推薦の委員4名（後に5名）および図書館長からなる関西大学図書館総合計画委員会が組織されたのを機に、昭和60（1985）年の総合図書館の開館までの間に機能やデザインを検討している段階において、建設する高さを考慮した結果、屋上に巻上モーターなどの機械を設置することができず、油圧式エレベーターを採用することとなったと言えよう。

もし、風致地区という指定がなければ、総合図書館は地上3階以上の高さとなり、エレベーターも油圧式ではなくロープ式の設計になるなど、様々な機能やデザインが現在の総合図書館とは大きく異なっていたかもしれない。

（よしだ ゆうき）

図書館ビジョン7項目の制定

濱 生 快 彦

成立の経緯

図書館ビジョン成立当時、図書館には図書情報管理課、閲覧サービス課、レファレンスサービス課、学術資料課の4課があり、それぞれの課長と図書館次長が、図書館長とともに図書館運営に関する事項を「審議または協議し、かつ連絡調整を図る」ために図書館課長会議が設置されていた（以下、課長会議と記す）。課長会議の記録によれば、図書館ビジョン7項目は、もともと平成9年度第14回課長会議（平成10（1998）年3月30日開催）にて、「平成10年度の図書館運営について」という議案が協議されており、その中で「図書館における短期・中期の将来ビジョンを策定」することが提案されたことがその発端である。この課長会議では、図書館の公開やアウトソーシングなど、図書館の今後の方向性を定めるため、図書館次長のもとに「図書館ビジョン策定チーム」を発足させることが提案され了承されている。「図書館ビジョン策定チーム」のメンバーは、図書館次長が課長会議の了承を得て4～5名を指名することとなった。

年度が替わり平成10年度第1回課長会議（平成10（1998）年4月7日開催）では、「図書館の『将来ビジョン』策定チームについて」が提案され、図書館次長のもとに各課から中堅職員5名がメンバーに指名されることとなった。この時点では、チームの検討は同年の4月から6月までとされ、「軌道修正や新たな転換を図る必要が生じたときは」7月以降にも検討を継続することとなっていた。これは、ビジョンを基に具体的な施策やサービスを検討する必要があるため、ビジョンは年度の初期に設定しなければならないとの判断があったためである。その後課長会議にて、検討の結果が資料とともに報告されるのは、平成10年度第6回課長会議（7月9日開催）である。

第6回課長会で検討の成果として報告された7頁におよぶ「『図書館における短期・中期ビジョン』案（以下短期・中期ビジョンと記す）」は、次の4点を基本的な考え方（ビジョンの柱）として構想されている。

- サービスの積極的拡大を図る。
- サービス拡張のための環境整備を行う。
- 自己点検・自己評価による業務点検の強化を行う。
- 図書館のビジョン・施策の具体化を推進する。

それぞれの柱には、「図書館の公開」「開館時間の延長」といった具体的施策が列挙されており、これはビジョン策定チームが検討に際して、短期（概ね1・2年の間）・中期（2・3年の間）に実施すべき具体的施策の案を提示し、「それらを図書館の将来においてどのような構想（方向性の基本柱）として設定できるか」を検討して構想したことの反映であろうと思われる。この短期・中期ビジョン案は課長会議にて了承され、ビジョン策定チームはいったん解散されることとなった。短期・中期ビジョンには、このビジョンの具体化に向けた提案がなされており、これを踏まえ図書館内に「サービスを積極的に拡大する基本施策」、「サービス拡大のための環境整備・電子化」「インターネット等を中心とした新たなサービス提供」のそれぞれの項目についてビジョン策定チームのメンバーが1名指名され、そのもとに新たに3名以内のメンバーを加えた検討グループを発足させて、各項目の実現に必要な調査、検討、実施計画の立案を担うこととなった。平成10年度第7回図書館課長会議（7月23日開催）にて、図書館次長から各検討項目の担当に指名した3名の職員を、ビジョン具現化の検討に集中させるために一時的に各課の課業から外すことが報告されており、短期・中期ビジョンの提案直後からそれぞれのグループで活発な検討が開始されたことが推測される。その後の具体的な検討についての詳細な記録は残っていないが、「短期・中期ビジョン」の具体化を検討する過程で、今後の図書館の方針を7項目として取りまとめることとなったものと思われる。平成10年度第9回課長会議（9月24日開催）では、新たな事業には予算化の手続きを要するため、ビジョンを早く示してほしいという意見があったことに対して、図書館次長から「7項目を想

定しているが、いずれも直ちに予算を必要とするものとは考えていないので、もうしばらく継続して議論を集中していきたい」との説明がなされている。すなわち、少なくともこの時点で、図書館の将来構想を7つの項目として取りまとめるというアイデアが検討されていたことが判る。

検討の成果が課長会議に審議事項として提出されたのは平成10年度第12回課長会議（11月11日開催）で、最終的に検討の成果が、「関西大学図書館が今後目指すべきこと」として了承されたのは、平成10年度第13回課長会議（12月1日開催）であった。このとき、同年12月5日に図書館ホール（当時）に図書館所属の全職員を集めて、披露・報告することが決定された。

ビジョンの内容について

ビジョン7項目の内容はその後、関西大学図書館ビジョン推進チーム「図書館ビジョンの推進について——関西大学図書館が目指す方向——」（『図書館フォーラム第5号』2000）として公表された。この報告を基に、ビジョン7項目の内容を確認することとする。

ビジョンはまず前文を示し、その後ろにビジョン7項目と各項目にいくつかの具体的施策を付記する構成となっている。前文では、①インターネット等に代表されるネットワークの発達、②従来の紙を中心とするものから、CD-ROMなどへの情報提供メディアの多様化、③目録情報のMARC（機械可読目録）化や電子出版をはじめとする情報のデジタル化を例示して、情報環境のデジタル化に対応する必要性を強調している。加えて、本学が文部科学省の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」に先立って、平成10（1998）年9月に策定された「関西大学の将来構想」に照らして、図書館がビジョンや目標を設定することの必然性を指摘している。

前文を受けて『「関西大学図書館がめざす方向」-そのビジョン7項目』では、次の7つのビジョンが設定された。

- (1) 学術情報を提供するためのメディアの多様性に対応しうる図書館をめざす。

- (2) 関西大学図書館といえすぐに思い浮かべられるような、本学図書館独自の事業を展開する。
- (3) インターネットなどを通じて積極的な広報活動を推進し、関西大学図書館の存在と特徴をアピールする。また、図書館ホームページでは広報的な情報以外に、可能な限りの情報サービスを展開し、「図書館電子カウンター」の役割を持たせる。
- (4) いわゆる「図書館の公開」を推進し、蔵書のより有効な活用をめざす。
- (5) 図書館が展開する諸事業を支えることができる人材の育成に努力を傾注する。
- (6) より有効な職員の活用が求められている本学の現状に対応するため、図書館のすべての業務を見直し、アウトソーシングの積極的活用を図る。
- (7) 業者パッケージの導入を前提に、図書館システムのUNIX化（＝オープンシステム化）を推進する。

これらの各項目に列挙された個々の施策の中にはその後実現を見たもの、別の事業として目的を達したと思われるものがある一方、残念ながら着手できなかつたものも散見される。個々の施策の一部については次章以降で経緯を述べるが、アウトソーシングの導入、利用者サービスの拡充、デジタル環境への対応などが問題意識の根幹として共有されていたことが推測できる。また本学独自の事業として、個人文庫の目録データ整備やバックナンバーセンターが構想されていたことも特筆に値する。

このビジョンのもとに、ホームページの全面改訂、Web-OPACの機能拡充、利用者サービスへのアウトソーシングの全面的導入、事務部門の統廃合、CD-ROM版内藤文庫目録の刊行などの事業が推進された。また平成12(2000)年3月には、山野博史図書館長(当時)が全職員を集め、ビジョンに基づいて「ビジョンの実現に向けて図書館が一丸となって取り組むこと」「個性的かつ独創的な仕事を、智慧をしぼって全員が共有できる業務への深化させること」「マンネリズムと固定観念を排して、積極果敢に業務の充実を図ること」「各自が仕事の優先順位を誤ることなく、館内での情報公開や政策展開を公

正かつ明朗に推し進めること」との指示をした。これを踏まえ、図書館内にビジョン実現の推進母体として図書館次長のもとに図書館3課の課長補佐職を集めた「図書館ビジョン推進会議」が設置された。この図書館ビジョン推進会議のもとに、平成12年度第6回課長会議（7月13日開催）にて、以下のプロジェクトチームが設置されることとなった。

- 研究者サービス検討プロジェクトチーム
- オープンシステム化検討プロジェクトチーム
- アウトソーシング活用プロジェクトチーム（収集整理部門）
- アウトソーシング活用プロジェクトチーム（閲覧部門）
- オンラインサービス充実プロジェクトチーム

これらのプロジェクトチームの検討の成果が、その後の図書館サービスの充実に寄与することとなった。

ビジョン7項目のその後

ビジョン7項目成立の経緯をたどってみると、その後の図書館の転機となる試みが多く含まれていることに改めて気づかされる。大型電子資料導入のための環境整備や、整理業務のNACSIS-CATへの準拠、ホストコンピュータで運用していた自館開発の図書館システムからUNIXマシンによるパッケージシステムへの移行、閲覧サービスのアウトソーシングの導入と開館時間の延長など、多くの施策がビジョン7項目実現の一環として研究され、実行されてきた。また、その実施計画を検討するに当たって、図書館内の多くの若手職員がプロジェクトチームのメンバーとして参画したことも、ビジョン7項目の5番目に記されている「図書館が展開する諸事業を支えることができる人材の育成に努力を傾注する。」ことに寄与したものと思われる。

最後に、ビジョンに記されたものの実現されなかった項目について少し触れることとしたい。たとえば、ビジョンを受けて図書館ホームページがリニューアルされたものの、ビジョンの3番目の実施施策として補足されていた「図書館のサービスの内容を積極的に広報することにより、大学構成員、特

に研究者の積極的な協力を得て、そのニーズにあった新たなサービスを展開する」ことには至っていない。実現できなかったものは、その後の情報環境などの変化や現在の図書館サービスの観点を踏まえれば不要と思われるものもあるのは事実である。しかしその一方で、開館から100年を迎える今、改めて「やり残していること」が残っていないか、あるいは「なぜできなかったのか」を点検することが次の100年へ向けての取り組むべき課題の一つと言えるだろう。

なお、平成21（2009）年4月15日(水)総合図書館第一会議室にて開催された平成21年度第1回図書委員会記録の報告事項にこのような記述がある。「2『図書館ビジョン7項目』の廃止について“図書館が独自に策定してから、10年以上が経っており、現状にそぐわない内容であるため廃止する。なお、前述¹⁾の大学の中期行動計画に基づき図書館の運営を行っていきたい。”」

平成10（1998）年12月5日16:30に総合図書館3階図書館ホール（当時）に、図書館4課の全職員を集め、披露・報告された「図書館ビジョン7項目」はこの日、その役目を終えたのである。

注

1) 前述の大学の中期行動計画とは、学長から図書館長に依頼があり、「図書館中期行動計画（平成21（2009）年度から4か年度）」として策定したものである。図書委員会資料に記されていたその内容は、1利用者エリアの再編整備（平成21（2009）年4月～平成23（2011）年3月）、2閲覧座席の増設（平成21（2009）年4月～平成22（2010）年3月）、3私立大学図書館協会会長校としての業務遂行（平成21（2009）年4月～平成23（2012）年3月）であった。

（はまお やすひこ）

図書館におけるアウトソーシング

高橋 真澄

平成 10（1998）年 12 月に策定された本学図書館の将来にめざす方向、すなわち、「ビジョン 7 項目」の 6 項目目に「より有効な職員の活用が求められている本学の現状に対応するため、図書館のすべての業務を見直し、アウトソーシングの積極的活用を図る。」とアウトソーシングについて謳っている。

アウトソーシング導入は、専任職員と委託スタッフとの共同体制を確立し、その体制の中で課題を発掘し、問題解決に取り組み、業務改善のための企画・立案等に能力を十分発揮して、サービスの向上に結びつけることを目的とする。資料収集・整理業務については、昭和 60（1985）年度の総合図書館の開館に伴う図書館業務の機械化計画の一環として開館前から準備を行い、昭和 58（1983）年度から、開架図書の整理業務および MARC 作成、並びに書庫和書の整備作業を株式会社図書館流通センター（TRC）に委託していたが、総合図書館の開館後も閲覧業務のアウトソーシングについては未着手であった。

閲覧業務のアウトソーシング導入に当たり、(1)図書館業務全般の詳細な業務分析をおこない、その結果に基づき、業務のスリム化をおこなうとともに、専任職員が行うべき業務と、アウトソーシング可能な業務とを明確に区別すること、(2)アウトソーシングに伴い、サービス内容・時間、職員数、業務組織、などの再検討を行うこと、(3)業務組織の再検討にあたっては、相互に情報支援できるような組織機構の構築を行うこと、が検討された。平成 11（1999）年 12 月、翌年度の予算申請（申請額は 3,000 万円）として「図書館のアウトソーシング導入計画（要望骨子）」を提示し、3 か年計画を 2 年に圧縮して（第 2 年目を第 1 年目に繰り上げて）実施することについて了承された。

そして、2 年間の導入期間を経た平成 14（2002）年度には、メインカウ

ンター業務、開架カウンター業務、書庫業務、エントランス業務、相互利用業務、レファレンスカウンター補助業務及び特別作業（各種ガイダンスの一部、現物照合、図書のリタイア作業等）を委託業務内容とし、アウトソーシングを推進し、サービスを拡大していった。アウトソーシングの状況を業務別に概略を説明する。

閲覧業務のアウトソーシング

図書館の閲覧部門にアウトソーシングを導入することは、図書館運営の効率化と利用者サービスの拡大、安定したサービスの向上を実現するためであったが、最終的な目標として、エントランス、開架、メイン、書庫の各カウンターにおける利用者対応の必要なすべての業務をアウトソーシングすることであった。つまり、カウンターに常駐するのはアウトソーサーのみとする体制を構築することであった。図書館のカウンター業務は、繁忙期、閑散期を問わずに利用者にとって一定の能力と知識を有したスタッフ（質的レベルが一定）による継続的サービスが求められていた。平成12（2000）年度には日曜・祝日、夜間のカウンター業務を業務委託して、開館時間の延長と開館日数の増加を実現し、専任職員の人事異動に伴うサービスの低下を避けると共に、外部のプロにサービスを安価に委託することで、業務安定と対費用効果を図った。

閲覧業務委託日数・時間として、平成12（2000）年度の委託日数296日、委託総時間数1,579.5時間、平成13（2001）年度の委託日数298日、委託総時間数3,698.0時間と設定した。また、委託要員の条件として、(1)現場に常駐する、委託業務の責任者を設定すること、(2)責任者は、司書資格を有する図書館業務の経験者であること、(3)その他の要員については、司書資格、またはそれに準じた能力・知識を有する者であること（図書館業務の経験があればなおよい）、(4)必ず男女両性で構成すること、(5)エントランスカウンター（常に1名が常駐する）を除き、授業・試験期間中においては、各部署とも2名以上、その他の期間においては、メインカウンターに2名以上、そ

の他の部署に1名以上の要員が、最低限常駐するようにすることとした。

委託先については、委託業務内容を提示し、3社より競争見積もりを取り、平成12（2000）年1月末に、株式会社オリファ大阪支店（平成15（2003）年9月にリクルートスタッフィング株式会社に営業譲渡された）に委託することを決定した。アウトソーシング導入の準備を進め、平成12（2000）年3月中旬に図書館業務および図書館システムの説明、学内・館内案内、並びに各カウンターの業務実習を中心に委託業者の研修を行った。

そして、平成12（2000）年4月から、閲覧サービス部門においてアウトソーシングを導入した。具体的には、(1)メインカウンター業務、(2)開架カウンター業務、(3)書架業務、(4)エントランスカウンター業務を委託したが、レファレンス業務については、本学図書館のコア業務として位置付け、引き続き専任職員が担当していた。同時に、平成11（1999）年度には図書情報管理課、閲覧サービス課、レファレンスサービス課、学術資料課の4課、専任職員51名体制であった図書館組織が、平成12（2000）年度には、運営課、閲覧参考課、学術資料課の3課、専任職員46名体制となった。

さらに、平成18（2006）年8月に3課は「図書館事務室」に統合されて現在に至っており、専任職員も漸減し、平成26（2014）年度現在、専任職員は次長以下20名、契約職員1名であり、この20年で約3分の1になった（表1参照）。

また、アウトソーシング導入を機に、平成12（2000）年4月から日曜日開館に加えて、祝日も開館するとともに平日の開館時間を30分延長して22時までとし、開館時間の延長と開館日数の増加が実現された。それまで書庫、一部のフロアに設けていた日・祝日の利用制限を無くし、原則開館時間中は、全てのフロアを利用できるようにした。（表2参照）

当初は、閲覧参考課職員が委託スタッフにOJTを日々行い、専任職員が不在である休日や夜間に生起するシステムダウンや急病人の発生等の緊急事態にも対処できるようマニュアルを整備した。平成12（2000）年8月からは専任職員と委託スタッフとの業務連絡・調整を行う連絡会を定期的に開催するようにし、現在に至っている。平成13（2001）年度からは、昼間のカ

表1 図書館専任職員数・委託スタッフ数の変遷

年 度	1995 H7	1996 H8	1997 H9	1998 H10	1999 H11	2000 H12	2001 H13	2002 H14	2003 H15	2004 H16
専任職員	59	59	57	54	51	46	41	39	38	38
定時職員	59人	60人	53人	54人	54人	60人	31人	28人	37人	35人
総時間数	不明	不明	55,751	57,399	48,788	48,318	26,420	16,614	19,164	15,266
派遣スタッフ	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
委託スタッフ	-	-	-	-	-	不明	不明	不明	不明	不明
年 度	2005 H17	2006 H18	2007 H19	2008 H20	2009 H21	2010 H22	2011 H23	2012 H24	2013 H25	2014 H26
専任職員	39	32	32	29	24	24	22	22	21	21
定時職員	27人	不明	不明	不明	不明	11	11	13	13	16
総時間数	19,377	20,956	21,214	22,026	18,217	11,050	11,050	10,680	10,754	15,822
派遣スタッフ	4	4	5	3	7	4	2	2	2	2
委託スタッフ	不明	不明	不明	31	35	45	69	70	83	75

※専任職員は次長、事務長及び課員、並びに契約職員を含む

表2 アウトソーシングによる開館日数・時間の拡大

			平成 11 (1999) 年度 アウトソーシング導入前	平成 12 (2000) 年度 アウトソーシング導入後
開館日数			283 日	296 日
3 階	一般閲覧室	月～土曜日	9:00～18:00	9:00～18:00
		日・祝日	閉室	10:00～18:00
2 階	開架閲覧室	月～土曜日	9:00～21:30	9:00～22:00
		日・祝日	10:00～18:00	10:00～18:00
1 階	レファレンス室	月～土曜日	9:00～20:00	9:00～22:00
		日・祝日	閉室	10:00～18:00
地階	書庫	月～土曜日	9:00～20:00	9:00～22:00
		日・祝日	閉室	10:00～18:00

ウンター業務も委託することになり委託総時間数を増加するとともに、開館30分後から開始していた各種サービスを開館と同時にを行うことにより利用時間の拡大を図った。さらに、平成14（2002）年度にはマイクロ資料やインターネットの利用等を閉館まで可能とした。

平成18（2006）年12月にリクルートスタッフィング株式会社からの撤退の申し入れがあったことから、後続の委託業者を選定するべく3社から見積書の提出をうけ、平成20（2008）年4月から株式会社キャリアパワーに閲覧業務委託を行った。当時の委託契約額は約8,500万円であった。

レファレンス業務のアウトソーシング

図書館のコア業務として位置付けていたレファレンスカウンター業務については、平成13（2001）年度には専任職員7名（昼間4名・夜間3名）および補助的な業務を行う定時事務職員1名（週4日、各2.5時間）の計8名でローテーションを組んで担当していた。平成14（2002）年度からレファレンスカウンター補助業務として定時事務職員の代わりに委託スタッフを配置して資料の受渡しや受付等になってもらうこととした。それまで定時事務職員ではできなかった夜間業務も担当してもらい、「夜間および日・祝日のレファレンスカウンターは、サービス内容を限定する」という但書付きながら、レファレンスカウンターを22時まで開けられるようになった。平成19（2007）年度には派遣スタッフにレファレンス業務を担当させることを試行したが、平成20（2008）年4月から、専任職員の減員及びそれに伴う負担軽減のため、レファレンス・サービスについて、株式会社キャリアパワーと業務委託契約を締結した。レファレンス業務委託に係る契約金額は約700万円であり、閲覧業務委託金額と合わせると約9,200万円であった。

その後も、専任事務職員が共働でレファレンスを担当する体制が続いていたが、委託業者からのコンプライアンス上、専任職員と委託職員が同一の職場で勤務するのは好ましくないとの申し入れにより専任職員がレファレンスカウンターで常駐勤務を行うことを取り止めた。この背景には、専任職員の

減員によりカウンターでの常駐勤務が物理的に困難になったことも挙げられる。平成 23（2011）年度 9 月、リニューアル工事の一環としてワン・ストップ・サービスの実現と閲覧席の増設を図り、レファレンスカウンターをメインカウンターに一体化したことから、レファレンス業務を業者へ全面委託することとなり、これにより専任職員がすべてのカウンター業務から撤退することになり現在に至っている。

相互利用のアウトソーシング

相互利用業務について、平成 13（2001）年度には専任職員 1 名および定時職員 3 名（年間 190 日、各 5 時間）の計 4 名で執務していた。平成 14（2002）年度にはオープンシステムの運用に伴い、相互利用関係業務は大幅に効率化・システム化できることが見込まれ、全面委託による空洞化の危険性は低減された。また、処理件数や処理日時など結果が明確に表れるため、評価制度を導入しやすいという利点もあり、相互利用関係業務の全面委託を開始した。必要人員については、その当時の状況を基準としてスタッフ 2 名を計上した。平成 26（2014）年度現在、国内の相互利用については委託スタッフが行っているが、海外相互利用の一部については専任職員が行っている。

収集整理業務のアウトソーシング

図書資料の目録作成・装備等の整理業務委託については、平成 14（2002）年度から、和書を株式会社図書館流通センター（TRC）が図書館内の作業室において、洋書を株式会社紀伊國屋書店が東京プロセッシングセンターにおいて、それぞれ実施してきた。2社に委託した理由として、紀伊國屋書店は、インターネット環境で発注から受入管理までの図書館業務とサポートする受発注システム PLATON、その出力データから自動的に書誌調達を行うことが可能な PLATON-CAT といったシステムの開発を先行して行っており、図書館システムの収書部分を委託できる体制を有していたことが挙げられる。

図書館流通センター（TRC）は昭和 59（1984）年以來の当館書庫和書の整理作業の実績があり、また、高い専門性が要求される書誌データへの信頼性が選定理由となった。

平成 19（2007）年 10 月からは、図書館システムの更新時期に合わせて、委託業者を 1 社にするとともに、学外での処理を取り止め図書館内の事務フロアでの学内処理に集約することにより業務の効率化を図れるとの判断により、和書・洋書とも実績がある株式会社紀伊國屋書店に委託することとなり、現在に至っている。

新学部設置に伴うサテライト・キャンパス図書館

閲覧業務のアウトソーシング

平成 22（2010）年度に高槻ミューズキャンパスに社会安全学部と、堺キャンパスに人間健康学部が設置された。併せて前者にはミューズ大学図書館が、後者には堺キャンパス図書館が設置された。その後、両図書館が図書館の所管となり、これにより、本学図書館は、総合図書館を本館とし、高槻図書室、ミューズ大学図書館、堺キャンパス図書館を分館とする 4 館体制となった。新キャンパスの図書館開館と同時にこれまで専任職員を配置していた高槻図書館を含めて図書館業務についてアウトソーシングを導入することとした。

ミューズ大学図書館の業務委託選定については、応募資格を定め公募したところ、3 社からの応募があり、平成 21（2009）年 3 月、図書館業務委託業者選考会において、各社からの提案内容及び見積金額を勘案した結果、ミューズキャンパス事務局のキャンパス内での委託業者を統一したいとの意向もあって株式会社紀伊國屋書店に委託することになった。

また、堺キャンパス図書館については、総合図書館と同様、株式会社キャリアパワーに委託することとなった。両キャンパスの図書館については、専任職員を置かず、委託業者への全面委託で運用しており、図書館専任職員が両キャンパスの事務室および社会安全学部および人間健康学部所属の教員と

の連絡調整を行いながら業務遂行している。

なお、高槻図書室は、平成6（1994）年度に総合情報学部が開設されたときに併せて設置され、それ以降、専任職員が執務していたが、平成22（2010）年度から、堺キャンパス図書館同様、株式会社キャリアパワーに業務委託することとなった。

アウトソーシング導入の課題

アウトソーシングを導入する際に、検討すべき事項がいくつかあった。その中に、専任職員がカウンター業務を行わなくなることによる次の3点が挙げられていた。

- ① アウトソーシング要員を指導・監督する立場の専任職員に対する、利用者サービスに関する教育をどのように行うか。
- ② 専任職員が利用者と直接接する機会が減少することにより、利用者のニーズを把握することが難しくなるのではないか。
- ③ 専任職員が、通常カウンターにいない状態で、アウトソーシング要員の仕事の質について、有効に監督する方法があるか。

アウトソーシング導入当初からの課題は、専任職員に専門性を持った者を如何に育成し、業務の知識や経験を如何に継承するか、また、利用者ニーズの把握及び委託業務の点検・評価を如何に行うかであった。今もなお、アウトソーシングを推進するとともに、特に若手職員へのOJT実施や各種講習会・セミナーへの研修参加を奨励するなどして、専任職員の専門性の保持に努めているが、抜本的な解決には至っていない。

図書資料の収集・整理、提供等いわゆる図書館の伝統的業務について委託業者への指揮・管理のために基本的な項目は修得しておく必要があるが、加えて専任職員が担うべき業務として、関西大学学術リポジトリへの関与、ラーニング・ commons の提供、委託業務に対する点検・評価、電子図書館化、図書館広報、図書館システムの管理・運営、館内施設・設備の管理、学内外機関やサテライト・キャンパス図書館との連絡調整等が挙げられる。

また、大学図書館職員に求められる資質・能力として、大学図書館職員としての専門性の他に、学修支援における専門性、教育への関与における専門性および研究支援における専門性がある。これまでは図書館ではあまり重要とされてこなかったかもしれない資質・能力であるが、図書館がこれからの大学教育の質保証の一翼を担う学習環境を提供していくということになれば、当然必要となってくるものであり、その中で我々図書館の専任職員の職務内容を明らかにすることは喫緊の課題となっている。

アウトソーシングは、図書館運営に係る人件費の削減や利用者サービスの拡大等のメリットをもたらしたといえる。

業務の発注者と受託者という関係ではなく、図書館事業を推進するパートナーとして図書館職員とアウトソーサーが協働し、切磋琢磨し Win-Win の関係を築くことが何よりも成功の鍵となることは閲覧業務委託導入して 15 年目を迎えた今も変わらない。

(たかはし ますみ)

泣き別れたり、親子になったり

嶋田 有理香

業界用語と呼ばれる、その職業ならではの言葉というものがあがる、図書館資料を語る上で外せない書誌の世界で出会う発想や用語にはどこことなく人間っぽさを感じさせるものもある。

図書館や本屋で検索システムを使うと目にする機会があるが、書誌には、誰が書き、どこの出版社がいつ刊行した資料なのか、等々の情報が記される。たくさんの資料を書誌という形で識別するため、基本的には同じ資料に対して書誌が二つ存在することはない。しかし、何らかの事情で図書館システムの中に書誌が重複して「生まれ」てしまっていることもあり、これを書誌の「泣き別れ」と呼ぶ。関西大学図書館では、かつて「1件の所蔵データに一つの書誌データ」という形を採っていたため、年鑑ものの書誌が年ごとに一つずつできていたり、上下巻の図書が上巻と下巻とでそれぞれに書誌ができていくという状態が起っていた。これは、データ作成を開始した時代の様々な事情によるもので、平成14(2002)年にNACSIS-CAT準拠の書誌データ(国立情報学研究所の総合目録データベースに登録可能な様式で作られた書誌データ)を導入するまで続いていた。今となっては、これは「泣き別れ」と言わざるを得ない状態であるため、このような場合には複数の書誌を一つにまとめて「きれいに」する。これは蔵書検索をする利用者のストレス軽減にも繋がるものであり、書誌や所蔵データを整備するためのワーキンググループを発足したこともある。

また、書誌には「親子関係」が存在することもある。例えば「岩波講座文学」というシリーズの『テキストとは何か』という図書の場合、「岩波講座文学」という「親書誌」があり、そのもとに『テキストとは何か』などシリーズの一つ一つの図書が「子書誌」として存在するという位置づけである。

このような「泣き別れ」や「親子」のほかにも、二つの異なる書誌の間につながりがある場合がある。雑誌が改題した場合の、前誌と後誌の書誌である。

例えば『月刊LASDEC: 地方自治情報誌』という雑誌の場合、その書誌には改題後の『月刊J-LIS: 地方自治情報誌』の情報が記述され、二つの書誌の間にはリンクを貼っている。つまり、図書館で『LASDEC』を蔵書検索した利用者がをクリック一つで後誌『J-LIS』の書誌にとべるようにしているのである。

このように書誌は別ものとして新たに作ることもなっても、図書館では多くの場合は改題後も引続き買い続けるため、発注のためのデータも新たに作る。改題するに至った出版社事情をちらっと想像しながら、改題雑誌があればその裏では今日も図書館員がデータをこしらえている。

(しまだ ゆりか)

電子展示

濱 生 快 彦

はじめに

平成 15（2003）年に本学の図書館ウェブサイト上に「電子展示室」が設置され、大坂の浮世絵師長谷川貞信の浮世絵が公開された。その後、平成 19 年（2007 年）まで、毎年コンテンツを追加し、「伊勢物語」「北山切新古今集」「八代集の世界」「ちりめん本」「戦国武将の書状」の画像を公開中である。以下では、これらのコンテンツのウェブサイト上での公開のプラットフォームであった電子展示室の設置に至る経緯を振り返ることとしたい。

電子展示室設置の経緯

わが国におけるインターネット元年は、平成 7（1995）年とされることが多い。その翌年には文部科学省が「大学図書館における電子図書館機能の充実・強化について（建議）」を公表し、これを受けて神戸大学、東京工業大学などの主要国立大学に予算がつき「先導的電子図書館プロジェクト」として電子図書館実験が開始された。また、これに先立つ平成 6（1994）年には実験的電子図書館モデル「アリアドネ」が公開されており、インターネットの黎明期からネットワーク上で図書館資料を閲覧するためのサービスの可能性が模索されていたといえよう。この時期には、ネットワーク上での図書館サービスを構想する際に、「まずは貴重書から」電子化に着手するケースは多かった。時期的にはやや遅れたとはいえ、本学図書館における電子展示室設置の背景にはこうしたインターネットと電子図書館をめぐる状況があった。

本学図書館では平成 13（2001）年に電子展示委員会（以下委員会と記す）を設置した。これは図書館ビジョン 7 項目に基づいて、平成 11（1999）年

度に図書館ホームページを全面改訂した際に、インターネット上で貴重資料の画像を提供することの必要性が検討されたことを受けてのものであった。委員会は収集担当課長を座長とし、図書館内の3課から比較的若手の職員が指名され検討を行った。この委員会の記録を確認すると、事業を開始するに当たり、大きく二つのことを考えていたことがわかる。まず、電子展示を単なる広報のツールとして位置付けるのではなく、貴重資料のアーカイブを電子的な形態で作成し、その提供の一つの用途としてインターネットの広報として活用しようという考えである。

もう一つは、画像データの作成に当たり多重バックアップという考え方を採用しようというものであった。こうした考え方は、電子展示室の開設に先立って提案された。記録によれば、平成13年度第15回図書館課長会議（平成14（2002）年1月25日開催）にて「電子展示活動の基本方針について」が報告されている。ここでは、電子展示を「収蔵資料の電子的な保存（デジタルアーカイブ）の一機能」と位置付けたうえで、今後のアーカイブの方針を策定することの必要性が指摘されている。このことは、デジタル画像作成の方針にも関連する。つまり、単にインターネット上で紹介するだけであればJpegなどの圧縮した形式のファイルを作成すれば十分であるが、電子的なアーカイブとして保存するには、将来的に研究用の閲覧をも想定する必要がある、当然、ある程度高品質な画像が必要となる。また、当時の図書館では貴重書扱いの資料を悉皆的にモノクロマイクロフィルムに撮影する事業を継続的に実施しており、この事業との業務上のすみわけも検討課題であった。そこで、電子展示の画像ファイルの作成に関しては、まずカラーマイクロフィルムを作成し、これを「デジタルデータのマスターデータ」と位置付けることとなった。将来的に、貴重書のモノクロマイクロフィルム撮影事業の一部を電子展示の資料の撮影に代替させることが想定されたためである。

また、高精細な画像を大規模に提供するにはその画像を保存、配信するためのサーバーが必要であるが、当時の図書館ウェブサイトは図書館単独のものではなく、全学で共同利用するサーバーに一定の領域の割り当てを受けたもので、大容量の画像ファイルの保存ができない状態であった。これは、当

時としては比較的容量の大きいファイルを図書館ウェブサイトを通じて発信する際のやむを得ない制約であった。

こうした課題を踏まえたくえで最初のコンテンツとして上方の浮世絵師長谷川貞信の浮世絵が選定され、平成 15（2003）年 3 月に試験的に公開を開始した。

基本方針について

試験的公開に引き続いて、委員会では本公開に向けて浮世絵の展示に関する仕様の確定を進めるとともに、活動の基本方針をさらに具体的に規定した。その内容は平成 15 年度第 8 回図書館課長会議（平成 15 年（2003）8 月 6 日開催）にて、「電子展示活動に係る画像作成の方法および活動の基本方針について」という文書として報告されている。ここで、改めて貴重資料のバックアップとしてカラーマイクロフィルムを作成し、さらにそれをスキャンしてデジタル化を行うことで、貴重資料の多重バックアップを実施することが明確化された。また、カラーマイクロフィルムは作成と同時に複製（デュープフィルム）を作成することとし、複製をスキャンして Tiff ファイルを作成することとした。これにより貴重書アーカイブのバックアップとしては、カラーマイクロフィルム、そのデュープフィルム、Tiff ファイルの 3 点が作成されることとなった。ただし、館内ではこうして作成されるカラーマイクロフィルムと Tiff 画像は、すでに進行中であった貴重書の悉皆的なモノクロマイクロフィルム撮影と事業内容として重複していることが指摘され、今後の課題として電子展示室は広報を目的としたコンテンツの作成・提供を目的とし、貴重書のアーカイブ事業は従来のマイクロフィルム撮影事業の延長として検討したほうがよい、という議論もあった。

本公開とその後

以上の経緯を経て、平成 16（2004）年 3 月に本公開にこぎつけ、試験的

に公開していた長谷川貞信の浮世絵コンテンツをリニューアルし、新たに370点を公開することとなった。その後、平成19（2007）年までコンテンツを追加したことは冒頭に述べたとおりである。

電子展示室はその後、貴重書のマイクロフィルム撮影事業を、ブックスキヤナの導入によるデジタル画像の作成への切り替えが検討されたこと（すなわち多重バックアップという方針の破棄を意味する）、また図書館の所管ではないものの学内に機関リポジトリが構築されたことを契機に、活動が中止された。これは、それぞれの事業の目的が重複しており、今後の貴重書のデジタルアーカイブを図書館としてどのように取り組むべきか再検討する必要が生じたためである。

委員会の活動が中止したことの影響で、平成15（2003）年に検討した基本方針は現時点では十分に継承されているとはいいがたい。しかし、貴重資料のデジタル化に関する方針は、その後の技術の進展や学内外の諸環境の変化を考えれば、いずれにせよ、破棄あるいは全面的な書き換えが必要となっていたと思われる。現在改めて貴重書のアーカイブ構築に関して検討を再開しており、そこでかつての基本方針の内容や過去に作成した画像ファイルを活用する方策を検討していきたい。

（はまお やすひこ）

貴重なのは本だけ？貴重書担当のつぶやき

大上 良樹

本学図書館の蔵書は現在約 220 万冊であるが、そのなかで貴重書と呼ばれるものは約 1 万 6 千点余りである。また、総合図書館には、増田文庫、泊園文庫、内藤文庫、長澤文庫、中村幸彦文庫、吉田文庫等の個人文庫が収蔵されているが、これらの文庫は、「研究者にとっての宝石箱や！」といっても過言ではないといえるほどの貴重な資料であり、遠方から他大学の研究者も閲覧、撮影に訪れている。

では、そうした貴重な資料を利用するにはどうすればよいのであろうか。実は、筆者は「貴重書の閲覧、貸出および複写」に係る業務を、平成 26 年度より担当することになったのだが、如何せん他部署から異動となり、それまで図書館システムの担当をしていたことで、接点も少なく、日々勉強に励んでいるところである。こうした中、日々問合せを受けることも多いのが利用手続きであるため、この場を借りて、極々基本的なこととなるがここで述べたい。

まず、利用者自身で、KOALA（関西大学図書館蔵書検索システム）を用いて資料検索を行い、資料の詳細を確認してもらう必要がある。その際、配置場所を確認の上、配置場所から利用を希望する資料を特定し、資料種別により各種申請書を利用目的に応じ作成、提出する流れとなっている。なお、貴重書関連の主な様式は以下のとおりである。

- 文庫（特別）閲覧願
配置場所が「文庫（特別）」の資料を閲覧するための申請書
- 貴重図書・準貴重図書閲覧願
貴重図書・準貴重図書を閲覧するための申請書
- 近世文書閲覧願
図書館に所蔵されている近世文書を閲覧するための申請書
- 文庫（特別）複写許可願
配置場所が「文庫（特別）」の資料を複写するための申請書
- 特別複写許可願
貴重図書・準貴重図書・近世文書を複写するための申請書
- 掲載・刊行・翻刻許可願
貴重図書・準貴重図書・文庫（特別）の資料を掲載・刊行・翻刻するための申請書
- ウェブ掲載許可願
資料をウェブ上で掲載するための申請書

最後に、図書館事務室の現状についても少し触れておきたい。20 年前には 60 名いた図書館の専任職員も今や 20 数名となり、現在所属している専任職員の中で貴重書担当を経験した者は 2 名である。また、長年図書館に勤めていても貴重書担当を経験したことがない職員も多く、筆者に近い状況である専任職員も少なくない。とすれば、ある意味、資料だけでなく、貴重書の担当者自身も今や貴重といえるかもしれない。

（おおがみ よしき）

市民利用開始

広瀬雅子

図書館ビジョン7項目を受けて

大学の社会貢献としての「図書館の市民利用」については、古くは平成6（1994）年2月に『大学図書館の地域住民への便宜供与』として提案されたことがあり、その後平成10（1998）年にまとめられた「図書館ビジョン7項目」の4番目にも、「いわゆる『図書館の公開』を推進し、蔵書のより有効な活用を目指す」として取り上げられている。ただ「図書館ビジョン7項目」は関西大学図書館の特徴を出したいという考え方にそってまとめられた面もあり、特徴的な公開対象と方法を検討するという一方で、一般市民への公開というよりもむしろ研究者向けを志向していた。

ビジョン答申の翌年にはプロジェクトチームが結成され、図書館の公開についても検討がなされたが、なかなかかたちがまとまらず、「図書館公開の今後の進め方について」を何とかとりまとめて、①地域住民・学生父母への公開（入館のみ）、②社会人への公開（貸出・取寄等が可能）、③研究者への公開（②に加えて書庫への入庫や研究の助けとなるようなサービスを含む）の3パターンの実施計画を示したのは、平成14（2002）年11月のことであった。

「入学前利用」の開始 —— 入館のみの利用 ——

平成13（2001）年度入学生から始まった商学部のDD（Dual Degree）入試（入試制度としては平成19（2007）年度入学生で終了）において、合格者に入学前に課題学習を課すので大学図書館を利用させたいという要望が出て、平成15（2003）年春に急遽「入学前学習のための図書館利用」を図

書委員会で諮って認めることになった。

この仕組みでは、利用者には合格通知書または生徒手帳を提示させ、DD入試「入学手続者名簿」と照合して入館を許可した。サービス内容は「入館、開架閲覧室の利用、資料の閲覧と複写」に限定した。

「入学前利用」は、現在文学部、商学部、法科大学院で行われており、また高大連携によるセミナーの受講生、学生や社会人を対象に資格取得などを旨とする各種講座を提供するエクステンション・リードセンターの受講生、社会連携関係や国際部関連の講座の受講生などにも、図書館の利用を許可する動きが広がっている。入館時のチェックには上記の入学前利用の方式のほか、受講証の提示を求める場合もあるが、いずれも貸出を伴わないので、図書館の利用者登録は行っていない。

モニター制度から「市民利用」の開始へ

前述の平成 14（2002）年 11 月の図書館公開プロジェクトの最終報告を受け、まずパターン①の内の学生の父母への公開が、入学前利用と同様の方式で平成 15（2003）年秋から開始されることになった。

パターン①のもう一方の地域住民については、対象をどの範囲までとするかの検討が続き、ひとまず大学前自治会構成員の成人をテストケースとしつつ、平行して他大学での地域住民へのサービスについて利用規程を調査するなどの準備作業が進められた。

翌平成 16（2004）年 8 月 5 日の関西大学と吹田市の「地域連携に関する基本協定」の調印を受けて吹田市立図書館からの働きかけがあり、また大学の基本方針に「地域連携の推進」があげられたこと、大学基準協会の主要点検・評価項目において、「図書館の地域への開放の状況」が必須不可欠の項目とされたこともあり、あらためて図書館公開の気運が高まった。

平成 17（2005）年 11 月には「総合図書館一般開放モニター制度」が吹田市民を対象に開始され、アンケートの結果も踏まえていよいよ平成 19（2007）年 4 月から、総合図書館の「一般開放」による「市民利用」が開始される運

びとなった。

「市民利用」の開始 ―利用者カードの発行―

市民利用の募集に当たって、モニター制度の際に引き続き吹田市報への掲載をお願いし、あわせて図書館のホームページ上での周知を行った。初年度は、先着順で100人を募集したところ、3週間で93人と定員に満たなかったため、追加で募集を行った。

対象は吹田市在住の成人とし、4月～3月の1年間で6000円の登録料を徴収して利用者カードを発行、資料の閲覧・館外貸出・予約が可能で取寄せも行うという校友などと同様のサービスを提供することとした。サービス内容については現在もほぼ同様で特に変更はしておらず、当初は学生で混み合う定期試験の期間については入館そのものをお断りしていたが、最近では席の利用のみご遠慮いただくというように制限を緩和している部分もある。

平成21（2009）年度からは吹田市に加えて、協定を結んでいる大阪府内の各市（高槻、池田、堺、八尾）の市民にも対象を広げ、募集人員は150名に拡大された。

平成22（2010）年秋学期からは、高槻市との連携協定によるミューズ大学図書館での高槻市民対象の一般開放が始まり、平成24（2012）年からは堺キャンパス図書館での堺市民対象の一般開放も開始された。高槻市民、堺市民については、それぞれミューズ大学図書館、堺キャンパス図書館で申込を受け付け、該当の図書館および千里山の総合図書館の利用もできる扱いとしている。平成26（2014）年度には、地域市民（吹田市民、池田市民、八尾市民）、高槻市民、堺市民あわせて257人の登録申請者数を数え、再登録者が170人と全体の66%を占めている。

（ひろせ まさこ）

図書館ウェブサイト

濱生 快彦

初期の図書館ウェブサイト

本学図書館最初のウェブサイト（ホームページ）がテスト公開されたのは、平成7（1995）年のことであった。学外に対する広報活動の一環であるとの位置付けで、内容の見直し等を積極的に行い、できるだけ新しい情報を発信するよう心掛けられていた。

平成10（1998）年の図書館ビジョン7項目に従って、平成11（1999）年にリニューアルを行い、開館日程、図書館案内、文献の探し方など、利用者サービスに直結した内容がコンテンツとして追加された。さらに、翌年の平成12（2000）年にはシステム担当と各課からのメンバーを加えたウェブサイト運営委員会が発足し、ウェブサイトを「電子カウンター」として機能させることを目標に、機能強化が検討された。その成果の一つとしては、インターネット上の学術情報源に加えて、徐々に導入が進んでいた外部データベースを合わせた「ネットワーク情報源」の整備があげられる。これは、有料・無料の情報検索サイトや文献情報サイトなどを、分野ごとにナビゲーションするためのポータルサービスとして提供したもので、そこには、当時CD-ROMサーバーを使って利用提供されていたCD-ROM資料や、それぞれの分野で契約していたデータベースなども含まれていた。コンテンツの作成は市販ソフトウェアを活用し、担当者がHTMLファイルを作成するもので、コンテンツを大きなグループとして仕分けてはいたものの、原則的には新たなコンテンツをリスト方式に近い形で追加していくものであった。その結果、後にはサイトの構造が複雑化し管理や更新のためにおおきな負担を強いられる結果につながっていった。

ウェブサイトのリニューアル

そこで、平成 17（2005）年度から、国内外の大学図書館ウェブサイトの調査を開始し、翌平成 18（2006）年には外部委託による全面的なリニューアルを行うこととなった。リニューアルのポイントは大きく二つあった。一つは、CMS（Contents Management System）の導入である。ウェブサイトはネットワーク上の図書館サービスのポータルであるとともに、図書館の広報の基盤でもある。従来は HTML ファイルを作成し手で FTP 転送していた「お知らせ」の機能を、CMS の導入により合理化することができた。特に、公開日、公開終了日を設定することができるようになったため、事前に「お知らせ」の原稿を登録することができるようになったほか、ウェブサイトのコンテンツの追加や修正などの業務を HTML に詳しくない職員でも担当することが可能となった。

もう一つは、上述した「ネットワーク情報源」を新たに「データベースポータル」としてリニューアルした点である。「データベースポータル」も CMS を使ったサービスで、本学が契約中のデータベースを中心に、個々のデータベースを 1 レコードとして、それぞれのデータベースの特徴や収録データの説明、利用方法などを管理することが可能となった。また、各データベースにカテゴリーを付与することで、分野別のデータベース一覧を表示させることや、キーワードでデータベースを絞り込む機能も盛り込んだ。データベースで利用できる資料が増えてくるにつれ、従来のツリー形式のナビゲーションには限界が生じつつあり、その都度 HTML ファイルを作成してアップロードするという負担が軽減されることとなった。

その他にも全体として画像やアイコンを増やし、見やすく探しやすいページ構成へとリニューアルすることができた。このリニューアルにより、「長澤文庫検索システム」などの新たなコンテンツを、図書館ウェブサイトプラットフォームとして追加・充実させていくことが可能となった。

（はまお やすひこ）

会長校のころ

金 東 溍

関西大学が私立大学図書館協会の会長校であった平成 21（2009）年から平成 22（2010）年は、日本の図書館界が大きく動いたころであった。国立国会図書館は博士論文を電子化し、それを Web で公開するための手続を進めていたし、図書館界と書籍流通業界は RFID（IC タグ）を導入するためのガイドラインをとりまとめつつあった。国公私立大学図書館は電子ジャーナルのやむことを知らない価格高騰に対処すべく、コンソーシアムの連携強化を準備していた。スイスに本拠地を置く CERN（欧州原子核研究機構）からオープンアクセスの試みである SCOAP³ への参加呼びかけがあったのもこのころのことである。

私立大学図書館協会では、そのころから次第に小規模な大学図書館が脱退していくようになった。大学が廃止されてなくなってしまうこと、あるいは協会活動に参加させられるだけの数の図書館員がいなくなったことなどが脱退の理由である。協会役員会には「脱退やむなし」と「大学廃止ならばやむをえないが、そうでなければ残留を説得せよ」とのふたつの主張があり、対応に苦慮した。関西大学は会長校として「残留を望む」立場から、小規模な大学図書館でも協会に加盟していることのメリットを感じられるような事業を協会活動に盛り込むことにした。そのひとつとして会長・北川勝彦先生の発案で「海外認定研修」制度を設計し実施した。研修先と日程を自分で設定できる自由度の高い制度である。先生は常から、図書館員が国際化に対応できる能力を身につけることを望んでおられたのである。

ICT 技術を活用した協会活動を望む声も強くあった。九州女子大学の高橋昇館長は、職員を研修に出せる機会が少ない小規模大学のために、研究会などの模様を Web により見られるようにしてほしいと、数年来、総会場でその必要性を説かれていた。それを受け、不十分ながら手始めに作ってみたのが、協会ホームページにある「インフォメーションサービス」という名前の電子掲示板である。高橋先生の要望には応えることはできなかったが、少しは前進したように思う。そこでは「図書館長からのリレーメッセージ」を企画した。理事校や総会、研究会会場校の図書館長から投稿をいただき、掲載メッセージは 30 を数えることができた。

関西大学が会長校に就任したのは昭和 50（1975）年以來二度目である。本学図書館長の市川訓敏先生と北川勝彦先生が会長となった。東地区の部会長が青山学院大学・山本吉宣先生、西地区の部会長は同志社大学・真銅正宏先生と百合野正博先生が務められた。

東の監事校は中央大学、西は大阪学院大学。総会・研究大会の会場校は佛教大学、同じく翌年、西南学院大学。研究助成委員長校は立教大学。協会賞審査委員長校・慶應義塾大学。ホームページ委員長校・中央大学。国際図書館協力委員長校は立命館大学という布陣。

さらに国公立大学図書館協力委員長校が慶應義塾大学と筑波大学で、大学図書館協力ニュース編集主査校が東京学芸大学であった。

多くの大学で催される委員会や研究会に出席し打ち合わせをするために、東京を中心に京都・九州・名古屋への出張が年間 20 回ほどになった。事務職員としては十分な、一生分の出張であった。

(きん とうえい)

2010 プロジェクトによる新図書館

高橋 真澄
田中 恵美

関西大学 2010 プロジェクト

本学では、平成 22（2010）年開設予定の各学部・学校設置構想について、総合的に推進するための体制を平成 20（2008）年 2 月に構築した。そして、この 2010 プロジェクトを実現するため、行動計画に掲げ、最優先事項として大学構成員が一丸となって推進していくこととなった。具体的には、平成 22（2010）年 4 月に、高槻ミューズキャンパスに初等部・中等部・高等部、社会安全学部及び社会安全研究科を、堺キャンパスには人間健康学部を、北陽キャンパスに北陽中学校を同時開設し、13 学部、12 研究科（専門職大学院を含む）、高等学校 3 校、中学校 3 校に加え、小学校と幼稚園を擁することとし、幼稚園から大学院に至る一貫教育体制を構築するというものであった。

ミューズ大学図書館——社会安全学部の開講とともに

社会安全学部は「安全・安心」をキーワードに、防災（災害を防ぐ）・減災（災害の被害を最小限に食い止める）・事故防止・危機管理などの問題について、文系・理系の両面からの幅広く実践的な教育を行うことを目的としている。「安全」の問題を中心に据えた学部は、日本では関西大学社会安全学部がはじめてである。新学部の設置に伴い、ミューズ大学図書館はキャンパス内西館 1 階に設置されることになった。

平成 21（2009）年 10 月、理事会に提出された「関西大学 社会安全学部安全マネジメント学科 設置の趣旨等を記載した書類」には次のような内容が記載されている。

「高槻新キャンパスには、大学図書館（7万冊所蔵）が設置される。大学図書館の閲覧席数は、収容定員（学部・大学院）の1割以上の席数（127席）を用意し、AV資料閲覧コーナー、ウェブ検索コーナー等を置く。社会安全学部は、分離融合の学際的性格の強い学部であるため、学生収容定員は1,000名とそれほど多くないが、整備する図書・資料の種類・内容は非常に多岐にわたっている。開設初年度に、まず一般教養関係や社会安全問題に関する領域の専門書を中心に、約30,000冊を購入・配備し、続いて次年度に8,500冊を加えて38,500冊とする。他方、電子ジャーナル版を含め学術雑誌を整備する。本図書館は、千里山キャンパスに所在する総合図書館とシステムの統合されており、社会安全学部の利用者も大学全体の約200万冊の蔵書を利用することが可能である（図書を閲覧申請すれば、翌開館日には受け取れる）。また、利用者は学内LANによって高槻新キャンパスから常時、データベースや電子ジャーナルなど総合図書館が有するリソースにアクセスすることが可能である。特に学術雑誌については、“Science Direct”をはじめ、“Blackwell Synergy”, “Oxford Journals”, “Springer Link”など12の出版社が提供する約10,000タイトルの電子ジャーナルが利用できることで、取り寄せのタイムラグが生ずることなく、それらを活用することが可能である。」

平成22（2010）年3月には、ミューズ大学図書館および堺キャンパス図書館が開設されるにあたって「図書委員会規程」、「図書館図書管理規程」及び「図書館利用規程」の一部改正が行われ、同年4月に、両図書館が開館される運びとなった。

連携事業として

高槻市と本学は平成16（2004）年7月に「関西大学と高槻市との地域連携に関する協定書」および平成20（2008）年8月に地域貢献に関する覚書を締結した。これらに基づき、平成22（2010）年3月には、「施設開放に関する協定書」を締結し、その中で、図書館を含む高槻ミューズキャンパスの施設を市民等に使用の便宜を図ることとし、平成22（2010）年9月から事

前に申請いただいた高槻市民へミュージズ大学図書館を利用していただくことになった。

なお、平成 22（2010）年 7 月、高槻ミュージズ図書館の隣に大学図書館とは別に、地域社会への貢献を目的とする関西大学児童図書館・高槻市立中央図書館ミュージズ子ども分室が開館した。本学が施設及び書架などの備品や図書資料を高槻市に無料で貸与し、高槻市が市民への貸出等運営業務を担当した。

また、ミュージズキャンパスには初・中・高等部が併設されたが、高等部より学長を通じて「関西大学高等部生徒のミュージズ大学図書館の利用について」（平成 22（2010）年 4 月 15 日付文書）にて依頼があり、図書委員会（図書館管理運営に係る必要事項審議機関）にて、利用目的、利用方法、利用できるサービス等を審議した。その結果、平成 22（2010）年度から高等部生徒は、学習に必要な資料が中等部・高等部ライブラリーにはなく、大学図書館に所蔵がある場合に大学図書館を利用できることとなった。以降、毎年 2 月の入試期間中に、高等部生徒向けに利用ガイダンスを実施している。

東日本大震災の発生

社会安全学部が開設されてから 1 年を経ようとしていた、平成 23（2011）年 3 月 11 日、東日本大震災が発生した。同年 5 月に、社会安全学部図書委員会において 3 月 11 日に発生した東日本大震災についての 1 次資料にあたる主要な報道資料を収集、保存し、東日本大震災について論じた文献を、図書・雑誌を問わず幅広く収集することとし、平成 24（2012）年度には前年比で 25% 増の受け入れを行った。ミュージズ大学図書館の蔵書は増加し、同学部の完成年度を迎える平成 26（2014）年 3 月末には、蔵書数は図書 39,553 冊、定期刊行物の種類数 398 タイトルとなった（表 1）。

図書費の購入予算は社会安全学部がもっていたが、学部の完成に伴い、平成 26（2014）年度からは堺キャンパス図書館とともに図書館事務室の予算に統合された。

表 1 過去 5 年間の図書の受入数（単位：冊）

館	年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
	総合図書館		37,199	37,889	35,247	36,175
高槻図書室		1,985	3,695	2,811	2,346	1,942
ミュージズ 大学図書館		20,793	11,813	2,344	2,944	1,659
堺キャンパス 図書館		19,351	3,264	4,589	7,131	6,540
計		79,328	56,661	44,991	48,596	41,847

堺キャンパス図書館——人間健康学部の開講とともに

平成 21（2009）年、人間健康学部の設置が認可され、堺キャンパス（堺市商業高等学校・第二商業高等学校跡地）に当該学部用の図書館を設置することになった。平成 22（2010）年 3 月までの準備期間に、図書約 2 万冊、カレント雑誌約 90 誌を揃えた。

堺キャンパスでは、商業高校の旧施設を活かす方針が採られ、体育館や教室棟（A 棟）を改装して大学の教室や事務室等が整えられた。図書館は新設する B 棟に設置されることになっていたが、学部創設時には間に合わず、1 年目は旧商業高校の図書室をそのまま転用してのスタートとなった。B 棟竣工後移転しその後は教室に改装されることと計画された。教室の書架などをそのまま利用したため、高校の図書室の雰囲気を残したコンパクトな感じであった。

翌年の平成 23（2011）年 3 月には、3 階に 300 人以上収容の大教室 2 室、2 階に図書館、1 階に食堂という B 棟が完成し、図書館は A 棟 5 階から、B 棟 2 階に移転することになった。こちらは、大学図書館用に計画された図書館で、一般書架のみならず、集密書架や AV コーナー、グループ閲覧室のほか、パソコン用の LAN も設置されたものである。A 棟 5 階を教室に転用する工事日程の都合から、図書資料を含めた図書館に関係する物品を一旦 1 階の教室に仮置きし、新図書館への書架・閲覧机・椅子等の備品が搬入され

たのちに、図書資料や物品を運び入れた。そして、B棟の竣工式の翌日である平成23（2011）年3月15日から新図書館でのサービスを開始した。

堺キャンパス図書館——図書資料収集の軌跡——1年目

平成22（2010）年4月、社会安全及び人間健康の両新学部から選出された教員も加わり、当年度第1回図書委員会が総勢17名で開催され、4キャンパス図書館体制がスタートした。とは言え、完成年度までの4年間の資料費は人間健康学部の独自予算である。既存学部（図書館）のルールを参考にしながらも、人間健康学部の独自性を発揮し、堺キャンパス図書館の基礎を築く大切な4年間である。人間健康学部構成員により近い視点で蔵書を構築していくためには、学部代表者である図書委員との連携が重要であった。あらかじめ図書館側で、年間の資料予算額や購入見込み冊数および選書方法などについて纏めたものを、図書委員に示したところ、「選書に関しては発注前に目を通し図書委員としての意見を述べたい」とのことであった。その要望を受け、設置準備期間の図書納入実績があった株式会社旭屋書店へ定期的な選書リストの作成を依頼した。設置準備時の経験を活かした同書店作成のリストを図書館でチェックし、その後図書委員の意見を聴取するという流れでその後4年間の新刊和書の選書を進めていくことになった。もちろん、教員・学生個人々からの希望にも応じながら当初の予算範囲内で計画的に執行していくことにした。

しかし、晩秋に思わぬ計画変更があり、想定外の予算で急遽1,200冊を購入することになった。当初の構想では新設図書館ゆえの蔵書不足を補うため、総合図書館蔵書で人間健康学部のカリキュラムに必要であろう図書を2年計画で15,000冊抽出し、堺キャンパス図書館へ移管することとし、そのため運搬費等の予算を計上していた。ところがその移管計画がなくなり、計上していた予算で新規に図書を購入することになったのである。以降、経常費予算分と俄かに出現したその予算の執行に追われることになった。この時にも株式会社旭屋書店の協力で既刊和書を対象にした選書リストが作成され、何

とか年度内に受入処理を完了することができた。

購入希望のルール制定——2年目

創設2年目を迎えた4月には、購入希望についてのルールが人間健康学部内で制定された。限られた予算を計画的に執行する手段として、「1冊5万円以上、シリーズで10万円以上の高額資料については学部執行部で購入の可否を決める」とした。具体的には、高額資料の購入を希望する教員は年2回（6月と11月）のタイミングに合わせて期日までに図書委員へ申請し、学部内で了解を得て購入することになった。当ルールに則りこの年はスポーツや社会保障関係の文献集などが充実できた。

和書新刊書の選書に際しては、人間健康学部の中期行動計画に示された、「堺市との共同事業実施」や「大学院研究科開設の準備」および「資格取得への体制強化」を参考に「堺関係」や“資格取得”をキーワードに盛り込んだ。2年目に計上されていた運搬費の転用では、1,100冊の既刊和書を購入した。

また、教員の研究用に洋書の充実を計画し、こちらは株式会社紀伊國屋書店に選書リスト作成を協力願った。入手の可能性が高いであろう過去3年程度の刊行物という条件で作成された、4分野（「スポーツ全般」「健康・フィットネス」「ユーモア関連書」「社会福祉」）約1,700冊分の選書リストをそれぞれ関連する教員に回覧し、図書委員の労により取りまとめられ、350冊ほどの洋書が購入できた。創設2年目を終えるころ蔵書数は約27,000冊になった。

特別予算の配賦——3年目

総合図書館からの15,000冊移管計画が実施されなかったこともあり、資料不足に危機感を抱いた図書委員の尽力で3年目には特別予算が別途配賦されることになった。この特別予算ではレファレンスブックや叢書など基本的必須図書を約1,700冊購入することができた。また、図書のみならずカレント雑誌の充実も特筆すべきことである。開設当初は約90誌でのスタートだ

ったが、新たに着任した教員も増えたため必要とする雑誌を聞き取った。180誌の候補が出され、予算・スペース等を勘案し調整した結果、半数の90誌を追加契約することになった。当初の契約数と合わせると180誌へと一気に倍増した。しかし、カレント雑誌は充実しても新設学部ゆえの悩みとしてバックナンバーがないという事実は如何ともしがたいものであった。3年目、第1期生の就職活動がスタートし、図書館としても関連書を200冊ほど購入し健闘を祈った。年2回の高額資料選定では平成23（2011）年度同様、文献集を揃え同時に洋雑誌のバックナンバーも若干ではあるが購入した。その他研究用洋書も前年同様の方法で、約100冊を購入した。追加で契約した雑誌も続々到着し、図書委員からも「なんとか整備の目途が立ってきた」と安堵の様子がかがえるようになった。

人間健康研究科の設置認可——4年目

学部完成年度には蔵書数4万冊が目標であった。達成には残る1年で6,000冊、この3年の経験から問題なくクリアできると予測した。高額資料や研究用洋書も引き続き購入しながら、年度末を待たずして目標は達成に至った（表2）。

学部の次は大学院ということで、この年の10月には人間健康研究科の設置が認可された。大学院設置経費では待望の洋雑誌バックナンバーを3件購入することにした。

1年目の計画変更による予算転用、2年目は特別予算申請にかかる準備など、常に何かに追われていたという印象が残る4年間であった。

関西大学図書館4館体制

高槻キャンパス開設16年後の平成22（2010）年4月、関西大学2010プロジェクトの一環でもある社会安全学部、人間健康学部の発足に伴い、高槻ミューズキャンパスにミューズ大学図書館、堺キャンパスに堺キャンパス図

表2 図書資料の所蔵数（平成25年度末現在）

種別 区分	図書の冊数（冊）		定期刊行物の種類数		視聴覚資料 の所蔵数 （点数）	電子ジャー ナルの種類 （点数）
	図書の冊数	開架図書 の冊数 （内数）	内国書	外国書		
総合 図書館	2,120,046	223,077	14,968 (2,437)	8,736 (1,473)	120,415	20,384
高槻 図書室	51,069	51,069	266 (172)	241 (82)	331	-
ミューズ 大学図書館	39,553	39,553	398 (153)	71 (21)	265	-
堺キャンパス 図書館	40,875	40,875	159 (149)	44 (30)	56	-

注1 製本した雑誌等逐次刊行物は図書の冊数に加えている。

注2 視聴覚資料には、マイクロフィルム、マイクロフィッシュが大半を占め、カセットテープ、ビデオテープおよびCD-ROM・DVD-ROM等を含み、図書の冊数の内数である。

注3 定期刊行物の種類数には電子ジャーナルの種類数は含んでいない。下段の（ ）の数は継続して受け入れている種類数で、内数である。

* 電子ジャーナルは総合図書館で集中管理をしている

書館が開館した。

両学部の完成により両図書館が図書館の所属となった平成26（2014）年4月をもって、長い間親しまれてきた「高槻図書室」の名称も「高槻キャンパス図書館」と改められることになった。

図書館創設100周年の平成26（2014）年、関西大学図書館は千里山の総合図書館、高槻キャンパス図書館、ミューズ大学図書館、堺キャンパス図書館の4館体制で、新たなスタートを切ることになったが、その時に、高槻図書室開館時に入れ替わりに閉館した天六分館のあった天六キャンパスが、最後の時を迎えることになったのは、感慨深いことである。

現在と今後の課題

現在、高槻、高槻ミューズ、堺の各キャンパスにある図書館に関しては、

図書館の専任職員が配属されておらず、通常は委託業者だけが常駐している。そのため、図書館の専任職員とは通常連絡は電話やEメールによって行い、毎月定例の業務連絡会を開催し、情報交換を行っている。また、各学部選出の図書委員や各学部の事務室を通じて、教員のニーズを図りながら収書業務や閲覧業務を行っている。

各キャンパス図書館のうち、とりわけミューズ大学図書館が抱えている問題がある。それは書架の狭隘化である。当初、図書館には7万冊の所蔵が見込まれていたが、平成26(2014)年度中にも、書架容量を超えるような状態になっている。ミューズ大学図書館は、高槻や堺の図書館と比べても専有延床面積が小さく、館外にも倉庫等を擁していない(表3)。平成23(2011)年度以降、東日本大震災関連の雑誌や新聞を受入し、新聞は原寸大の製本としたため電動書架内でかなりのスペースを占めているということはあるものの、それでも当初の蔵書可能冊数との乖離がある。学部の完成年度を迎えるや否や、総合図書館同様、狭隘化の問題が出ており、早急に解決策を講じる必要がある。

表3 各館の専有延床面積と構成

図書館の名称	専有延床面積	構 成
総合図書館	21,749.93㎡	開架閲覧室、グループ閲覧室、書庫閲覧室、マイクロ資料閲覧コーナー、研究個室、対面朗読室、特別閲覧室、書庫、貴重書庫、マイクロ資料自動、出納庫、展示室、EU資料センター、会議室、事務室、その他
高槻キャンパス図書館	1,013.24㎡	開架閲覧室、事務室、グループ閲覧室、マイクロ資料閲覧コーナー、その他
ミューズ大学図書館	623.03㎡	開架閲覧室、事務室、マイクロ資料閲覧コーナー、その他
堺キャンパス図書館	876.12㎡	開架閲覧室、事務室、グループ閲覧室、マイクロ資料閲覧コーナー、その他

(たかはし ますみ)

(たなか えみ)

『コアラ博士』にまつわるあれこれ

松本 和剛

関西大学図書館にはマスコットキャラクターが存在する。そう、本学関係者なら誰もが知っている、とは言えない、絶大な人気を誇る、ともとても言えない、知る人ぞ知る、あまり「ゆるくない」キャラクター、その名も『コアラ博士』である。名前のおおりにコアラの博士なのだが、詳細なプロフィールはひと段落後で。

さて、このキャラクターが誕生したのは今から6年前のことで、かの有名なゆるキャラたち、滋賀県のネコより1年遅く、熊本県のくまのそれより2年早い誕生であった。平成20（2008）年に新入生向けのオリエンテーション用ビデオでその愛くるしい容姿を初披露したのを皮切りに、平成22（2010）年には、これまでパンフレットや講義型のガイダンスなどでその利用方法等を説明してきた本学蔵書検索システム KOALA（[Kansai University OPAC for the Library](#)）を、利用者が自宅などの館外からでも活用できるようにと、図書館ウェブサイト上にてオンデマンド形式でガイダンスビデオを配信提供することになった際、そのストーリー進行上のガイド役としてコアラ博士が大抜擢されたのである。

ここで、本学図書館の広報誌である KULione（クリオネ）Vol.1 に公開されたコアラ博士のプロフィールを一部抜粋して紹介することにする。

通称 コアラ博士

本名 子守熊 関太郎（こもりぐま かんたろう）

特徴 コアラ型ロボット。主食がユーカリなだけに生粋の草食系博士。眼はいい。伊達メガネである。

趣味 木登りは滅多にしない。（高所恐怖症）

好きな言葉 「新刊書」。また、なぜか「ロッチェ」や「マーチ」という言葉に敏感。

目標 一人でも多くの学生が図書館に来て本に親しんでもらえるよう、日々研究やPR活動に励んでいる。いずれは世界的な図書館PR大使になるのが夢。

このプロフィールは図書館某職員が後付けで設定したものであるが、この一見おふざけのような設定の裏には、コアラ博士という存在に何か少しでもインパクトを感じ、そこから本学図書館に関心や興味を持ってもらって、ひいては足を運んで有効活用してほしいという、図書館広報担当としての煮え

滾る油の如き激情が詰まっているのだという。こうして、本学図書館の情報発信力、広報力の強化・推進に向け、微力ながらもコアラ博士が一役買う形になったのである。

現在、ガイダンスビデオをはじめ、図書館カレンダーである KULendar のカバーモデル、広報誌 KULione のご意見番にと、コアラ博士はその存在感を増す勢いである。彼の活躍が今後の図書館の広報戦略の将来を占うのか、はたまた、新たなライバル（キャラクター）の出現により違った展開を見せるのか、その動向に是非ともご注目いただきたい。

（まつもと かずたか）



広報誌『KULione』誕生秘話

白髪 友賀

広報誌『KULione (クリオネ)』は平成24(2012)年10月に創刊された。それまでも、年刊の機関誌として『図書館フォーラム』(平成7(1995)年創刊)が刊行されていたのだが、こちらは図書館にかかわる研究発表および活動記録の場として機能する、どちらかといえば、教員や図書館関係者向けのものだった。多くの大学図書館で、学生の来館促進活動が過熱するなか、本学も遅れをとるまいと、学生にターゲットを絞った広報誌をつくることとなったのである。

まず誌名をどうしようかということになり、図書館内で募集したところ、予想外にたくさん案が集まった。16もの誌名案を前に、担当者だけでは決められないということで、誌名総選挙を敢行。図書館スタッフ全員による投票を経て、最も多く票を獲得したのが『KULione (クリオネ)』であった。50代の男性職員が、“コアラ博士(本学OPACの愛称KOALAより派生した本学図書館キャラクター)の愛弟子で図書館情報学を専攻するクリオネちゃんが、新キャラクターとして加わるというのはどうでしょうか”というメッセージつきで発案してくれた、なんとも可愛らしすぎるものであった。

発案者によると、Kansai University Library is the one and only から略号をとったものとのことであったが、よりふさわしい意味を持たせるべく、Kansai University Library's Info for everyone という肉付けをほどこした。

手探りでありながらも、なんとか発行に漕ぎ着けた創刊号は、誌面作成に貢献してくれたインターンシップ参加学生2名と前図書館長、新図書館長の計4名に表紙を飾ってもらい、華々しい船出となった。現在も引き続き、ホットな話題提供とポップな誌面作成を念頭におき、年2回のペースで刊行を続けている。

さて、クリオネに決まったからには、クリオネちゃんを誕生させなければいけないのだが、未だに産声をあげていない。クリオネといえば、紅い内臓が透けて見えるゼリーのような体をひらひらさせて、冷たい海のなかを舞う姿が美しい。クリオネは、ギリシア神話に登場する学芸の女神たちムーサ(英語名ミューズMUSE)の二柱クレイオー(Κλειώ, ラテン語形 Clio)に由来し、歴史を司る彼女の名前には「祝福する女」の意味があるそうである。なんだか図書館広報誌としてピッタリの誌名を得たように思えてきた。いつかクリオネちゃん誕生秘話を書けるよう、そしてKULioneがより学生に親しんでもらえる存在となるよう、これからも誌面作りに邁進したい。

(しらかみ ゆか)

図書館リニューアル工事

新谷 大二郎

図書館リニューアル工事実施の経緯

平成 22（2010）年度末から 23（2011）年度にかけて行われた関西大学図書館リニューアル工事のそもそもの位置づけは、平成 19（2007）年度より計画されたハード・ソフト両面における「関西大学図書館リニューアル計画」の総合図書館ハード面のリニューアル計画の一部が実行に移されたものである。

総合図書館は本計画策定当時で開館から 22 年が経過しており、機器設備において、研究領域の多様化・学部学校構成の変更・学生生活の変化等の大学の環境的な要因から当初有効に機能していたものが十分に働かなくなっていたり、書庫の飽和や空調・什器設備の老朽化といった問題がすでに顕在化していた。また、別の大きな課題として、大学基準協会の認証評価の指摘事項である閲覧座席数の増設に対応する必要があるがあった。本計画はそれらの問題への対応のために策定されたものであり、その成果物として「関西大学図書館リニューアル報告書」がある。

本報告書の内容はハード面における報告だけでも、35 ページにおよぶものであり、図面・資料等加えた報告書全体では 200 ページを超えるものとなっている。その作成は、コンサルティングによる徹底的な現状調査——例えば、書庫においては据置書架、電動移動書架、積層書架の棚実数の計数や資料の配置・寸法の細かなサンプリングによる収蔵資料の実態把握を行うといった——に基づいて行われ、本報告書の大学への提出により、図書館における計画が大学としての実施検討段階へと移行したのである。

そして、その後数年の学内での協議を経て、ついに平成 22（2010）年度末より図書館リニューアル工事が実施された。計画策定・報告書提出から工

事実施にいたるまでの大まかな経緯は以下のとおりである。

- 2008年3月 関西大学図書館リニューアル報告書提出
- 2008年6月 図書委員会にて「リニューアル計画（案）」を審議、大綱を了承
- 2009年12月 予算折衝結果、2010年度にプロジェクト発足することが決定
- 2010年4月 専務理事を座長に図書館リニューアル・プロジェクト発足。図書館事務室と管財局によるワーキンググループ設立
- 2010年11月 リニューアル全体計画を策定
- 2011年2月～ 工事实施

実施計画当初案と実施内容

上述「関西大学図書館リニューアル計画」において、図書館は当初ハード面のリニューアルとしては以下の内容の実施を計画していた。

○実施計画当初案

- ① 空調改修
- ② 書庫狭隘対策
現有設備のゾーニング等の見直し、アクティブ書庫とアーカイブ書庫の区分、それに伴う再配架
- ③ 情報環境整備
館内無線 LAN の敷設、既設パソコンの全台外部ネットワーク接続、OPAC のモバイル機器対応
- ④ 休憩コーナーの設置
1階へのリフレッシュルーム設置、1、2階へのテラス設置、紙コップ式自販機の設置
- ⑤ 机・椅子の取り替え
全閲覧机の間仕切り付キャレルへの取り替え、全座席のキャスター付 OA チェアへの取り替え

⑥ 1階・2階の機能変更

1階＝研究用、2階＝学習用というコンセプトを1、2階とも学習用のフロアとする見直しを行い、それに伴う書架・資料の移動を行う

⑦ カウンターの統廃合

1階に複数あるカウンターを1つに統合する、自動貸出装置を設置する、小荷物昇降機を設置する、自動図書返却装置を設置する、検索用パソコン設置場所を集約する

⑧ EU資料センターの移設

EU資料センターを1階エントランスカウンター横に移設する

⑨ 用途変更

図書館ホールをパソコン室に転用する、3階グループ閲覧室4室と休憩室1室を一般閲覧室に転用する、研究者専用入口の入館制限を撤廃する

⑩ その他

事務室を移転、OAフロア化する

上述の図書館リニューアルプロジェクトワーキンググループでは、この「関西大学図書館リニューアル報告書」における案をたたき台として検討が重ねられ、結果、図書館リニューアルプロジェクトとしては、以下の施策が実施されることとなった。その実施内容の詳細については、次項で詳述したい。

○図書館リニューアルプロジェクト実施施策

① 空調改修

② 閲覧机への間仕切りの設置

③ 雑誌架の移設

④ 1階カウンターの統合、小荷物昇降機の設置

⑤ 図書館ホールの改修

⑥ 事務室の移転、OAフロア化

図書館リニューアル工事実施詳細

① 空調改修

空調については図書館建設時に導入されたガスエアコンが更新されず
に使用され続けていたため、ガス・電気の濫費、故障の頻発が問題となっ
ていた。また、書庫の一部では、空調に問題があったのか、資料にカビが
発生することがあった。改修はこれを新しい省エネタイプのエアコンに取
り替え、経済性、安全性、効率性を向上させることを目的として計画、実
施された。

改修工事の内容はVAV（Variable Air Volume: 可変風量制御装置）・
CAV（Constant Air Volume: 定風量制御装置）の更新・新設、空調機整備、
熱源機器更新などといった図書館の空調設備の全体的な整備にかかるも
で、平成23（2011）年8月から平成24（2012）年3月までの長期に亘っ
て行われた。

② 閲覧機への間仕切りの設置、椅子の取り替え

複数が座る閲覧機は、利用者が資料を広げるため、想定する人数が座
れないということや、他人と向かい合って座ることにより、集中できない
といったことから、間仕切りを設置することとした。作業は平成23（2011）
年1月から開始され、同年3月には工事が完了した。これによって1～3
階のすべての閲覧機について、間仕切りが設置された。また、図書館の雰
囲気に合わせて従来と同じく木製ではあるが、より軽く、動かしやすい椅
子に取り替えた。これにより、利用者が学習・研究により集中することの
できる環境が整えられることになった。

③ 雑誌架の移設

電子ジャーナルの主流化により特に自然系雑誌の冊子から電子への媒体
変更が進行した結果、1階に場所を別にして置かれていた自然系雑誌書架
を人文系雑誌書架コーナーに移設、統合することが可能となり、これが実
施された。自然系雑誌書架跡地には閲覧座席が増設された。

④ 1階カウンター統合、小荷物昇降機の設置

1階カウンターの統合は、1階に設置されていたメインカウンター、レファレンスカウンターの機能をメインカウンターに統合することにより、従前それぞれで手続きする必要のあった処理を一か所で行うことを可能にし、利用者の利便性を向上させるとともに、業務の効率化を図るべく実施された。レファレンスカウンターの跡地には閲覧座席が増設された。

小荷物昇降機の設置は地下書庫と地上階の資料の出納に使用されていたエレフト（自走式図書搬送装置）の老朽化および修理事物の調達が困難となったことに対応して行われた。それに伴い、エレフトの撤去も行われ、跡地には書架据え付けのためのスペースが生まれた。

⑤ 図書館ホールの改修

図書館ホールの改修は図書館で講演会等を開催する際に使用されていた3階図書館ホールの用途を変更するためのもので、固定机、椅子を撤去する改修が行われた。現在は名称を多目的閲覧室として、様々な用途に応じて柔軟に利用できる空間として運用されている。

⑥ 事務室の移転、OAフロア化

事務室の移転、OAフロア化は図書館の事務フロアを移転、跡地を閲覧室として転用するとともに、事務室什器備品等を更新し、より効率的に業務を遂行できるようにするために行われたものである。

上記の③から⑥を実施することにより、リニューアルプロジェクト前後で閲覧座席数は2,174席から2,225席の増となり、当初の目的であった閲覧座席数の充足が実現された。

関西大学図書館リニューアル計画実施の現状および今後について

本計画に関して、図書館リニューアルプロジェクトとして実施された工事は上述のとおりであるが、図書館ではそれに前後して本計画を遂行すべく、別途施設改修工事を実施してきた。

例えば、3階グループ閲覧室4室と休憩室1室を一般閲覧室に転用することは、平成21（2009）年度に実施され、現在の一般閲覧室3として運用さ

れている。無線 LAN の敷設については平成 24（2012）年度に Wi-Fi 接続のためのアクセスポイント設置を実施、館内にて持ち込みパソコン等によるインターネット接続が可能となった。館内パソコンの全台外部ネットワーク接続を実現することについても、現在積極的に推進しようとしているところである。

ただし、図書館では本計画やその実現のための改修工事を立案当初の形のまま漫然と実施していこうとしているわけではない。上記の館内パソコンの全台外部ネットワーク接続の実現を例に挙げると、そもそも想定していたデスクトップパソコンの用途変更として対応するのではなく、Wi-Fi 環境の構築やスマートフォン・タブレット端末の普及という時代の変化に合わせた形で対応すべきといった新たな意見が出てきている。そのように、図書館では図書館の利用環境を整備することについて本計画に沿って進行していくことを念頭に置きながらも、その実施を現在のニーズに合わせて行うように変更を加え、計画を達成しようとしているのである。

上述のとおり、「関西大学図書館リニューアル計画」の実施は、図書館リニューアルプロジェクトとしては完了したものの、その実施計画当初案に照らせば、まだ道半ばの状況にある。図書館では、今後も現在のニーズに合わせた形にすることを留意しつつ、本計画の達成を目指していきたい。

（しんたに だいじろう）

本と夢を運んだエレリフト

芝谷 秀司

私が図書館事務室に配属された平成 22（2010）年には、総合図書館にはまだ辛うじてエレリフト（自走式図書搬送装置）なる設備が存在した。1階の各カウンターからファックスで請求された地下書庫の資料は、エレリフトと呼ばれるアタッシュケースぐらいの大きさの箱に入れられて1階まで運ばれ、利用者の手に届けられていたのだ。ある先輩職員の話では、旧千里山図書館（現簡文館）時代は、利用者からの請求があれば図書館職員が書庫の1階から6階まで階段を昇降して資料を探し提供していたそうである。その頃の図書館職員にとって、エレリフトはまさに夢のような存在であったろう。

それまで教育後援会が保護者向けに製作した大学紹介映画の中ではエレリフトの映像を見たことがあった。学生時代、前述の旧千里山図書館で勉学に勤んでいた自分としては、図書館も随分オートメーション化されたなあと感心したものである。しかし、エレリフトを実際にこの目で見たのも、エレリフトという名前であるということを知ったのも図書館に配属されてからのことであった。利用者が心待ちにする資料を乗せ、ゆっくりと弧を描いて天井の中へ消えていく美しいフォルムは、近未来の交通機関を連想させるものであった。

このエレリフトで最も印象に残っているトピックスは、平成 22（2010）年度に吹田市立千里第二小学校の3年生の生徒たちが図書館見学に来てくれた時のことである。3階の図書館ホール（現多目的閲覧室）を使って子どもたちの質問に答えることになっていたのだが、何か視覚に訴えかけるものがあれば子どもたちも退屈しないで済むだろうと思い、エレリフトの動画を上映してみた。新入生ガイダンス用ビデオの中の十数秒程度の短い映像であったが、みんな予想以上に興味を示してくれた。書庫内のレールをアップダウンを経て搬送されていく美しい姿には、子どもたちの夢を掻き立てる何かがあったに違いない。しかし、「エレリフトがこわれた時はどうしますか？」という鋭い質問が私を現実に戻した。これまで本と夢を運んできたエレリフトも、老朽化によりたびたび搬送途中でストップしたり、修理のための部品調達も困難になってきたりという状況になっていた。かつて総合図書館の花形として活躍したエレリフトが、時代とともに難物として扱われるようになってきたのだ。そして平成 23（2011）年度の図書館リニューアル工事ですべて撤去されてしまい、現在は小荷物昇降機というなんとも情のない名前の機械が地下2階から2階の間に設置されている。たった1年の短い付き

合いであったがすっかりテレリフトのファンになっていた私としては、世の無常を感じざるを得ない出来事であった。

(しばたに ひでし)



図書館の現在と未来

堀口和弘

本学は、平成20（2008）年7月に策定した「KU Vision 2008-2017」の中で、「考動力あふれる人材の育成」「躍動する知の循環システムの構築」「教育を支える鍛えられた研究力」などをビジョンとして挙げ、また教学面では、4部体制——教育推進・研究推進・社会連携・国際——を樹立し、さらには新たなキャンパス（学部・研究科）を増設するなかで、多様な教育改革への取り組みが行われてきた。これらの状況を踏まえて、本学の研究推進・教育推進の担い手として図書館自らを再定義し、将来に向けた自らのミッションを定め、運営と管理のシステムを整備するため、図書館長をプロジェクト・リーダーとする「図書館のありかた検討プロジェクト」が平成22（2010）年9月に設置された。メンバーとしては図書館長の他、副学長（研究推進担当）、ITセンター所長、図書委員会委員（5名）に加え、図書館情報学を専門とする専任教育職員（2名）、専任事務職員（2名）が入り、優先的検討事項として4つの小グループ（①図書館の管理運営 ②学部・大学院教育と図書館 ③研究と図書館 ④IT化と図書館）に分かれて、半年間種々検討を進めた。

平成23（2011）年5月に提出されたプロジェクト検討事項報告では、まず「図書館のありかた」の基本ビジョンと基本目標を定義し、その達成に係る施策を優先的検討事項とした4つの視点から挙げている。基本ビジョンの設定にあたっては、本学の「学術情報の将来は、さらなる『発信と連携の「場」としての図書館システムの構築』にむけた取組によって拓かれなければならない」として次の3つをビジョンとして、その目標と併せてまとめている。

○関西大学における学術情報の内的および外的循環の拠点としての図書館をめざす。

〔目標〕電子媒体および印刷媒体の多種多様な学術情報の検索システムや、

内外で求められる情報（資料）が正確かつ迅速に入手できる体制の整備

○関西大学に学ぶ学生の考動力を高める教育と学習の支援拠点としての図書館をめざす。

〔目標〕学部・大学院等での授業や図書館における学習指導に加え、ウェブ上でさまざまなレベルでの図書館情報リテラシー教育が受けられ、学習と研究の進め方を適切に習得できる場の整備

○関西大学における教育職員の世界展開力を強化する研究の支援拠点としての図書館をめざす。

〔目標〕国内外の研究者に必要とされる資料の入手や調査の依頼に最適な対応ができる情報サービスの連携体制の整備

これらの基本目標の達成に係る施策については、上述の4つの優先的検討事項それぞれの視点から挙げられている。

「管理・運営」の視点から

- 組織と意思決定体制の整備
- 図書館職員の資質向上と組織化
- 新たな図書館サービス実現に向けた体制と施設設備の整備
- 大学の国際競争力の向上と大学図書館の国際連携
- 中長期的な「メディア情報総合戦略」の策定

「研究と図書館」の視点から

- 図書館の学術情報（蔵書）の構成についての、総量・保存スペース・購入・廃棄・保存・電子化などに関する短期（3年）的な計画の継続的立案
- 図書館の学術情報収蔵計画の立案は大学全体で検討するものとして、学内の教学にかかわる学術情報関連機関および法人から構成されるこの施策に係る委員会の構築

「教育と図書館」の視点から

- 学術情報の閲覧利用と学習効果を高める「コモンズ」の設置

- ・図書館情報リテラシー教育におけるファカルティ・デベロップメントと図書館の連携

「IT化と図書館」の視点から

- ・図書館は、ITセンターとの連携を強化し、電子図書館の実現を目指す。
- ・地域連携・国際連携に開かれた大学図書館を実現する。

本報告の最後に「今後の検討に向けて」として、これらの「諸問題の取り扱いについては、大学執行部での検討を経て、関西大学図書館体制の整備にむけた取組みとして学内の関係機関に命じられることになる。」と結ばれている。つまり、図書館単独で取り組めるものは図書館長の指示により整えられ、大学全体で取り組むものは学長の指示の下、関係機関との調整を図りながら進めることとなる。

図書館の改革にむけて

上述の報告を受けて、図書館では次のような改善・改革に取組み始めた。

「管理・運営」の視点から

○図書館に係る規程（5種）の改正（平成26（2014）年4月施行）

社会安全学部（高槻ミューズキャンパス）、人間健康学部（堺キャンパス）が完成するのに合わせて、4キャンパス4館の図書館運営全般の充実に資するよう改正された。主な改正点としては、

- (1) 図書館規程…4館の名称を明示するとともに「高槻図書室」を「高槻キャンパス図書館」に改称し、併せて千里山キャンパスの総合図書館（中央館）とその他のキャンパス図書館（分館）との関係を明示した。
- (2) 図書委員会規程…委員会構成を改め増員（東アジア文化研究科、法務研究科、会計研究科、心理学研究科心理臨床学専攻、教育推進部又は国際部から各1名）するとともに委員会の下に専門部会を設置できる条文を追加
- (3) 図書館自己点検・評価委員会規程…副委員長を設置する条文の追加の

他、外部の有識者を委員に追加できるよう条文を追加

- (4) その他の規程においては、関連する文言および実態に即した文言に修正

○海外の大学図書館との相互協力覚書締結

- ハーバードイェンチン図書館（2009年6月）
- ルーヴェン大学図書館（2013年1月）
- 香港大学図書館（2013年11月）
- 香港城市大学図書館（2014年5月）

「研究と図書館」の視点から

○機関リポジトリ（関西大学学術リポジトリ）の運用移管（平成26（2014）年4月）

本学の教育・研究活動を支援し、学術研究の一層の振興に貢献することを目的とした関西大学学術リポジトリの管理・運用に関する「関西大学学術リポジトリ管理・運用規程」の制定にともない、リポジトリの管理・運用は図書館が執り行うことと、研究推進担当副学長を委員長、図書館長を副委員長とするリポジトリ運営委員会の設置とが規定された。これにより、本学の構成員が作成に関わった学術成果を、電子的形態により国内外に広く提供することも図書館の重要な役割の一つとなった。

「教育と図書館」の視点から

○総合図書館にラーニング・コモンズを設置（平成27（2015）年4月（予定））

平成25（2013）年6月、図書委員会において図書館長からラーニング・コモンズ設置に係る検討ワーキンググループの設置について提案され、同年10月図書委員会の下に「ラーニング・コモンズ検討にかかる専門部会」を設置し検討を開始した。この専門部会には教育推進部、ITセンターからもメンバーを募り幅広く検討し、翌平成26（2014）年3月、同設置概要案を学長に提案した。その後、詳細案を検討するにあたっては教育推進部（教育開発支援センター）との連携が深まり、その結果、既に第1学舎

に設置されていたライティング・ラボの主機能が総合図書館のラーニング・コモンズに移転されることになった。また、教育推進部主導の下、ラーニング・コモンズの全学的な運営方針の策定や効果検証などを取り扱う関西大学コモンズ委員会規程が平成26（2014）年6月に制定され、総合図書館に設置されるラーニング・コモンズを含めて学生のアクティブ・ラーニングを支援する学習環境の全学的運営体制が整えられることとなった。

「IT化と図書館」の視点から

○総合図書館内に無線LAN設置（平成24（2012）年10月）

学内各所に順次設置されている無線LAN（KU Wi-Fi）が総合図書館内（1F 東閲覧室およびレファレンスカウンター付近、2F 参考図書コーナー、3F 一般閲覧室2・3およびグループ閲覧室（3室））にも設置され、館内にもノートパソコン、スマートフォンやタブレット端末などが利用できる環境を整備した。また同時にパソコン等の機器利用を禁止する「サイレントエリア」も設定し、利用者の多様なニーズに対応できるよう配慮した。

「図書館のありかた検討プロジェクト」がまとめた本学における将来の「図書館のありかた」は、すこしずつではあるがその実現に向けて着実に進みつつある。

さらなる課題へ

これまでに記してきた将来の「図書館のありかた」、つまり「発信と連携の『場』としての図書館システムの構築」にむけた種々の取組みの他にも、未だ抱えている課題も残っている。それらのうちの一部を紹介すると、以下のようなものが挙げられる。これらについても、順次解決の途を開かなければならない。

(1) 所蔵資料のデジタル・アーカイブ化

- (2) 総合図書館地下書庫の狭隘化への対応
- (3) 電子資料利用経費の肥大化対策
- (4) 貴重書、コレクション等の積極的公開化

これらについての現状と展望について次に記す。

- (1) 図書館では、かつてウェブ上で公開する「関西大学図書館電子展示室」の展開に取り組んできた（平成 15（2003）年 3 月第 1 回公開、最終平成 19（2007）年 12 月第 5 回アップ）が、これはその名のとおりに「展示室」であり、特定のテーマに基づく貴重資料に解説を付けて展示したものである。ここで言う所蔵資料のデジタル・アーカイブ化とは、特定の資料群を網羅的にアーカイブ化することである。しかしながら、本学図書館の所蔵資料のアーカイブ化には膨大なコストがかかることから、その取り組みにはなかなか踏み込めないままとなっていた。

平成 23（2011）年、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」を推進する組織として開設された関西大学アジア文化研究センターが「東アジア文化資料のアーカイヴズ構築と活用の研究拠点形成」をテーマとして、関西大学が所蔵する東アジア文化研究のための豊富なりソースを集中的にデジタル化し開かれたアーカイブとして構築するにあたり、図書館に対してデジタル化対象資料と撮影場所の提供に係る協力要請があった。図書館はこれを受入れ、所蔵資料のデジタル化の途を開くことができた。（約 2,000 件以上を提供）また、国文学研究資料館古典籍研究事業センターによる「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に基づいて、国内の拠点大学が所蔵する古典籍の画像データベース化もはじまりつつある。本学図書館所蔵の対象資料もこの計画による画像化が進捗することになる。

- (2) 総合図書館が竣工して 30 年が経過し、当時の予想からはずいぶんと早く地下書庫の狭隘化が進んできた。これまでに書架の増設、複本の除却、事務用スペースの移設など種々取り組んできたが、もはや限界は間近であることがわかってきた。もはや大学単独での解決は難しく、複数の大学図書館間の共同事業、シェアードスタックもしくはシェア

ードプリント等が有効な一例として紹介されている。既に国内でも検討あるいは小規模ながら導入されたケースがあり、導入に向けた具体的な検討が急がれる。

- (3) 電子ジャーナルの登場により、書架スペースも不要で、また図書館に来館せずとも閲覧できるとして電子資料への切換えを推進してきたが、学術情報の恒常的な価格上昇や出版社主導のいわゆるビッグディール契約等による電子資料費の高騰化は、昨今の円安傾向とあいまって図書費予算に占める割合を大きく増やすこととなった。このことは、他大学においても共通の問題であり、契約内容（支払い方法）の見直しや高額契約の継続取止めを決断された他大学事例もあると聞く。本学図書館もその時が迫っているものと思われる。
- (4) 特に東アジアの図書館における共通の傾向として貴重書、コレクション等の秘蔵化があるとの指摘がある。総合図書館3階にある貴重書庫（228.48㎡ 所蔵資料約16,000点）では厳格な温湿度管理のもと、入庫できるのは限られた職員だけに限定し、貴重書の閲覧・複写には事前の届出が必要で、届出当日の閲覧はできないなど、種々の制限は多い。貴重な資料を閲覧に供するにあたっての手続きは必要であろうが、事前の届出が必要という取扱いから見ても利用者の便を図るといふ視点にはあまり重きを置いていなかったとも言える。貴重な資料であっても、内外の研究者に利用されてこそその資料であるとの考えに基づき、簡素な手続きで即日閲覧ができる仕組みに切り替えていく時期に来ていると言える。

（ほりぐち かずひろ）

LOUIS VUITTON

加藤 博之

図書館に着任してしばらくした頃だったと思う。私が所属していた運営課（当時）は、普段は比較的静かな部署だったが、にわかに「ヴィトン、ヴィトン」と騒がしくなった。何事かと訝しんでいたが、聞けば、関西大学図書館は日本で一番古いヴィトンのトランクを収蔵しており、そのトランクが本日久々に出陳されるので、我々も見ることができる、とのことであった。平成16（2004）年の晩夏のことだったと記憶している。

これは、ルイ・ヴィトンの創業150周年を記念して、兵庫県立美術館、読売新聞大阪本社、読売テレビが同年に主催した「Universal Symbol of the Brand ルイ・ヴィトン 時空を超える意匠の旅」という特別展へ、同資料が出品依頼を受け、その引渡手続きを館内で行った日の運営課の一コマであるが、何故このような資料を関西大学図書館が収蔵していたのであろうか？

話は19世紀末のフランスに遡る。フランス、パリのルイ・ヴィトン本社にある顧客名簿には、このトランクの製造年は明治5（1872）年で、販売したのは明治17（1884）年9月2日、当時の値段で1800フラン、顧客名は小倉久と記録されている。小倉久は、明治9（1876）年に司法省法学校卒業後、フランス留学を命じられ、約3年の歳月を経て帰国。様々な官職を経て明治19（1886）年頃から関西大学創立の事にあたり、のちに初代校長となった人物である。顧客名簿にある明治17（1884）年は、小倉久が明治政府の官吏としてポルトガルのリスボンで開かれた万国国際会議に出席していたところで、この旅程においてルイ・ヴィトン本社に立ち寄り購入したものと思われる。小倉の没後、このトランクは小倉家から関西大学に寄贈されたが、その際に温湿度が一年を通じて一定に保たれている図書館の貴重書庫が保管場所として最適と判断されたのであろう。

このトランクは、今は図書館から年史編纂室という部署へ移管され、図書館職員が実物を見る機会は得難くなった。明治時代のモダニズムと、東洋と西洋が邂逅したロマン、そして関西大学の歴史を肌で感じることのできる貴重な資料であると思う。

（かとう ひろゆき）



小倉久が使用していたトランク

第2部

図書館に想う

関西大学図書館創設 100 周年に寄せて



市川 訓敏

関西大学図書館が創設 100 周年を迎えたことを心からお喜び申し上げます。図書館の運営に携われてこられた先輩諸氏をはじめ、図書館の活動にかかわってこられた皆さまのご尽力に、あらためて敬意を表します。

記録によれば、当初の図書館は、大阪区裁判所（現在の簡易裁判所に相当する）の土蔵を買い受けて、大阪市北区上福島にあった当時の福島学舎の正面玄関手前に、図書館として改築したもので、わずか 20 坪の建物であったそうであるが、独立した図書館の建物を持たたことで、学生たちの勉学への意欲もさぞ高まったことと思われる。この大正 3（1914）年から 8 年後の大正 11（1922）年には、「大学令」にもとづき、名実ともに大学として昇格するとともに、服部嘉香作詞、山田耕筰作曲の現在の「学歌」も制定されるなど、発展のあゆみを着実に進めていた時期であったが、100 年の歳月を数えるまでには、それこそさまざまなことがあったにちがひなく、そのことを思うと、感慨も一入である。

筆者が、当時の河田悌一学長（現、日本私立学校振興・共済事業団理事長）の指名により、田中登館長の後任として、第 21 代図書館長に就任したのは、平成 18（2006）年 10 月のことであるが、その直後に、創立 120 周年の記念式典が挙行されたことで、強く印象に残っている。

また、この時期に前後して、法科大学院や会計専門職大学院、臨床心理専門職大学院が相次いで設置され、工学部を改組してシステム理工学部、環境都市工学部、化学生命工学部を開設、さらには政策創造学部や外国語学部の新設、北陽高校・中学校の開設、高槻ミューズキャンパス及び堺キャンパスの開設、人間健康学部や社会安全学部の新設、高等部、中等部、初等部の開

校などがつづき、それにともない、新校舎の建設やキャンパスの整備などで、地鎮祭や竣工式がたびたび実施されたことも記憶に新しい。

そうしたことから、図書館としても従来の運営のままというわけにもいかず、さまざまな対応を迫られることになったが、なかでも大変だったのは、増加した在学生数に座席数が追いつかず、既存のスペースのなかで、どれだけ座席数を確保するかということが大きな課題になったことである。そのため、関係者の間で知恵をしぼり、創意工夫を重ねて、事務室を移転するなど、図書館の配置を大きく変えることになった。現在の総合図書館は、大学創立100周年にあわせて、現在の場所に設立され、当時は相当大きな建物であると思ったものであるが、その後の大学の規模の拡大を考えると、決して大きいとは言えなくなってしまったようである。

また館長に就任して気がついたことだが、それまで一利用者として図書館を利用して、図書館の活動について、ある程度知っているつもりでいたが、実際には図書の閲覧や貸出しなど、ごく一部の業務しか知らなかったわけで、内側から見てみると、図書館では、いくらでも仕事があって、猫の手も借りたいというのが、実状だったと思う。

図書館の業務は、大きく分けて全体的な管理運営にかかわる部門、図書館資料の収集や整理、管理にかかわる部門、利用サービスに関する部門、システムの構築や運用にかかわる部門などがあるが、図書館の利用を促進するための業務だけをとっても、広報活動の充実やホームページの作成、図書館ガイダンス、春・秋の特別展示、学習や研究の支援、レファレンス・サービス、ILL業務など、さまざまな業務が行われているし、サービスについても、多文化サービスや、当時重視されるようになった生涯学習を支援して社会貢献に資するといった観点から、本学と協定を結んでいる吹田市、池田市、八尾市、高槻市、堺市に在住の方を対象に一般開放するなど、サービスのあり方も多様化するようになったし、放送局や出版社、美術館、博物館などからの特別閲覧や貸出しなどの照会も頻繁にあって、そういう図書資料を所蔵していることを、審査の段階ではじめて知ること多かった。特色あるコレクションとして、「大阪文芸資料」など、種々の図書資料を系統的に集めていた

ことによるものであった。

図書館の業務を行うなかで、高度に専門的な知識や判断を必要とすることも多く、簡単に決められない問題も数多くあった。河田学長や当時の安部誠治副学長から助言を受け、励まされることもしばしばであったことも忘れられない思い出である。大阪市立大学、大阪府立大学との相互協力を実現できたことや、早稲田大学図書館やハーバード大学燕京図書館との間に相互協力関係を築けたことなど、サービスの拡大というだけでなく、関西大学図書館にとっても名誉あることであったと考えている。

図書館の日頃の業務にあっても、さまざまな創意工夫やアイデアが必要で、図書館員の高い見識と不断の研修に支えられていることを実感する場面もしばしばあった。多忙な中でも、勉強会を開くなどして、研鑽を積まれている姿を見かけることも多かった。日本図書館協会が定めた「図書館員の倫理綱領」においても、図書館員の利用者に対する責任、資料に関する責任、研修につとめる責任、組織体の一員としての責任、図書館間の協力、文化創造への寄与を明記しているが、長年にわたり活動してきたライブラリアンたちの叡智が「倫理綱領」に結実したものに違いなく、いずれの図書館でも、そうした努力なしには、図書館活動の充実は覚束ないといってよいだろう。

関西大学図書館は、平成 21（2009）年 4 月より、平成 23（2011）年 3 月までの期間、私立大学図書館協会会長校に就任することになり、図書館長が自動的に私立大学図書館協会の会長に就任した。そのため、図書館内に担当部局を設け、必要予算を確保するとともに、さまざまな準備をはじめ、あらためて協会の事業を正しく把握して、取り組んでいかなければならなくなった。

平成 21（2009）年当時の私立大学図書館協会の加盟校は、東地区、西地区合わせて 520 校であり（平成 25（2013）年現在では、加盟校総数は 533 校になっている）、同時期の私立大学 595 校のうち、9 割近くの私立大学図書館が加盟する組織率の高い団体である。もっとも、それぞれの加盟校は、大学としての規模も、経営理念や教学方針も多様であり、置かれている状況にしても千差万別であるが、共通する問題や連携して取り組むべき課題も多

くあることから、それらを調査研究し、その成果を共有するとともに、相互の交流や協力を強化することで、図書館活動の改善や発達に資するという目的のために、同協会は設立されている。したがって、加盟校、未加盟校ともに、協会に加盟することの意義やメリットを実感できるような活動を活発に展開することが、協会に課せられた大きな責務であった。

協会では、いくどかにわたって、『私立大学図書館協会史』を刊行しているが、それらによると、もともと、昭和5（1930）年に、東京の主だった私立大学が集まって「東京私立大学図書館協議会」を発足させ、昭和13（1938）年には関西地区においても、これに加盟しようとする運動が起き、そうしたことから、「東京私立大学図書館協議会」を発展的に解消して「全国私立大学図書館協議会」を成立させ、第1回の創立大会が開催されたのであった。協会史によれば、昭和初頭の私立大学は、全国で26校、東京に18校、関西に7校（同志社、龍谷、大谷、立命館、関西、高野山、関西学院の7校）、その他1校とあるから、数の上からも、まとまりやすくもあり、共通する問題も多くあることから、連携する機運が生まれたということであろう。

その後、昭和18（1943）年の第6回大会において、会員の増加などのため、規約を改正するとともに、現在の「私立大学図書館協会」に改称することになり、この中央大学で開催された第6回大会には、関西大学の初代図書館長に就任した岩崎卯一教授が参加して、「規約改正委員会」の座長として原案作成にあたったことが記録されている。戦時下の交通難、食糧難などのため、開催が危ぶまれた大会であったといわれているが、そうしたことを乗り越えて、志しを持った先輩諸氏たちが、戦前戦後を通じて、営々と築いてきた協会であったわけで、そういうことを知り、会長校としての責任の重さをあらためて感じた次第である。

もっとも、会長校に就任した前年の平成20（2008）年は、18歳人口の減少にともない、私立大学の入学定員割れの割合は、過去最悪の47.1%となり、平成21年（2009）度も46.5%であって、私立大学の半数近くの大学において定員割れが起きていた。最近になって、やや改善してきた印象はあるが、当時は、いずれの大学においても、相当な危機意識を持っていて、経営基盤

の見直しが迫られるなかで、時代に応じた図書館のあるべき姿を検討することも大きな課題になっていることが、関係者から指摘されていた。

また、最近になって改善されているといっても、深刻な状況に大きな変化はなく、とりわけ、比較的規模の小さな大学や、中国地方や四国地方など、大都市圏以外の地域では、慢性的に定員充足率が低い状態がつづいていることから、図書館活動の充実にまで、なかなか手が回らないということも言われていた。

公共図書館については、行政改革の一環として、PFI法が平成11（1999）年に制定されたことで、民間資金を活用して公共サービスを提供する道が開かれ、図書館運営についても、PFI方式を採用するところが登場した。平成15（2003）年には、地方自治法の一部改正により、「公の施設」の管理運営を包括的に特定の民間団体に委任できる「指定管理者制度」がスタートして、公共図書館に、それを適用するところが出てくるようになり、最近でも武雄市図書館のケースなどが注目されているが、その武雄市図書館では、「いつでも、どこでも」借りられる電子図書館サービスを提供する試みを行うなどして、経費削減という観点とともに、多様なサービスの提供をめざすユビキタス社会の要請に応えるという目的もあり、それらの取り組みの行く末については、これからも注視していく必要があるだろう。

大学図書館の運営にあっても、その運営の外部委託について、各図書館において、いろいろな模索がつづけられていて、ほとんどの図書館において、何らかの外部委託が行われているとあってよいようである。関西の大学図書館を見ても、とくに平成20（2008）年前後から急速に増えていることを見ると、やはり、18歳人口の減少による、「大学冬の時代」と言われた時期に重なっているように思われる。

大学図書館の場合でも、直接的には経費削減や費用対効果などを考えての業務委託ということがあるのだけれど、質の高い図書館サービスを安定的に供給しようとした場合に、一部の業務を専門的な知識やスキルを持った優秀な委託スタッフにゆだねることで、職員全体の配置計画など、その後の図書館運営の計画・立案が立てやすいという面もあるなど、メリットも大きいと

ということのようである。

本学図書館では、わりと早くに外部委託を導入していて、平成12（2000）年には、閲覧サービスにおいて、夜間開館や祝日開館を実現するなど、開館時間数、開館日数とも大幅に向上させることが可能になった。利用者にとっては、使い勝手のよい図書館になり、とくに土日や祝日を使えることで、どれほど助けられたことか知れない。学生や他の利用者も、その恩恵を受けた人は多いのではなかろうか。

外部委託には、このようにメリットも大きいですが、さまざまな課題もあることから、利用者の声や、他大学での取り組みなど、今後も検討に検討を重ねることが必要になるだろう。

よく知られていることだが、「国立国会図書館法」の前文には、「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。」とあり、国会図書館東京本館の目録ホールの壁に、初代館長であった、憲法学者にして日本国憲法制定当時の憲法担当国务大臣を勤めた金森徳次郎の筆跡で、「真理がわれらを自由にする」という文言が刻まれている。戦後すぐに作られたものであるが、その言葉は、時代を越えて、今なお、国会図書館に限らず、すべてのライブラリアンの精神ではないかと思う。

（いちかわ くにとし 法学部教授・元図書館長）

図書館の思い出、図書館への思い



北川 勝彦

人の時間感覚はそれぞれであるが、関西大学の図書館が設置されてから100年の時間を刻んできたことは実に感慨深いものがある。この短い文章では、私の研究生活に関西大学図書館がどのようにかかわってきたか、思い出すままに綴ってみることにする。

私が関西大学経済学部に入学したのは、昭和41（1966）年の春であった。学部の学生時代をふりかえって思い出すことといえば、二つある。ちょうど、2年次生のときに、教職課程科目を履修していた私は、文学部の専門科目で横田健一教授の「日本史概説」を受講したことがあった。当時の講義のテーマは確か「日本の近代化における革新と伝統」であったと思う。横田先生は、講義の中で、近代化ないし工業化の源流、すなわちイギリス産業革命について論じられ、経済学部の矢口孝次郎教授の業績を紹介しつつ、東京大学の犬塚久雄教授との論争について説明してくださった。もともと歴史に関心の強かった私は、さっそく矢口先生の『資本主義成立期の研究』と犬塚先生の『近代資本主義の系譜』の二冊を読んでみることにした。現在、ITセンターになっている円神館は、経・商・工専門図書館と呼ばれ、その二階に閲覧室があった。空調もない時代のことで、初夏から夏にかけて汗を拭きながらこの二冊の本をすべてノートに書き写したことをつい昨日のように思い出す。

その後、3年次生になって、私は、矢口孝次郎先生の演習に参加することを許された。矢口先生の演習では、ハートウエル（R. M. Hartwell）のイギリス産業革命の論文がテキストとして使用され、各演習生は、その内容から個別のテーマを選んで研究を進めた。私は、産業革命の本質論争に関心をもち、すなわち、産業革命は、それまでのイギリス経済史の展開との関係で

「断絶」とみるか「連続」とみるか、あるいは産業革命の結果、人々の生活水準は「改善」したのか「悪化」したのか、という論争である。いわゆる「生活水準論争」に関心を持った私は、4年次生の春に、矢口先生の研究室を訪問し、イギリス経済史学会の『経済史評論』(*Economic History Review*)をお借りして、ホブスボーム(E. J. Hobsbawm)とハートウエルの「生活水準論争」の論文を仔細に読み始めた。この論文の脚注には、夥しい文献が引用されており、その都度、専門図書館のカウンターにでかけて文献検索の指導を丁寧にしていただいた。当時、学部学生は入庫検索ができなかったので、法文の図書館(現在の博物館)や天六学舎の図書館の職員の方のお手をずいぶん煩わせたと思う。この研究は、「産業革命期の生活水準問題——その最近の論争に関する一考察——」としてまとめることができ、経済学会の懸賞論文に応募したところ、幸いにして賞をいただくことができた。

4年次生の秋ごろ将来の進路に迷い込んでいた私は、矢口先生に懇切なご助言を賜ることができた。その折、矢口先生から精読を勧められた一冊がトーマス・カーライルの『衣服の哲学』であった。しばらくして、私が大学院への進学を決心したことを先生に申し上げると、先生から「5年間はしっかり修行するように」との返答であった。大学院修士課程での矢口先生の演習では、イギリス経済史の基本文献とならんで産業革命の指導的産業部門であった綿工業の歴史に関する基本文献を読むことになった。シドニー・チャップマンの『ランカシャー綿工業史』(Sydney J. Chapman, *The Lancashire Cotton Industry: A Study in Economic History*, Manchester, 1904.)を毎週、一字一句のがさず丁寧に読みすすめていったことは、後々までも私の読書に生かされていった。私を指導するために、この本の各ページの空欄に記された矢口先生の鉛筆書きのメモは、先生の周到な準備を如実に語っている。大学院の学生時代に演習で読んだ書物の多くは、矢口先生ご自身の蔵書からお借りしたものが多かった。先生の蔵書は、後に『矢口文庫』として総合図書館に収められることになった。現在でも、ときどき『矢口文庫』の蔵書を手にすることがあるが、先生の読書範囲の広さと深さをしみじみ感じる。

大学院修士課程での2年間の研究は、「イギリス産業革命期の綿工場にお

ける児童労働の実態」と題する修士論文にまとめられた。この修士論文に関する史料の調査、研究、および執筆の過程では、当時、少しずつ図書館に収められつつあったアイルランド大学出版のイギリス議会文書のシリーズを大いに参照したものである。関西大学の図書館には、イギリス史に関する研究を行う上で、上下両院の『ハンサード』をはじめ、『フェビアン・トラクト』にいたるまで充実した蔵書があり、私は、これらの史料の蓄積は、他に誇るべきものだと今でも思う。

大学院に在学中、私の研究にとって大きな転機が訪れた。当時、近々70歳の古希を迎えられる矢口先生をお祝いして古希記念論文集の出版が計画されていたようであるが、私のように博士課程の学生には知るよしもなかった。ところが、2年目のある日、矢口先生からお呼びがあり、ご自宅でお目にかかる、イギリス帝国経済史についての論文集の出版を計画しており、イギリス帝国の中で南アフリカの経済史について論文を書くようにとのご指導であった。私にとっては初めての研究領域なので、具体的にはハーバート・フランケルの『アフリカにおける資本投資——その過程と結果——』(H. Frankel, *Capital Investment in Africa: Its Course and Effects*, 1939) という書物を丁寧に読んで、「南アフリカにおけるイギリス投資」と題する紹介論文にまとめるようにとのご指導をいただいた。ただ、この書物は、関西大学には収蔵されていなかったため、東京大学の蔵書を高橋幸八郎先生を介して和歌山大学の角山榮先生が借りて下さるので、角山先生のご自宅に出かけて受け取り、その際、いろいろご指導をうけるようにとご指示であった。論文集にご執筆に当たられる先生方は、それまでお名前は存じ上げていても、はるか雲の上の先生ばかりで、私にとっては大変なプレッシャーであった。ご執筆にあられた先生方のご指導の下で書き上げた論文は、矢口孝次郎編著『イギリス帝国経済史の研究』(東洋経済新報社)に収められることになった。この過程で、出会った角山榮先生は、今日にいたるまでずっとご指導いただくことになろうとは、当時は、夢にも思わなかったことである。フランケルの書物は、後にリプリント版が出版され、現在も総合図書館に収められている。

大学院の博士課程を終えた私は、昭和 50（1975）年 4 月に通信課程の大
阪府立桃谷高等学校（旧大阪府立大手前高等学校通信部）に奉職し、昭和
54（1979）年 4 月からは関西外国語短期大学の専任講師に着任して、大学
教員の道を歩き始めた。その前年には、矢口先生は他界され、もはや直接に
ご指導を仰ぐこともできなくなった。今から思えば、この時の私は研究生活
の大きな岐路に立っていた。当時、私は、平成 26（2014）年の 3 月になく
なられた荒井政治先生からは『産業革命の展開』（有斐閣）に収める産業革
命の論文の執筆、角山榮先生からは『講座西洋経済史』第 3 巻（同文館）に
収める南アフリカ経済史の論文の執筆、という 2 つの仕事をいただいていた。
やがて両者がイギリス経済史を理解する上で不可欠な「産業革命論争」と「帝
国主義論争」に関わっているという点ではつながっていると考えた私は、以
後、イギリス帝国経済史、とくに南部アフリカ経済史の研究を展開していく
ことになった。この研究では、やはり関西大学図書館に収められている膨大
なイギリス史関係の一次史料（とくにイギリス議会文書）は大きな支えとな
った。この間研究をすすめるにあたって、日本アフリカ学会の南アフリカ研
究にたずさわっておられた先生方、後に関わることになるイギリス帝国史研
究会の創立にかかわった先生方の学恩を忘れることはできない。

この後、私は、再び、関西大学図書館のお世話になる。広くはアフリカ経
済史、狭くは南アフリカ経済史の研究を進めていくうちに、同学の外国人研
究者とも交流する機会が増え、日本人アフリカニスト経済史家として独自の
研究の展開を求められるようになった。とくにグラスゴー大学のフォーブス・
マンロー（Forbes Munro）先生、ダルエスサラーム大学のキマンボ
（Kimambo）先生のご助言の存在は大きかった。矢口先生がなくなられた後、
研究上のいろいろのご指導をいただいていた角山榮先生にある日相談したと
ころ、先生から外国人研究者とは異なる視点と方法を得るために日本領事報
告資料の研究と利用を強く勧められた。私は、自らの考えるべき問題の一つ
として日本—アフリカ関係史の研究をテーマに設定し、この資料とその周辺
資料を調査するために昭和 61（1986）年以降、大阪府立図書館をはじめ関
西大学図書館を活用した。とくに戦前に外務省通商局から出版されていた『海

『外経済事情』の研究と利用では関西大学図書館を訪れる機会が増えた。これは、関西大学図書館の役割の新たな発見であった。

平成3（1991）年4月から3年間は、香川県善通寺市の四国学院大学教養部に勤務した関係で、関西大学図書館からは遠ざかった。しかし、縁は異なるものと言おうか、阪神・淡路大震災の起こった平成7（1995）年4月以降関西大学経済学部で勤務することになった。それ以後、経年的にサハラ以南アフリカの英領植民地政府文書を基本図書として蔵書に加えていただいて現在に至る。イギリス議会文書とこの植民地政府文書の整備は、東京の慶應義塾大学図書館を除けば、近隣の他の大学図書館にはない誇るべきものであり、私自身も多いに活用した。万博公園にある国立民族学博物館に京セラ稲盛文庫としてイギリス議会文書が入ったときも、その整理にかかわった職員を含めて共同研究会を立ち上げ、連携研究を行った。その折、関西大学図書館の当該資料の整備状況について調査報告する機会があったが、これは、意外に知られていない関西大学図書館史である。この共同研究の成果は、『アフリカと帝国——コロニアリズムの新思考にむけて——』（晃洋書房）として出版された。

ところで、私は、平成21（2009）年10月から平成24（2012）年9月まではからずも関西大学図書館長となり、同時に私立大学図書館協会会長を拝命した。在任中は、各種の会合に出席し、国内外の大学図書館の現状と図書館行政について学ぶことができた。それこそ図書館行政の勉強の日々が続いた。大学において図書館の位置づけや役割が自明のことで、問うこと自体が疑問視される時代が終わり、今ほど「大学図書館とは何か」その存在意義を説明できる実践的で説得的な理念が必要とされている時代はないように思われた。大学図書館はまさに重大な歴史的転換期を迎えている。関西大学における総合図書館をはじめとする図書館群も決して例外ではない。

今日の大学が置かれている競争的な環境の中で、大学図書館は、一方で相互に連携しつつ他方では各大学の独自性と競争力を支える役割が期待されている。すなわち、図書館の提供できるサービスの質と量が今ほど問われている時代はない。その中でも教育研究環境を支える情報基盤をどのように構築

していくかは図書館運営の最重要課題である。現在では、学術情報がデジタル情報として生産され、流通し、消費される事態が一般的となっており、自宅でも研究室でも、時には移動中であってもネットワークを介して情報資源にアクセスが可能になっている。大学図書館に求められているのは、教員の教育研究はもとより、学部学生の生活動線の中で図書館サービスのプレゼンスを高める運営、大学院教育と一体となった研究ファクトリーとしての機能、大学独自の学術情報やデータベースの開発・構築・発信において主要な役割を演じることである。

このような状況の中で、近年、大学図書館の存在証明の一つとして取り組まれるようになったのは、リテラシー教育である。今や大学図書館の教育的機能は大きな転換期にある。学生にとって必要なリテラシーの習得と向上の機会が授業だけではなく図書館も含めて計画的で体系的に用意されねばならない時代を迎えたからである。大学図書館には、大学での教育改革における自らの位置づけと役割を認識しつつ、学生の主体的な学びとの連携に重要な役割を演じることが求められている。

(きたがわ かつひこ 経済学部教授・前図書館長)

図書館在職時の思い出



柴田 真一

昭和 52（1977）年 4 月関西大学職員として採用され、最初に配属されたのは図書課で、担当は和文雑誌の受入であった。その後、平成 12（2000）年 4 月に教務関係の部署に異動するまで 23 年間、図書館内のいくつかの部署で勤務した。平成 24（2012）年 4 月から退職までの 1 年間、再び図書館に配属された。この間、様々な仕事を担当し、多くのことを学ぶことができた。思い出深いことも多く、とても書ききれないが、その中でも特に印象深く残っていることを思い出すままに述べてみたい。記憶違いにより、時期が前後するなど、必ずしも正確でないことがあるかもしれないが、ご海容願いたい。

昭和 52（1977）年の夏、貸切バスによる図書館職員全体の研修旅行に出かけた。その往復の間、バスの最後部の席に、当時の館長と図書館各課の課長など幹部が集まり、ずっと話をされていた。何か問題でも起こったのだろうかと思っていたのだが、夏休み明け、当時の言い方で図書館業務機械化を行うことを知った。先ず対象とするのが、雑誌関連業務であったため、担当者一人として関わることになった。完全文系で、そういったことには全く興味も知識も無かったのだが、少しでもコンピュータのことを理解しようと、当時出回り始めていたパソコンを個人的に購入し、電算機に慣れようとした。やっと漢字が扱えるようになったばかりのパソコンと、図書館機械化に使われる大型コンピュータが全く異なるものだということが理解できていなかったのである。しかし、そのおかげで、早くからパソコンに親しむことができ、その後の、事務業務の IT 化についていくことができたとも言える。英文タイプライターを業務に使っていたので、タッチタイピングで使えるように、

キーボードの練習をしていたことも、パソコンに慣れやすかった一因かもしれない。

昭和 60（1985）年 4 月、新年度の授業開始にあわせて総合図書館が開館する。このとき、利用者サービスを担う閲覧参考課に異動した。総合図書館への移転では、2 月に期末試験が終了してから、1 ヶ月足らずで、旧千里山本館と専門図書館の蔵書併せて約 100 万冊を移転させ、残りの 1 ヶ月足らずで、閲覧貸出システム用の装備などを完了した。もちろん、それ以前から移転の準備作業は進められていたのだが、2 図書館の蔵書全体を分類順に並べ替えなければならないなど、相当な作業量になると思えるものを、概ね順調に移転させ整備した計画は、見事なものだったと思う。移転作業の概略を記しておく、事前準備として、① 2 図書館の配架資料の一定レベルでの分類別の実測調査を行い、② 計測した配架長から、総合図書館の棚への割り付けを行い、2 月の休館後に③ 一定の長さ毎に、配架場所の記号を記した紙とともに資料を結束バンドでまとめ、④ 総合図書館の指定の場所に配架し、結束バンドを切った後、微調整を行うというものであった。

総合図書館移転後は、主にレファレンスカウンター（現在はメインカウンターの横に設置されているが当時はレファレンスコーナーに専門のカウンターが設置されていた）やメインカウンターに勤務し、レファレンス業務、書庫図書の出納、貸出等を担当した。この時期は、図書館業務に関して、最も勉強になった時期であったように思う。空いた時間や勤務後の時間を利用して、1 階レファレンスコーナーや書庫内のレファレンス資料を実際に見て回り、どのようなことを調べられる資料があるのかを把握したり、相談を受けたことを調べるためには、もっといい方法があったのではないかと考えたり、請求された書庫図書が貸出申だったり、不明だったりしたときに、対処方法を請求者にアドバイスするために、書庫内の資料全般について調べてまわったりしたことで、様々な分野の資料に詳しくなれたと思う。また、実際に、利用者と接し、相談を受けたり、トラブルに対処したりすることで、人との対応についても多くを学ぶことができた。書庫図書が出てきたとき、請求者の名前を呼び間違えないように、「閲覧・貸出申込票」に氏名のフリガナ欄を

付けることを提案して、採用されたことも懐かしい。

7年後、収集整理課に異動し、和書の収集を担当する。大阪文藝、大坂画壇資料や、江戸時代以前の和古書の収集などを担当した。図書館の方針に従って、様々な古典籍の収集にあたったのだが、購入対象でないものも含めて、多くの貴重な古典籍に接することができ、適切な収集資料を選ぶために、江戸時代の出版物のことなど、いろいろなことについて改めて学ぶことができたのも、大変貴重な経験であった。また、研究者の協力の下で、芝居番付、大坂画壇資料の冊子目録作成に関わることができたのも、それまで接する機会が少なかった多くの資料に接し、専門の研究者から直接解説をうかがうことになり、視野を広げることができた。

その後、天六キャンパスにあった第2部の移転に伴う開館時間、貸出可能時間の延長要望、開架閲覧室の利用に限られていた日曜開館を書庫図書等に拡張することなどに対応するために、閲覧サービス業務のアウトソーシングを導入することに関わった。図書館職員が利用者との接点を失わないように、レファレンス業務は職員によって行うことにするなどの対策を取り、修正を加えながら円滑に運用できるように関わっていきたく思っていたのだが、運用開始を前にして異動することになった。また、次の目標として、貴重書の情報発信を充実させようと準備を始めていたが、関わることができなくなったことも残念であった。

久しぶりに図書館に異動してきたときには、閲覧サービスは全て委託する体制となっていた。よりよい図書館サービスを提供するためには、管理、収集を担当する図書館職員が、利用者サービスの実態を把握する努力が欠かせないというのが、両方の部署を担当した実感である。利用者サービスを委託しているのであれば、なおさら利用者の声をしっかりと汲み上げていくための体制の整備が必要ではないかと思う。最初の23年間の業務の中では、研究者、学生等の利用者との距離が近く、特に研究者との接触がもっと濃厚であり、その意見を受け止めることで、研究、教育の動向を把握して、資料収集や図書館運営に役立てるということをやっていたように思う。久しぶりに図書館に戻ってきて見ると、この点がかなり弱くなっているように感じた。

現在では、検索システムが格段に充実しているが、古典籍資料は、出版されている現代の図書資料などとは性質が異なる。開館以来 100 年間にわたって蓄積してきた貴重な資料の活用のためにも、個別の資料をわかりやすく紹介し、所蔵の事実を広く知らせることが欠かせない。また、使いやすい環境の整備にさらに取り組むことも必要であろう。

長い時間を費やして収集されてきた膨大な蔵書が、活き活きと利用されるように、さらなる努力が継続されることを期待したい。

(しばた しんいち 元図書館次長)

数々の貴重書



田中 登

今般、図書館が開設して100周年を迎えるという。まことにめでたいかぎりである。思えば、私がこの図書館長に就任したのは、平成15（2003）年10月のこと。図書館運営などには何の知見もない私であったが、翌年「関西大学図書館フォーラム」第9号の巻頭感に「大学図書館の使命」と題して、次のようなことを記させていただいた。

「情報システムの急激な変化は、大学図書館のあり様にもさまざまな形で影響を与えている」「今や、大学図書館は、（中略）大学全体の情報交換さらには、他大学や他の諸機関との情報交換の中心的役割を果たすようになってきている」「こうした情勢はおそらく今後もこれまで以上に加速度的に進むにちがいない。その結果、必然的に図書館という機関が果たす役割も、従来のものとは、いささか異なってくることになるだろう」「だが、（中略）大学が大学という看板を掲げる以上、市町村の図書館とはまた自ずと異なった役割が、そこにはあるはずである。（中略）高度な学術機関としての大学にふさわしい、貴重な書物の所蔵なども、そのひとつといえよう」「わが関西大学図書館は、これまでも、そうした学術上きわめて意義深い貴重な文献類の収集に力をそそいできた。その結果、（中略）名実ともに世間から高い評価を得ているのは、これすべて先人たちの高い見識と努力の賜物である」「大学冬の時代といわれて久しく、図書館の予算など、（中略）年々歳々厳しくなることが予想されるが、（中略）泣き言ばかりいってもいられない。そこは、なんとかわれわれの創意と工夫によって、限られた予算の範囲の中でも、学術的に価値の高い書物の収蔵に、よりいっそう努めていく必要があるだろう」。

以上は、今からおよそ10年程前の文章であるが、現在も、その気持ちに

変わりはない。関西大学に勤務して今年で19年。この間、私が関係している諸学会の開催などの度に、小なりといえども、図書館の所蔵品などを利用して資料展を開かせていただいていた。以下、そうした展示品などの中から、想い出深い典籍について、ここに記しておこう。

まずは、天下に名だたる廣瀬本万葉集について（口絵写真参照）。この本は、関西大学第26代学長の廣瀬捨三先生の旧蔵品。先生の御専門は英文学であったが、また無類の本好きでもあって、洋書のみならず、数々の和書をも集めておられた。先生は、この喩えようもなく貴重な本を、大阪のさるデパートの即売会で買い求めたという。そして、この本の学術的性格に照明を当てたのは、当時、文学部国語国文学科の専任であった木下正俊・神堀忍両教授。このお二人の先生方のご尽力によって、廣瀬本万葉集は、一躍学界の注目するところとなったのである。

この廣瀬本自体の書写年次は、江戸も中期の天明元（1781）年のことというから、万葉の写本としては、それほどびっくりするような古さではないが、何と云っても、見過ごすことができないのは、この写本の元となった本の奥書に、次のような文言が見えていることである（原文は漢文）。

秘本を校合して、直に和字を付けおわんぬ。不和の長歌に至るか。老眼疲るるによりて、委しくは見えず。重ね重ね見合すべし。

参議侍従兼伊予権守藤（花押）

詳しい考証はここでは省略するが、問題は最後の「参議」「侍従」にして、しかも「伊予守」を兼ねていた人物、すなわち、この花押の主こそが、かつて廣瀬本万葉集を書写した人ということになるわけだが、これが誰であろう、数々の古典作品の書写作業に功のあった藤原定家その人のことなのである。この奥書の解説に至るエピソードについては、これまた当時国文の専任であった片桐洋一教授の回想録『平安文学五十年』（和泉書院）という本に詳述されているので、是非とも参照されたい。

さて、この廣瀬本万葉集が、藤原定家の手を経たものであることが分かってみると、さあ、大変。その本文内容と併せ鑑み、同本はたちまち学界有数の貴重な伝本ということになってきたのである。それがいかに学術的価値が

高いかは、『校本万葉集』新增補版（岩波書店）の解説に寄られたいが、ごく最近のものでは、昨秋、関西大学で開催された和歌文学会で廣瀬本万葉集について講演をされた、国文学研究資料館の田中大士氏の懇切丁寧なる論文「廣瀬本万葉集とはいかなる本か」（関西大学アジア文化研究センター発行「ディスカッションペーパー」第8号）が委曲を尽くしているの、興味のある方は、是非ともそれに寄られたい。

次に、同じく万葉集関係者の間ではよく知られた春日本と呼ばれる古写本の断簡。これはもと南都の神官・僧侶らによって書かれた和歌懐紙の紙背に、中臣祐定が万葉集を書写したもので、その奥書から寛元2（1244）年のことであったと知られる。ところが、江戸時代に入ると、表の万葉集よりも、裏の和歌懐紙の方が尊重されるようになり、それがために本は解体され、和歌懐紙を表として掛軸などに仕立てられたりする始末。だが、近代に入って、万葉学者の佐佐木信綱が裏面の万葉集に注目するようになると、再び万葉集に光が当たるようになったのである。かように、書物として、数奇な運命をたどった春日本であるが、現在では、万葉集・懐紙ともに国文学上・書道史上の貴重な資料として、大事に扱われている。

さて、関西大学図書館蔵の春日本は、わずかに巻19の歌4首を伝える古筆切1枚にすぎないが、後世、万葉集の流布本の礎となった仙覚の書写校訂した本より以前に書写した本として、学界でもことのほか珍重されている。この切は、私の図書館長時代に、京都のさる古書店に出て、大学に購入してもらったもので、私にとっても、愛着措くあたわざる品となっている。

万葉集の次は、古今集。古今集は、わが国初の勅撰和歌集だけあって、平安から中世にかけて、数かぎりないほどの写本作りがなされてきた。とりわけ歌人として知られる藤原定家は古今集の本文研究に熱心で、その生涯に実に17度も古今集を書写したという。その内、後世に流布したのは、定家の晩年、貞応2（1223）年7月に書写校訂したもので、今日世に伝わる9割以上の写本が、この貞応2年本に属するといわれている。

さて、関西大学図書館の本はといえば、定家本としては珍しい、建保5（1217）年2月に書写された本の流れを汲むもの。この建保5年本は、従来、

定家の明月記に古今集を書写した旨の記事が見出されはするものの、本文そのものは、その存在が知られていなかった。関大本は、この建保5年本を、天文5（1536）年に三井寺の持教というお坊さんが写したものだが、この系統唯一の伝本として注目される。この本は、京都の古書店の目録に乗ったものが、当時関大の専任教授であった、古今集研究の第一人者片桐洋一先生の眼に止まり、関大図書館に入ったもの。この本の詳細については、片桐先生の大著『古今和歌集以後』（笠間書院）を参照されたい。

後撰集も古今集同様に後世流布したのは、藤原定家の手になる校訂本。従って、厳密にいうならば、平安時代の人々が読んでいた後撰集の形はこれでは分からないことになろう。関西大学図書館本は、江戸期の書写ながら、承保3（1076）年4月に写した旨の元奥書を持つ貴重な本。もと公卿の日野家に伝来したことから日野本八代集と称される写本の内の一。定家本とは、歌の出入りはもちろんのこと、歌序の相違や本文の異同等が少なからず認められ、注意される。この本は、先年103歳の高齢で亡くなった、文献学の泰斗久曾神昇博士の旧蔵本で、早く小松茂美氏の大著『後撰和歌集 校本と研究』（誠信書房）に全文翻刻されたが、その後、京都の古書店を経て、私の館長時代に、めでたく関西大学の所蔵に帰した。

拾遺集も伝本流布状況は、古今・後撰に同じ。従って、定家本以外の異本系統の伝本の出現が切望される分野である。もと平安後期物語研究に功のあった相愛大学の鈴木弘道教授の所蔵であった異本拾遺集は、これ自体は、江戸期の書写本だが、上下2冊本の内、上冊の方が伝本きわめて稀な異本系統のもの。なお、巻末には、文政10（1827）年林鮎主が、飛鳥井雅有筆の定家天福本で全巻を校合した旨の奥書があり、これはこれで貴重な存在となっている。

和漢朗詠集は、紀元1000年を少し過ぎた頃に、歌界の大御所藤原公任が編んだものだが、ひと度それが世に出るや、王朝貴族の大いにもてはやすところとなり、平安・鎌倉期の写本・古筆切も汗牛充棟、実に数多くのものが伝わっている。ここでは、古筆切と古写本とを各1点ずつ紹介しておこう。

まずは、雲紙本朗詠集切。もと卷子本で、料紙には鮮やかな藍色の雲紙を使用。天地に各1条の墨界を施す。筆者を藤原公任と伝えるが、何ら確証は

なく、およそ12世紀のはじめ頃の書写になるもの。ツレ（もと同じ本から切られた断簡同士をかくいう）はいたって少なく、今のところ、拙著『平成新修古筆資料集』第3集（思文閣出版）に1葉見えるだけ。平安時代書写の朗詠集の古筆切として、珍重すべきものであろう。

ついで、生田本和漢朗詠集。大阪生田家の旧蔵品で、私の館長時代に、国文の関屋俊彦教授のご尽力によって、関西大学図書館に入ったもの。卷子本の上巻と下巻とでは、筆者を異にするようだが、紛れもなく鎌倉期の書写本で、古写の風格を備えた愛すべきもの。ただし、江戸期の補写部分が少なからずあり、その点が惜しまれはするが、紙背には、今は失われた朗詠江注（平安時代の碩学大江匡房の付けた朗詠集の注釈書）がたくさん書き込まれていて注意される。おそらく本文そのものよりも、この注釈の方が学問的には価値が大きかろう。

次に、北山切新古今集。古筆の世界では、昔から名の聞こえたこの北山切の筆者は、足利尊氏ということになっているが、これはどうせ愛好家を喜ばすために、江戸時代の古筆見が、歴史上有名な人物を引っ張り出してきただけのことだろう、というぐらいにしか従来は考えられていなかった。ところが、この本が出現してみると、何とそこには貞和6（1350）年2月に書写した旨の奥書があるではないか。これは完全に尊氏の生存年代とも矛盾しない。これで、北山切は尊氏真筆の可能性も出てきたわけである。これまた久曾神博士の旧蔵品。

最後に、藤原定家の明月記の断簡を（口絵写真参照）。大阪田尾家の旧蔵品で、もと関大職員のご遺族の方から図書館に寄贈されたもの。わずかに3行の切にすぎないが、後に千五百番歌合へと発展していった惟明親王の百首歌に関する記述が見られ、定家の自筆原本として、きわめて貴重な資料となっている。

まだ、この他にも、紹介したいものはたくさんあるが、紙数も尽きようとしているので、ここらあたりで終りにしたい。筆者の専門領域の関係から、内容が古典和歌に関するものばかりになってしまったことを、深くお詫び申し上げる次第である。

（たなか のぼる 文学部教授・元図書館長）

関西大学図書館 100 周年にあたって

— 私の夢想する図書館 —



内田 慶市

関西大学図書館は、大正3（1914）年に当時の福島学舎に初めて独立した図書館が創設されてから今年で100年を迎えることになるが、その長き歴史および規模から、大学図書館としてまさに日本有数の図書館である。

蔵書数に関して言えば、総合図書館、高槻キャンパス図書館、ミューズ大学図書館、堺キャンパス図書館を含めて約220万冊であるが、たとえば世界最大の大学図書館であるハーバード大学の1530万冊に比べたら、その数字が多いか少ないかは一概には言えないところではある。しかしながら、その蔵書数はともかくとして、本学図書館が世界に誇るべきものの一つに、東アジア関係の個人文庫がある。総合図書館に収められている個人文庫としては、増田文庫、泊園文庫、内藤文庫、長澤文庫、中村文庫、吉田文庫等があるが、これらの文庫は、まさに「知る人ぞ知る」コレクションであり、この分野の研究者の垂涎の的となっている。それはオックスフォード大学ボードリアン図書館のワイリー（Alexander Wylie）コレクション、ケンブリッジ大学図書館のウェード（Thomas Francis Wade）コレクションやバックハウス（Edmund Backhouse）コレクション、ロンドン大学SOASのモリソン（Robert Morrison）コレクション等にも匹敵するものである。

ただ、こうした日本でも希有の素晴らしい大学図書館ではあるが、一方でまた多くの課題も山積している。その幾つかを示せば、以下のようなものが挙げられるだろう。

1. 「ラーニング・コモンズ」に代表される図書館の新しい機能の付加
2. 紙媒体からデジタル化・アーカイブス化へ
3. 書庫の狭隘化への対応

4. 電子ジャーナル・データベース経費の肥大化への対策
5. 貴重書、コレクション等の取り扱い方 = 「秘蔵は死蔵なり」

1については、文科省も施策として強く推し進めているものであるが、もちろん「コモンズ」が必ずしも図書館になければならないというものではない。しかしながら、図書館が本来「知の保管場所」という性格を有している以上、これを利用した学生の主体的学びの場の確保、あるいは学習支援という観点から本学においても積極的に推進すべきものだと考えている。

私は研究の関係からこの20年ほど毎年夏休みを利用して欧米の図書館での資料調査を行ってきている。そこでいつも感じるのは、歴史と伝統を背景にした図書館の「荘厳さ」と一方ではその「利便性」である。毎年訪れるローマのカサナテンセ図書館（図1）やイエズス会資料館、フランス国立図書館、ドイツのヴォルフエンビュッテルにあるヘルツォーク・アウグスト図書館やハイデルベルク大学図書館（図2）などはその建物からして重厚そのものである。いくら日本の大学図書館の歴史が長いと言ったところでこれらには到底敵わないのだ。しかし他方、欧米の多くの大学図書館ではコモンズやカフェが当たり前のように設置されていて多くの学生達がそこで24時間集い、



図 1



図 2

熱心に議論したり研究をしたりしているのだ。この状況は実は最近のアジア諸国においても同様であり、香港（図 3-5）や中国の大学でもコモンズは極めて充実しており、そこから世界大学ランキングトップ100に入るような「知」が形成されているのである。ところが、この国ではともすれば「コモンズなど作ったら図書館本来の静粛さが失われる」などといった意見が真顔で述べられたりする（一度でも実際にコモンズを見ればそういった不安は払拭されるはずなのだが）。もちろん、古典的図書館の「不易」の部分は当然維持されなければならないのだが、一方で「流行」＝「変革」も必要なのである。

2のデジタル化、アーカイブス化については、これまで本学図書館ではほとんど行われてこなかったものである。しかしながら、紙媒体からデジタル化は世界の流れである。Google や Hathi Trust Digital Library、Internet Archives、Open Library などの試みは言うに及ばず、世界の多くの大学、研究機関では大規模なデジタル化、アーカイブス化が急速に進んできている。アジア諸国でも中国の CADAL の 300 万冊デジタル化や台湾中央研究院の漢籍データベースなど大規模なプロジェクトが進行しているが、日本では、早稲田大学、国会図書館など一部で行われているに過ぎない。実は、環太平洋デジタル図書館連合（PADLA = Pacific Rim Digital Library Alliance）というのもカナダ、中国、韓国、台湾、香港、シンガポール、オーストラリアで組織されているのだが、日本では一つの大学も参加していない現状である。本学では、CSAC（アジア文化研究センター）が研究プロジェクトとしてこの数年来、個人文庫を中心に順次デジタル化とその公開を行ってきているが、まだ4,000冊足らずであり、今後、図書館としての取り組みが求められるところである。

3と4は、恐らくは他の大学図書館でも同じ状況であり、一つの大学だけで解決できる問題ではなくなってきた。

3の書庫の狭隘化に対しては、たとえば、香港の8大学で計画されているような「大学間共同書庫」「共同利用」を考える時期に来ていると考えている。せめて、関関同立の間からでもこれは試みられてもいいだろう。

4に関しては、ドイツでは「Cross Asia」と呼ばれる、ドイツ国家図書館

が主導して、国内の研究機関が一定の金額を国家図書館に支払うことによって機関所属の登録ユーザは制限無しにデータベースを利用できる仕組みが出来ている。120種類ものデータベースを国家図書館が契約して、それをドイツ国内の大学、研究機関に利用させているわけで、この方式などは日本も学ぶべきものであると思われる。各大学がそれぞれジャーナルやデータベース契約を結んではコストも高くなる。近隣の大学で共同契約、共同利用を考えるべきなのだ。

5は実はこれまで機会がある毎に触れてきたことであるが、東アジアの図書館に共通する「秘蔵」の発想を転換すべきだという基本的な考え方によるもので、結論から言えば欧米の図書館での Rarebook の扱いを見習うべきである。

筆者はかつて「秘蔵は死蔵なり」と題して日本の図書館における特に貴重書の公開のあり方に疑問を呈したことがある。（「秘蔵は死蔵なり——図書館と文献公開のあり方」『東方』360号、2011.2）

それは前政権時代に「2位では駄目なんですか」という一時期よく取り上げられた発言に絡んで毎日新聞（2010.1.12）の「憂楽帳」氏がハーバード



図 3



図 4



図 5

の図書館について述べたことに対しての私見であった。

ハーバード大学の顔、ワイドナー記念図書館は、ギリシャの神殿を思わせる重厚な建物である。(中略) 大学にはほかに70もの図書館があり、計1620万冊の蔵書数は学術機関として世界一。コレクションは毎年30万冊ずつ増えている。(中略)

しかし、驚くべきはその点ではない。世界中に張り巡らされたネットワークである。留学中、日本の図書館しか所蔵していない資料が必要になった。インターネットで必要事項を入力すると、3週間後には海を渡って手元に届いた。

行政刷新会議の仕分け作業で、次世代スーパーコンピューター事業に対して「2位ではだめなんですか」という議論があったが、その発想はあまりに貧しい。基礎研究と同じで、図書館の整備は直接、利潤を生まない。だからといってハーバード大が蔵書の充実に急ブレーキをかけるだろうか。志を下げた途端、「知の磁力」は失われるのだ。

この文章を読んで、私は、この御仁はおそらく図書館をまともに利用したことなどないのだろうと思った。ハーバード大学図書館の優れたサービスを取り上げるのはよい。しかしながら、そのことと事業仕分けあるいは「2位ではダメなんですか」という発言とは全く無関係である。日本の図書館にハーバードの何十倍、何百倍の予算を付けたとしても今の日本の図書館の状況は全く変わらないと断言できる。つまりは、それは予算とか設備投資とかとは無縁のものであることをこの御仁は分かってはおられないのだ。氏は「2位ではだめなんですか」ということに関して「その発想はあまりに貧しい」と述べているが、その言葉はそのままそっくり憂楽帳氏に帰すべきものなのだ。その発想こそ余りに貧弱なのだ。

私は毎年欧米の図書館を何度も利用しているが、そこでいつも感じるのが日本や中国の図書館の「秘蔵主義」である。東アジアの図書館は総じて利用者の便宜に全く供していないのだ。憂楽帳氏が述べているのはインターライ

ブラリーローンというものだが、そんなサービスは今や日本でもやられていることで、決して珍しいことではない。そんなことより問題なのは、たとえば、いわゆる「貴重書」「レアブック」の閲覧や複写サービスである。自分の大学を例にしても、貴重書は数日前にあらかじめ申請をしてその許可を得なければいけないし、また複写に関しても上で述べた通りである。

これに対して欧米の図書館では、紹介状もなしに飛び入りで行っても、基本的には即現物を閲覧させてくれるし、複写もほとんど全ページが可能である。

筆者の体験を少し記せば、数年前に、オックスフォードのボドリアン図書館に行った時である。日本から4人で訪れたのだが、紹介状も持たずにいきなり「ワイリーのコレクションを見せてもらえないか」と切り出すと、最初は戸惑った様子だったが、そのうちアジア関係の責任者が出てきて「どうぞ」と書庫まで入れてくれたのだ。その上、ワイリーだけでなくバックハウスのコレクションまで見せてくれた。マドリッド国立図書館でもバルセロナ大学の図書館でも同様であるし、一昨年のローマのカサネテンセ図書館でもそうだった。そうしたことは欧米ではしょっちゅう経験済みである。もちろん、礼儀として、紹介状と現住所確認のできる書類、それにパスポートを携帯することは必要であるが、仮にそれがなくても、研究者には随分と便宜を図ってくれることが多いのである。つまりは、「本は使われるためにある」という思想が徹底しているのだ。

書籍や図書館に対する基本的な考え方の違いが欧米と東アジアには存在するのである。このことを問題にしない限り、いくら予算を増やしたところで、真に利用者のための図書館にはならないのだ。貴重書はもちろんその保存に努めなければならないし、著作権は守られねばならない。が、それが決して「秘蔵」であってはならないのだ。「秘蔵」は「死蔵」であり、それは書籍の本来の使命ではないはずだ。むしろ積極的にデジタル化していくことの方が将来にわたっての保存にもつながるのだと私は考えている。こうした根本的な議論を抜きにして、ただただ「2位ではだめなんですか」ばかりを取り上げて鬼の首でも取ったかのように考えている憂楽帳氏は、この本質を全く

分かってはいないのだ。こうした日本や東アジアの図書館では氏の言われる「知の磁力」なんぞ、とっくに失われているのである。

この考えは何の因果か関西大学図書館長に命じられた今も変わることはない。欧米の図書館に比べて、貴重書の扱いは日本をはじめ東アジアの図書館は極めて「保守的」である。もちろん、最近はやうやく多くの図書館がその門戸を開放し始めてはいるが、それでもまだまだの感は否めない。そして、奇妙なことに、こうした「公開の度合い」は、知的所有権に対する意識の高低と反比例しているということである。欧米は知的所有権に対しての意識は非常に高いものがあり、著作権や所蔵権は厚く守られている。しかし、一方で徹底した情報公開、開示が行われているのだ。日本では逆に違法コピーがまかり通り、貴重書はごく限られた者にしか見せられないのだ。しかしながら、書物の使命は「読まれる」ことにあるはずだ。その使命を全うすることなく秘蔵されては、それはまさに「書物の死」なのだ。

以上の問題以外にも、たとえば、「書庫」という伝統的な考え方についても見直す時期に来ているように思われる。最近の大学図書館では「オール開架」という形も登場してきている。書物はKOALAなどの「検索」で見つけることも当然必要なのだが、それ以上に、実際に書架を一つ一つ見ていくことがより重要なのだと私は体験から思っている。検索はあくまでも「目指すもの」がある場合であって、書架を順に見ていくことで新しい発見が往々にしてあるのである。それは、電子辞書と紙の辞書との違いとよく似たものである。電子辞書はあくまでも引くべき単語が決まっているものである。一方、紙の辞書の場合には、引きたい単語の周りまで一緒に見ることが可能なのである。

また、欧米の図書館では当たり前の「ライブラリアン」の導入も日本でも考えられてよい。

日本では他の事務部署と同じように扱われており、採用も同じだし、当然、異動もある。しかし、図書館業務は一種の「専門職」である。せっかく図書

館業務を身につけたと思ったら、別の部署への異動である。これは実に非経済的ではないか。せめて図書館正規職員の半数は専門職として扱うべきであると思っている。

ところで、最後に、デジタル化時代において、紙媒体はどうなっていくのかである。

教室から紙の辞書が消えて久しく、語学の授業など、ある単語を調べさせると、一斉に同じような電子辞書が開かれる。確かに、紙の辞書よりも軽いし携帯には便利である。近頃は、スマートフォンでも辞書アプリが入っている。iBooks等の電子図書も普及しており、最近ではページめくりが紙と同じイメージで実現されてはいる。しかしながら、こうしたものには、根本的に欠けているものがあると私は思っている。それは、紙の質感とか紙の匂いである。たとえば、あの古書独特の匂いは決してデジタルでは再現されないものである。紙の暖かみ、手触り、そんな中から知的興味が沸き立ち、書き込みや赤線を引くことで思索が深まっていくのである。デジタルとアナログは、決して相対立し、排除し合うものではない。「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」であるべきで、まさに人と人との関係における「みんなちがって、みんないい」と同じであると私は考えている。

(うちだ けいいち 外国語学部教授・現図書館長)

第3部

図書館の文庫・コレクション

文庫・コレクションの紹介

鷓飼香織

※本文では敬称を略しています。

※口絵「文庫・コレクション」を参照ください。

当館では、数多くの個人文庫・特別コレクションを有しており、旧館報にあたる『籓苑』第20号—総合図書館開館記念特集—（昭和60(1985)年4月28日発行）に紹介しております。この第3部では、それ以降に設けられた新たな個人文庫及び特別コレクションを紹介いたします。

大阪文芸資料

関西大学は大阪に位置する大学であることから、古くから大阪郷土資料の蒐集に力を注いできた。昭和35（1960）年には『大阪関係資料目録』を刊行し、昭和58（1983）年からはその対象を、明治・大正・昭和の三代にわたる大阪の作家、画家、芸能人等の作品と、大阪を題材とした作品と定め、積極的に蒐集してきた。その成果は、平成2（1990）年刊行の『大阪文芸資料目録』として結実している。その後も蒐集は続いており、現在所蔵冊数は、12,200冊である。

1 大阪文芸資料の内容

コレクションの内容は、蒐集対象作家の初版本や大阪を題材とした作品、大阪の芸能人の自伝及び芸能関係資料など約10,700冊、自筆原稿約100種、短冊約80種、色紙約90種、書簡約210種、一枚物約400枚、また大阪発行の文芸雑誌、芸術関係雑誌約620種からなる。

帯やカバー等を残す原装保存を採用しており、出版当時の趣向をこらしたキャッチコピーや装丁を味わうことができる。

2 蔵書紹介

大阪文芸資料は多岐にわたるため、その一部のみ紹介する。

- (1)渦巻：小説 上、中、下、續編 渡辺霞亭著 錦木清方口繪 隆文館
大正 2-3 年（1913-1914） 4 冊 [LO2*W*2*36-1/4]
大阪文壇は、明治 14（1881）年から 31（1898）年頃の新聞小説から始まるとされるが、渡辺霞亭はその中心的人物である。
- (2)川端康成自筆原稿 昭和 31 年（1956） 2 枚 ペン書 日活映画「東京の人」についての原稿 [LO2*K*42*163]
日本人初のノーベル文学賞受賞者である川端康成の作品は、大阪文芸資料には、原稿のほか書簡、葉書等 255 点が収蔵されている。
- (3) [浪花美人と戎大黒図]：背景に淀川の鉄橋 長谷川貞信画 1 枚
14.3 × 26.6cm 色刷 [LO2*733**5]
長谷川貞信は江戸後期から活躍する大坂の浮世絵師。図書館では大阪文芸資料のほかにも初代から三代までのコレクションを有している。

長澤文庫

長澤文庫は、中国文学研究者であり、また和漢古書の書誌研究者である長澤規矩也（明治 35 年 5 月 14 日～昭和 55 年 11 月 21 日）[1902-1980] の旧蔵書である。

昭和 48（1973）年 8 月から始まった大阪天満宮の御文庫の整理は、漢籍は長澤規矩也が、国書は中村幸彦が中心となって進められた。長澤規矩也の下では、森上修（当時大阪府立図書館員）、長澤孝三（当時瀧井姓）が作業した。なお、当初この班には大庭脩（当時関西大学教授）が参加する予定であったが、校務多忙のために、長澤孝三と森上修が参加したとのことである¹⁾。

長澤規矩也逝去後、森上から大庭に旧蔵書寄贈の相談があり、大庭が文学部、さらには大学を動かして、関西大学に入ることになった。

図書館には平成 2（1990）年 10 月末に当時の浦西和彦図書館長に伝えられ、その後受入の準備を整えて、平成 5（1993）年に「長澤文庫」が創設された。

平成 5（1993）年から平成 14（2002）年の 10 年間をかけて約 31,000 冊が蔵書となる。

1 長澤文庫の内容

蔵書の内容は、主として明治、民国以前の刊本や写本が約28,000冊（漢籍約18,000冊、和書約10,000冊）、地図や役者絵など一枚物が約2,000枚、各機関の目録類などを含む洋装本が約1,000冊である。

2 蔵書紹介

春秋經左氏傳句解 70巻（存20巻） 宣徳6（1431）年11月 2冊
25.0 × 15.9cm [CL23**A*415/416]

朝鮮刊本。存巻第51至70。巻之61-70の裏表紙裏に「昭和十六年十二月十九日北京ヨリの帰途 京城二下車 群書堂ニ之ヲ得タリ 戸川濱男」と朱筆があり、「殘花書屋」「戸川氏蔵書記」の印あり。「殘花書屋」は戸川残花の、「戸川氏蔵書記」は戸川浜雄²⁾の蔵書印。戸川浜雄は残花の長男。浜雄は父残花の印を譲り受け、使用していたようである。

中村幸彦文庫

中村幸彦文庫は、日本近世文学の研究者である中村幸彦（明治44年7月15日～平成10年5月7日）[1911-1998]の旧蔵書である。

中村幸彦は、昭和46（1971）年から54（1979）年まで本学文学部教授を務め、昭和48（1973）年10月から51（1976）年9月までは第10代図書館長として、現在の総合図書館建設計画を進めるなどの功績を残した。

その蔵書については、谷沢永一（当時関西大学教授）を通じて生前の平成3（1991）年3月に譲渡の約束を交わした。平成10（1998）年5月7日中村幸彦逝去後、譲渡契約までの間は「故中村幸彦氏蔵書の寄託に関する覚書」を締結、蔵書は7月末に関西大学図書館に移送された。そして平成13（2001）年3月、譲渡契約を交わし「中村幸彦文庫」が創設された。翌平成14（2002）年から18（2006）年まで5年をかけて約33,000冊が蔵書となった。

1 中村幸彦文庫の内容

蔵書の内容は、主に清・江戸時代までの刊本および写本である和漢古書

(漢籍・漢詩文、仮名草子・浮世草子、談義本、隨筆、読本、黄表紙、滑稽本、人情本、実録、歌書、俳諧、丸本、雜書、淡路島関係書など)が約15,500冊、現代の和書(洋装本、和装の現代和書、手澤本・秋成・広瀬家関係書など)が約17,000冊、現代の中国書が約420冊、その他に資料(原稿、自筆ノート、語彙カードなど)が55箱、雑誌が41タイトル含まれる。

2 蔵書紹介

尚書註疏 20 卷 旧題 (漢) 孔安国伝 (唐) 孔穎達等奉勅疏 (唐) 陸徳明釈文 南宋中期刊 20 冊 13.2 × 11.1cm [CL24**1*1/20]

中村幸彦文庫唯一の貴重書。中国最古の歴史書で、堯、舜から周までの政治に関する意見を集めたもの。

本書は経の本文に続き、注、疏、釈文、重言、重意、互註を合刻。帙に貼付された昭和39(1964)年5月29日付長澤規矩也筆のメモには、書誌事項のあと「南宋中葉刊本。コノ本ノコトハ諸目録ニ未載。疏ト別ニ釈文を加へたるを注意すべし。十行本の祖本と何れが先なるか、再考すべし。」とあり、旧蔵者が福岡市内の古書店から購入するにあたり、長澤規矩也に資料について尋ねたことが知られる。

廣瀬文庫

廣瀬文庫は、チョーサー等の英文学研究者である廣瀬捨三(明治44年9月29日～平成14年2月2日)[1911-2002]の旧蔵書である。

廣瀬捨三は関西大学法文学部文学科を卒業し、大学院を経て、昭和15(1940)年同大学予科の助教授となり、昭和17(1942)年教授に就任した。その後一旦退職ののち昭和19(1944)年予科に復職、昭和23(1948)年文学部教授となり、昭和42(1967)年11月から44(1969)年9月までは第5代図書館長を、昭和45(1970)年10月から48(1973)年9月までは第27代関西大学学長を務めた。

専攻は中世英文学であったが、萬葉集をはじめ古典籍の熱心な蒐集家であった廣瀬捨三の蔵書が本学図書館に入ったのは、逝去後の平成14(2002)

年の3月末、ご遺族から蔵書を関西大学に預けたいとの申し出があったことに始まる。4月には全蔵書を図書館へ搬入、11月に「廣瀬文庫」寄託の覚書を締結し、平成14（2002）年に「廣瀬文庫」を創設、平成18（2006）年から平成19（2007）年にかけて約4,100冊が蔵書となった。

1 廣瀬文庫の内容

蔵書の内容は、国書が約1,700冊、漢籍が約1,200冊、洋書が約800冊、現代の和装本が約400冊、自筆ものが28点の合計約4,100冊である。そのうち貴重書は、国書では「廣瀬本万葉集」として世に知られる10冊があり、洋書では『The Canterbury tales of Chaucer: to which are added, an essay upon his language and versification, an introductory discourse, and notes』など75冊が該当する。

2 蔵書紹介

萬葉集 20巻 春日昌預等写 天明元年12月24日（1781） 10冊
26.6 × 18.8cm [CL25**1-1*1/10]

本書は廣瀬捨三が、昭和54（1979）年大阪そごう百貨店開催の古書展にて発掘。仙覚本系とは系統の異なる非仙覚本で、非仙覚本系では唯一全巻揃った写本。墨付総丁数は1043丁。

藤原定家が鎌倉幕府三代将軍の源実朝に贈った、相伝秘蔵の万葉集を後年写したものであろうといわれる。

谷沢永一コレクション

日本近代文学専攻で、文芸評論家、書誌学者として著名な谷沢永一（昭和4年6月27日～平成23年3月8日）[1929-2011]の旧蔵書である。

谷沢永一は、昭和27（1952）年関西大学文学部を卒業し、修士課程および博士課程を経て、昭和34（1959）年文学部専任講師となった。昭和37（1962）年助教授となり、昭和43（1968）年には教授に就任する。

平成3（1991）年3月退職の前後から、図書館はたびたび蔵書の寄贈を受

けてきたが、平成19（2007）年6月に受領した98冊を、特に「谷澤永一コレクション」と名づけ、箱、カバー、帯等を残す「原裝保存」にて保管している。

1 谷澤永一コレクションの内容

蔵書の内容は、堀口大学訳『月下の一群』関係13冊、福田英子関係2冊、藤村操『煩悶記』1冊、ルバイヤット関係82冊の全98冊である。

2 蔵書紹介

堀口大学訳『月下の一群』関係は、堀口大学による訳書『月下の一群』のさまざまな版および刷を集めたものであり、福田英子関係は『景山英女之傳』の異装本2種で、これらは珍書として知られている。

また、藤村操『煩悶記』は谷澤永一著『遊星群：時代を語る好書録』明治篇³⁾にも全文紹介されており、天下の奇書としてつとに名高い。

ルバイヤット関係は、「『ルバイヤット』が好きである。堪らなく懐しく愛おしい。」⁴⁾と谷澤永一が述懐するとおり、片野文吉、矢野峰人、森亮等による歴代の名訳書と、さまざまな言語で書かれた原書のめずらしいものを集めている。

注

- 1) 混沌會編『混沌』第22号（中尾松泉堂書店 平成10年）p.71
- 2) 『増訂新編蔵書印譜』中（青裳堂書店 2014年）p.680 および『人と蔵書と蔵書印：国立国会図書館所蔵本から』（雄松堂出版 2002年）p.144 では「浜雄」、反町茂雄『一古書肆の思い出』（平凡社 1988年）p.340 では「浜男」と表記されている。
- 3) 『遊星群：時代を語る好書録』明治篇 和泉書院 2004年 pp.1201-1277
- 4) 『季刊アステイオン』No.6 1987-秋（ティーピーエス・ブリタニカ 1987年）p.89

参考文献

関西大学図書館編『おおさか文藝書画展：近世から近代へ』1994年9月
鶴飼香織「廣瀬文庫ご紹介」『関西大学フォーラム』第8号 2003年6月 pp.69-71
関西大学図書館ウェブサイト“コレクション”（参照2014.5.22）（URL: <http://web.lib.kansai-u.ac.jp/library/library/collection/>）

（うかい かおり）

第 4 部

資 料 編

図書館年譜（明治 19.3 ～平成 26.7）

【注】■は本学の主なトピックスを、●は国内外の主な出来ごとを記す。▲は図書館の出来ごとの区切を表しています。

- | | | |
|---------------|------|---|
| 明治 19 年（1886） | 3 月 | ●帝国大学令公布 |
| | 11 月 | ■関西法律学校開校（願宗寺：大阪・西区京町堀） |
| | 12 月 | ■東区淡路町に校舎を移転 |
| 20（1887） | 4 月 | ■興正寺に移転（北区河内町） |
| | 12 月 | ■『関西法律学校講義録』を発行 |
| 22（1889） | | この頃の「事務章程」に書籍及び同目録の管理責任者を定めてあり、校舎として使った興正寺の一隅に図書室的なものがあったことがうかがえる |
| | 2 月 | ●大日本帝国憲法発布 |
| | 4 月 | ■司法省顧問ボアソナード博士が来学 |
| 24（1891） | 5 月 | ●大津事件（■本学創立の事にあずかった児島惟謙が大審院長になった直後のこと） |
| 29（1896） | 4 月 | ●近代オリンピックの第 1 回がアテネで開催 |
| 32（1899） | | ●はがき郵便料金 1 銭 5 厘 |
| | 8 月 | ●私立学校令公布 |
| | 9 月 | ●図書館令（勅令大 429 号）公布 |
| 33（1900） | | ●丸善が米国からタイプライター「ウエリントン No.2」を輸入（1 台 135 円と広告） |
| 34（1901） | 7 月 | ■私立関西法律学校と改称 |
| 36（1903） | 3 月 | ●専門学校令公布 |
| | 4 月 | ●大阪府立図書館開館 |
| | 12 月 | ■江戸堀校舎竣工移転（西区江戸堀北通） ●ライト兄弟初飛行に成功 |
| 37（1904） | 1 月 | ■専門学校令による専門学校として認可される ▲江戸堀校舎に書籍室を置く |
| | 2 月 | ●日露戦争勃発 |
| 38（1905） | | 明治 38 年度の図書室書籍費 120 円 |
| | 1 月 | ■私立関西大学と改称、大学科、大学予科及び専門科を設置 |
| 39（1906） | 12 月 | ■福島学舎竣工移転（北区上福島北 2 丁目） |
| 40（1907） | 3 月 | ●義務教育 6 年制、小学尋常科 6 年・高等科 2 年と |

		なる
	10月	●日本文庫協会（現日本図書館協会）が『図書館雑誌』を創刊
43（1910）	5月	●ハレー彗星地球最接近
44（1911）	1月	●白瀬中尉の南極探検隊、南極平原に日章旗立てる
大正元年（1912）	8月	福島学舎増築工事が竣工し、同学舎に図書室を置く
2（1913）	4月	■関西甲種商業学校開校
3（1914）	7月	福島学舎に図書館竣工（その一室に閲覧室を置いた2階建洋風館で、本学初の独立図書館 ●第1次世界大戦勃発
5（1916）	12月	■大学創立30周年記念式典を挙行
7（1918）	8月	●米騒動
	12月	●大学令公布
9（1920）	1月	●国際連盟発足
	3月	■財団法人に改組し、私立の二字を削除し校名を関西大学と改称
10（1921）	10月	■岩崎卯一、初の専任教授に就任
	12月	■大学創立35周年記念祝賀式典を挙行
11（1922）	4月	■千里山学舎（予科校舎）竣工 ▲予科校舎に図書室を置く
	5月	■千里山学舎に大学部、大学予科を移転
	6月	■大学令による大学として認可され、大学院を附置
	9月	●学歌制定（服部嘉香作詞・山田耕筰作曲）
12（1923）	9月	●関東大震災
13（1924）		「関西大学図書館規則」制定
14（1925）	4月	●治安維持法公布
	5月	●普通選挙法公布
15（1926）	11月	千里山図書館の設計案成る
昭和2年（1927）	3月	大学部の本館に読書室および書庫を設ける
	6月	千里山図書館起工式
3（1928）	2月	●わが国初の普通選挙が実施される
	4月	千里山図書館竣工 ▲蔵書15,821冊
4（1929）	2月	●森清編『日本十進分類法』刊
	3月	「図書館事務大要」と「図書館管理及其分掌」が定められ、司書部と事務部が置かれる
	4月	■大学院を開設
	9月	■天六学舎竣工（専門部・関西甲種商業学校・第二商業学校が福島学舎から移転）

- 10月 ●世界恐慌始まる
- 11月 天六分館目録作成開始（登録番号1番より） ▲「関西大学図書館規程」制定（平成13年制定の同名規程とは別のもの）
- 12月 天六学舎に図書館を設置（地階）
- 5（1932） 7月 ●第10回オリンピック大会がロスアンゼルスにて、大島鎌吉が三段跳びで3位入賞、本学初のメダリストとなる
- 10（1935） 3月 天六学舎本部増築工事が竣工し、天六学舎図書館は地階より4階に移転
- 11月 千里山本館目録作成開始（登録番号「1」番より）
- 11（1936） 2月 ●2.26事件
- 4月 新予科校舎に図書室を設置
- 5月 ■大学創立50周年記念行事を開催、『関西大学創立五十年史』を刊行
- 13（1938） 5月 全国私立大学図書館協議会（のち、私立大学図書館協会）創立
- 9月 初代図書館長・岩崎卯一就任
- 14（1939） 9月 ●第2次世界大戦勃発
- 15（1940） 「小畑文庫（別置記号：LO）」設置
- 16（1941） 「興亜文庫（H2）」設置
- 18（1943） 「南方文関係資料（H3）」別置
- 12月 ●学徒出陣開始
- 19（1944） 4月 ■関西工業専門学校（第1部・第2部）を開校
- 20（1945） 6月 ■大学創立60周年記念式を挙行
- 8月 ●広島、長崎に原爆投下、ポツダム宣言受諾
- 21（1946） 7月 私立大学図書館協会第7回総会を戦火を免れた高野山大学で開催、15の大学が集まり協会は再出発する
- 11月 ●日本国憲法公布
- 22（1947） 3月 蔵書64,104冊 ●教育基本法、学校教育法公布
- 4月 ■関西大学教育後援会が発足 ▲翌23年から同後援会より毎年学生文庫用図書を寄贈
- 5月 ■岩崎卯一学長「関大ルネッサンス」を説く
- 6月 第2代図書館長・森川太郎就任
- 7月 「細江文庫（LH）」設置
- 23（1948） 1月 ●大学設置委員会設置
- 4月 ■学制改革により新制大学に移行 法、経済、文、商の4学部（各第1、2部）を設置 ▲岩崎学長は「関

- 大ルネッサンス」につづき、「関大アカデミア」を提唱し、同年6月に図書館は「読書と教養」講演会・図書展覧会を開催している（講師は、岩崎学長、文学部長、図書館長、図書館の課長など） ●国立国会図書館開館
- 11月 「学生文庫」創設
- 24 (1949) 1月 千里山図書館に開架式図書室を開設
- 2月 イギリスの詩人エドモンド・ブランデンが来館『Books』を揮毫し献呈される
- 3月 「生田文庫 (LI)」設置 ▲「関西大学図書館学講習所規則」制定
- 4月 関西大学図書館学講習所を設置（天六学舎にて。京都大学においても、同月「図書館学校」を開講）
- 11月 ●湯川秀樹博士がノーベル物理学賞を受賞
- 12月 ●私立学校法公布
- 25 (1950) 本学の図書目録の記述に ALA Cataloging rules を採用
- 4月 ●「図書館法」公布 ■新制大学院を開設 ■短期大学部を設置（～昭和34年3月）
- 5月 開架室用図書に別置記号「S」を付与
- 12月 新価格体系移行に伴い、図書の再評価額を、和漢書200円、洋図書700円とする
- 26 (1951) 千里山本館の旧閲覧室を回復（大戦中閉室していた）
- 3月 ■学校法人関西大学に改組 ▲「泊園文庫」「極東国際軍事裁判資料」が東西学術研究所に設置（「泊園文庫」は昭和39年図書館に移管。「裁判資料」は昭和47年に移管） ▲蔵書97,432冊
- 4月 ■東西学術研究所を開設
- 12月 「穎原文庫」設置（一般図書と混排する）
- 27 (1952) 日本目録規則1952年版採用
- 28 (1953) 基督教研究部の木下清より寄贈され聖書等キリスト教関係蔵書（同氏岳父旧蔵）をベースに「聖書コレクション」を創設する
- 2月 ●NHK テレビ本放送開始（民間テレビ放送は8月開始）
- 4月 NDCを2版から6版に変更
- 7月 第3代図書館長・大小島真二就任
- 9月 千里山本館で夜間開館を始める ▲天六分館の夜間

- 開館を復活
- 10月 貴重書に別置記号「C」を付与
- 11月 「附属図書館組織規程」制定
- 12月 「関西大学図書館閲覧及び帯出規程」制定
- 29 (1954) 3月 蔵書 142,512 冊
- 4月 開架式学生文庫を地階元ゼミ室に移す (36席3,500冊)
- 5月 私立大学図書館協会総会 (第15回) が本学にて開催、協会創立15周年記念式典も挙行され、岩崎学長が祝辞を述べる ●日本図書館協会は「図書館の自由に関する宣言」を採択 (昭和54年に、「1979年改訂」を採択している)
- 30 (1955) 4月 「個人研究用図書規程」制定
- 5月 「五弓雪窓文庫 (LG2)」設置
- 8月 ●第1回原水爆禁止世界大会が広島で開催
- 10月 千里山図書館増築工事竣工
- 11月 円型新館2階に開架閲覧室を移す ▲「関西大学図書館図書複写規程」制定 (昭和47年、同名の規程制定により廃止) ■大学創立70周年記念式典を挙行
- 12月 図書館学講習所終了式 (第5回有終)
- 31 (1956) 千里山本館にマイクロフィルム撮影機を設置 (～昭和53年)
- 3月 蔵書 183,921 冊
- 5月 私立大学図書館協会は「私立大学図書館改善要項」制定 (国立大学、公立大学もそれぞれ制定される)
- 6月 「関西大学図書委員会規程」制定
- 7月 図書館第1分室開設 (第2学舎)
- 12月 ●国際連合に加盟
- 32 (1957) 3月 蔵書 193,658 冊 ■友の像除幕式 ▲友の像は、もと千里山本館前にあったが、昭和40年旧学生部横誠之館1号館庭に移されたのち、現在は総合図書館前にある
- 9月 ●国産ロケット打上げ成功 (10月にソ連が、月に世界初の人工衛星スプートニク1号打上げ成功)
- 10月 図書館シリーズ刊行始まる (第一輯『関西大学雑誌目録和文篇』) ▲「岩崎美隆文庫 (LI2)」設置
- 12月 ■『関西大学七十年史』を刊行
- 33 (1958) 4月 ■工学部を設置 ▲登録番号「工1」番開始 ■経済・政治研究所を開設

- 9月 『関西大学論文目録』刊行
 12月 『細江文庫目録』刊行
- 34 (1959) 1月 ●メートル法施行
 3月 『関西大学雑誌目録欧文篇』刊行
 9月 「吉田文庫 (LY1)」設置
- 35 (1960) 3月 『参考図書目録欧文篇』刊行
 6月 「本山文庫 (LM)」設置
 7月 天六分館閲覧室増築工事竣工
- 36 (1961) LC 記述目録規則採用
 3月 蔵書 326,941 冊
 6月 「岩崎文庫 (LI3)」設置
 9月 「図書館長の任命及び任期に関する規程」制定
 10月 『大阪関係資料目録』刊行
 11月 「宮島文庫 (ELM)」設置 ▲日本文学の外国語訳図書
 の展示と講演会の開催 (講師ドナルド・キーン)
- 37 (1962) 1月 「玄武洞文庫 (LG)」設置
 4月 新規受入図書から NDC7 版に変更 ▲工学部分室開設
 (第4学舎)
 8月 ■堀江謙一 (関大一高 OB) がヨットで太平洋横断
- 38 (1963) 9月 『生田文庫・額原文庫目録』刊行
 10月 第4代図書館長・堀正人就任
 11月 専門図書館建設に着工
- 39 (1964) 1月 ■工業技術研究所を開設
 4月 「泊園文庫 (LH2)」が東西学術研究所から図書館へ
 移管される
 9月 専門図書館が竣工・開館して、第1分室及び工学部
 分室を吸収
 10月 ●東海道新幹線開通 ●第18回オリンピック東京大
 会開催
- 40 (1965) 日本目録規則 1965 年版採用 ▲専門図書館に本学初
 のゼロックス複写機が置かれた (大阪府内大学に置
 かれた2台のうちの1台)
 7月 ●名神高速道路全通
 11月 ■大学創立 80 周年記念式典を挙行
- 41 (1966) 4月 蔵書 467,303 冊
 9月 『雑誌目録欧文篇第2版 (総記・人文・社会科学)』
 刊行
- 42 (1967) 3月 千里山本館書庫増築 ▲417,795 冊

- 4月 ■社会学部を設置
- 7月 ■下笠・松原ダム総合学術調査団現地調査を開始（のち、図書館に「室原文庫」設置） ●ヨーロッパ共同体（EC）成立
- 11月 第5代図書館長・広瀬捨三就任
- 43（1968） 4月 社会学部学舎（第3学舎）に臨時開架閲覧室を開設
▲『利用あんない』（全26ページの写真入り本格的パンフレット）制作
- 9月 『図書館蔵書目録和文篇』刊行
- 12月 「大阪地区大学図書館における新聞の分担保存に関する協定」発効
- 44（1969） 1月 ●国内で大学紛争激化
- 6月 ■学園紛争が拡大
- 7月 ●アメリカの宇宙船アポロ11号、世界初の月面着陸成功（72年まで6回）
- 10月 第6代図書館長・荒井政治就任
- 11月 第7代図書館長・見次直雄就任
- 45（1970） 3月 ●日本万国博覧会EXPO'70が吹田市千里丘陵で「人類の進歩と調和」をテーマに開催
- 4月 ●大阪市天六ガス爆発事故発生
- 5月 ●「著作権法」制定
- 10月 『雑誌目録和文篇第2版（自然・工学）』刊行
- 46（1971） 1月 『蔵書目録欧文篇（経済・産業）』刊行
- 3月 蔵書630,748冊 ■工業技術研究所内に電子計算機室を開設
- 6月 「室原文庫（LM3）」設置
- 8月 ●円変動相場制の実施
- 47（1972） 1月 ■学生費値上紛争により24日からの学年末試験は全部レポートに切替えられた ▲大学封鎖のため名神高速道路上の本学駐車場にプレハブの学部事務室の他、図書館の目録カード検索コーナーや貸出・返却窓口が設けられた ▲『吉田文庫目録』刊行
- 3月 「極東国際軍事裁判資料（LF）」が東西学術研究所から図書館へ移管され、『極東国際軍事裁判資料目録』を刊行 ■高松古墳発掘調査（極彩色の壁画を発見）
- 4月 ●学校法人会計基準制定・施行 ▲同会計基準に従い、固定資産図書「A系」登録番号および消耗図書「B系」登録番号開始 ▲「関西大学図書館図書複写規

- 程」制定（昭和 30 年に制定の同名規程は廃止）
- 9 月 「図書館建築計画小委員会」（後に図書館建設計画小委員会と改称）を設け、新図書館についての検討を始める
- 11 月 ●「図書の会計処理について」の文部省通達あり（長期にわたり保存・使用する図書は、取得価格の多寡にかかわらず固定資産に属する図書として取り扱い、学習用図書は取得した年度の消費支出として取り扱うことを可とし、雑誌は製本費で取得価格としてよいとある）
- 12 月 ●『大学図書館研究』創刊（昭和 58 年からは国公立大学図書館協力委員会が編集する）
- 48（1973） 5 月 第 8 代図書館長・高尾忠男就任
9 月 第 9 代図書館長・前田春興就任
10 月 第 10 代図書館長・中村幸彦就任
- 49（1974） 4 月 「阪神地区相互利用に関する協定」発効
5 月 ●大阪市が史跡顕彰碑「関西法律学校発祥の地」を願宗寺跡に建立
6 月 図書館業務機械化構想 1 期案策定
9 月 大学図書委員会の中に「図書館建築小委員会」を置き、他大学図書館等の調査に着手
- 50（1975） 2 月 図書館建築小委員会の調査結果を学長に報告
3 月 『蔵書目録和文篇（政治・法律、第 1 分冊：政治）』刊行
4 月 本学図書館が私立大学図書館協会の常任理事校（会長校）となり、昭和 50・51 年度の会務を中村幸彦館長が掌理する
9 月 「服部文庫（LH3）」設置
11 月 ■大学創立 90 周年記念式を挙行
12 月 「図書館総合計画委員会」を設置
- 51（1976） 2 月 ●ロッキード事件
3 月 図書館広報誌『籍苑』創刊 ▲『岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫目録』刊行 ▲蔵書 829,091 冊
4 月 国立国会図書館印刷カードを導入
5 月 図書館総合計画委員会より学長宛「図書館及びその類縁機関における図書資料の取扱い方法の改善について」（中間答申）提出
6 月 「図書館建設計画小委員会」を第 1 分科会（ソフト）、

- 第2分科会（ハード）に分ける
- 52（1977） 10月 第11代図書館長・辻岡美延就任 ▲マイクロ資料の整理を開始し、別置記号を「MF、MS、MC」とする
- 12月 図書館業務機械化準備会発足
- 1月 図書館業務機械化プロジェクトチーム発足（業務の現状分析と文献調査）
- 3月 蔵書863,015冊 ▲図書館総合計画委員会より「図書館総合計画の策定について」を学長に答申 ▲業務機械化計画の大綱を策定（学術雑誌、洋書、和書及び閲覧奉仕の各システムのうち、第1段階として「学術雑誌管理システム試案」を作成）
- 4月 「関西大学図書館図書管理規程」施行 ▲MARC-II（LC）カード導入
- 6月 学長により「図書館総合計画の策定について」を理事会に進達、承認
- 8月 「図書館建設実行委員会」を設置 ●日中平和友好条約調印
- 12月 図書館にオンライン端末装置を設置し、ホストコンピュータと接続 ▲「関西大学学術雑誌管理システム」開発計画を策定し、「KULPIS」と命名する
- 53（1978） 2月 KULPIS オンライン運用システムを自館開発
- 3月 KULPISのオンラインシステム（学術雑誌仮受入業務）開始
- 4月 「阪神地区相互利用協定『分担保存実施要領』」施行
- 6月 「増田渉文庫（LM2）」設置
- 9月 KULPISのオンラインシステム（蔵書検索業務）開始
- 10月 図書館建設実行委員会より「総合図書館の建設計画について」（答申その1:新図書館の建物の規模、形状、構成及び建設用地について）を学園建設委員会委員長に提出 ▲KULPISを学内に披露する（デモンストラーション実施）
- 54（1979） 3月 『摂津国嶋上郡高浜村西田家文書目録』刊行
- 4月 学園建設委員会より前年10月の「答申その1」を理事長に答申、理事会において承認 ▲KULPISによる固定資産製本雑誌の登録番号「C1」番より開始
- 5月 第12代図書館長・大西昭男就任 ●改訂「図書館の

- 自由に関する宣言」が日本図書館協会総会で決議
- 10月 第13代図書館長・大庭脩就任 ▲「矢口文庫（「LY2）」設置
- 11月 国公立大学図書館協力委員会設立
- 55（1980） 1月 ●学術審議会より「今後における学術情報システムの在り方」が答申される
- 3月 『河内国丹北郡六反村西田家文書目録』刊行
- 5月 ●『大学図書館協力ニュース』創刊
- 6月 ●日本図書館協会は「図書館員の倫理綱領」の制定を総会で決議
- 56（1981） 2月 『撰津国住吉郡中喜連村佐々木家文書目録』刊行
- 3月 図書館建設実行委員会より「新図書館建設計画案」（答申その2）を学園建設委員長に提出 ▲学内図書資料所蔵関係機関を含む学術雑誌の総合目録化着手 ▲蔵書1,062,218冊 ▲「関西四大学図書館長会議規約」締結 ▲「関西四大学図書館相互利用協定」発効 ▲図書館閲覧システム開発計画を策定
- 4月 「図書館複写規程」一部改正（昭和47年設定の普通紙A4判15円、B4判20円を全て10円に改正）
- 5月 運営課の分掌業務に図書館機械化業務を加え、図書課を廃止し、収書課、整理課の2課を設ける ▲「図書館建設計画小委員会」を改組し、「図書館建設小委員会」発足
- 7月 第1回学内図書資料に関する事務連絡会議開催（昭和55年12月27日付文部省大学局長からの学長宛文書「経済学・商学関係学部の改善について」に従い、学長の命令により大学事務局長が主宰。学内所蔵機関逐次刊行物目録欧文編作成計画案が示される） ▲『和泉国大島郡豊田村小谷家文書目録』刊行
- 10月 第14代図書館長・名取栄史就任
- 11月 鬼頭梓建築設計事務所に総合図書館の設計を委託 ▲図書館業務機械化第1次中期計画（昭和57～61年度）を策定
- 57（1982） 3月 『和泉国大島郡岩室村中林家文書目録』刊行
- 4月 館内の「図書館建設小委員会」に6分科会を設ける（書庫・移動計画、閲覧関係、業務機械化、事務組織・分掌事項、連絡調整会議、事務局） ■第4グラウンド竣工 ▲第1次図書館業務機械化中期計画（～61

- 年度) 実施 ▲総合図書館開館に備えて、現蔵の学習用図書を転用して再利用する分に「16系」の登録番号を付与し、補充するリフレッシュ分に「17系」を付与することを決定 ■関西大学情報処理センター開設(関西大学電子計算機室を改組)
- 5月 関西大学総合図書館・情報処理センター基本設計完成
- 9月 関西大学総合図書館・情報処理センター実施設計完成
- 10月 貴重書のマイクロ撮影計画を開始
- 58 (1983) 1月 EC(欧州共同体)委員会が本学図書館にEC資料センターの設置を認可
- 2月 関西大学総合図書館・情報処理センター起工式を挙
- 3月 TRC/MARC(JAPAN/MARC仕様)の導入を決める ▲総合図書館に向けての開架図書のリフレッシュ作業開始 ▲『関西大学逐次刊行物目録欧文篇』(初版)を電算編集し刊行
- 4月 TRC方式による学習用図書の発注を開始し、和図書に登録番号「18系」を付与 ▲専門図書館内にEC資料センターを開設 ▲「大阪文藝資料(LO2)」蒐集を本格的に開始
- 6月 「図書館業務機械化特別委員会」発足 ▲閲覧システムの設計作業開始 ▲『増田渉文庫目録』刊行
- 9月 書庫図書の簡易データ入力を開始(昭和60年2月新規受入図書より順次JAPAN/MARC仕様化)
- 10月 専門図書館にIR用端末機を置き、JOISとDIALOGのIRサービスを開始
- 59 (1984) 2月 書庫図書の全てにOCRラベル貼付作業
- 3月 『関西大学逐次刊行物目録和文雑誌編』(初版)を電算編集し刊行
- 4月 国公立大学図書館協力委員会の第5期委員長に名取栄史館長が就任 ▲「内藤文庫調査特別委員会」設置(～平成7年4月)
- 7月 開架図書リフレッシュ作業
- 8月 ●臨時教育審議会設置
- 9月 開架図書のTRC/MARC仕様化
- 10月 総合図書館・情報処理センター竣工式を挙行 ▲「内

- 藤文庫（L21）」設置
- 60（1985） 2月 総合図書館への移転作業により2月21日より4月10日まで休館する ▲旧千里山本館及び専門図書館所蔵約100万冊を総合図書館へ移転（2月21日～3月14日）
- 3月 閲覧貸出システム総合テスト・館員教育 ▲『矢口文庫目録』刊行
- 4月 図書館業務組織を改組、運営課、閲覧参考課、収集整理課、逐次刊行物課及び天六分館事務室を置く ▲総合図書館開館（11日） ▲「関西大学図書館利用規程」施行 ▲閲覧貸出システム運用開始 ▲図書館利用券「KUL-card」発行開始 ▲利用者用所蔵・検索システム「KUL」運用開始 ▲第1回特別展示（「関西大学総合図書館開館記念特別展示 内藤文庫展」）開催 ▲図書費予算4.8億円
- 5月 私学振興財団に〈特色ある研究助成〉が創設され、本学より「電算システムによる目録情報サービスの組織化」をテーマとして申請し、昭和63年度まで4ヵ年助成を受ける
- 10月 オリエンテーション用ビデオ『本の世界』を制作
- 61（1986） 3月 蔵書1,342,201冊
- 4月 来館者用図書館案内パンフレット『総合図書館』作成（平成7（1995）年まで重版使用） ▲学習用洋図書に登録番号「11系」を付与 ●文部省学術情報センター設置
- 5月 天六分館閲覧貸出システム（オフライン・パソコン対応）を開発し、10月より運用
- 10月 第15代図書館長・高島義郎就任 ▲図書館業務機械化第2次中期計画（昭和62～平成元年度）を策定 ▲上位年次用ビデオ『私と図書館』『雑誌論文をさがすには』他制作を開始
- 11月 ■大学創立100周年記念式典・記念祝賀会を挙行 ▲第7回特別展示「関西大学創立100周年記念：大阪名家自筆稿本百種展」開催 ▲『内藤文庫漢籍古刊・古鈔目録』刊行
- 62（1987） 3月 『近世文書目録その一』刊行
- 4月 ■法学研究所開設 ▲第2次図書館業務機械化中期計画（～64年度）を実施 ●国鉄民営化によりJR

- 発足
- 9月 上位年次用『ガイドブック 文献のさがし方から入手まで』（初版）を刊行
- 11月 パンフレット『図書館 HOW TO シリーズ』作成開始
- 63（1988） 4月 ●瀬戸大橋開通
- 6月 図書館図書管理規程におけるマイクロ形態資料の管理区分を変更し、固定資産に区分する
- 10月 第4回日本図書館協会建築賞に、総合図書館が「建物のみならず、すぐれた機能を持つ専門施設」であるとして優秀賞を受ける
- 平成元年（1989） 3月 『近世文書目録その二』刊行
- 4月 ▲利用者用所蔵検索システム KUL をバージョンアップして「KUL-II」運用開始（学外から電話回線による利用を実現） ▲図書費予算5.7億円 ▲マイクロフィルム 35mm 版に「61系」、マイクロフィッシュに「62系」、オーディオテープに「64系」、ビデオテープに「65系」の登録番号を付与 ●消費税法施行（3%の課税）
- 5月 私学振興財団（特色ある研究助成）に「大阪文芸に関わる資料の発掘、収集・保存、及び研究・目録刊行」をテーマとして申請し、平成4年度まで4ヵ年助成を受ける
- 10月 第16代図書館長・吉田永宏就任 ▲「図書館における図書館資料としてのニューメディア取扱・暫定要領」を定め、CD-ROM、フロッピーディスク、磁気テープ等の収集並びに提供開始 ▲『内藤文庫リスト』をNo.1より順次刊行（～No.5）
- 11月 ■関西大学100周年記念会館竣工 ■国際交流センター開設 ●ベルリンの壁撤去
- 2（1990） 1月 ●第1回大学入試センター試験実施
- 2月 第3次図書館業務機械化中期計画（～平成4年度）を策定
- 3月 『大阪文芸資料目録』刊行 ●私立大学図書館協会機械化委員会編『大学図書館機械化便覧』刊行
- 4月 「図書館利用に関する取扱要領」制定 ▲目録システム（図書を受発注、支払、予算管理、配架、目録、図書管理等業務）開発

- 12月 「北條秀司米寿記念劇作展」開催
- 3 (1991) 3月 ■高槻校地竣工式を挙行 ▲蔵書 1,507,366 冊
- 6月 文部省学術情報センターの目録所在情報システム NACSIS-CAT を VTSS 方式で接続申請し利用開始
- 7月 「図書館長の権限の一部委譲について（支払依頼行為承認者を図書館次長に委ねること）」が了承される
- 10月 第17代図書館長・浦西和彦就任 ▲図書委員会により、テーマを設定した基本図書の選定に「ドイツ統一」を決める（平成3～4年度実施）
- 11月 図書委員会で「カード目録（作成中止）について」審議が開始される
- 12月 ●ソビエト連邦消滅
- 4 (1992) ▲大阪商工会議所からの「毛戸文庫」の寄託を解除（受寄資料は廃棄する）
- 4月 書庫図書目録データ「週及入力7ヵ年計画」を策定 ▲文部省学術情報センターの相互利用システム NACSIS-ILL・情報検索システム NACSIS-IR を利用開始
- 9月 情報処理センターによる個人の利用者 ID 番号が、すべての学生に交付（申請交付方式から全員交付に）される
- 5 (1993) 3月 目録システム運用開始 ▲『芝居番付目録』刊行 ●『私立大学図書館協会 50 年史』（本文篇、記録篇、論文集の3冊）刊行される
- 4月 図書費予算 6.6 億円 ▲マイクロフィルム 16mm 版に「63系」の登録番号を付与
- 5月 書庫図書目録データ「週及入力7ヵ年計画」実施 ▲EDC セミナーを本学図書館にて開催
- 7月 私立大学図書館協会総大会（第54回）を本学にて開催（テーマ「継承と変革の大学図書館」）および、記念展示開催
- 10月 「長澤文庫（L23）」創設 ▲利用者用蔵書検索システム KUL-II をバージョンアップ（漢字検索機能〈中間一致〉追加、利用状況表示）
- 11月 私学振興財団〈教育学術情報ネットワーク関連助成〉に「OPAC・データベースの拡充」をテーマとして申請、平成6年度より現在も助成金を受ける ▲図書委員会により、テーマを設定した基本図書の選定

- に「冷戦後のアメリカ研究（一）経済・産業」（平成5～6年度実施）、及び「冷戦後のアメリカ研究（二）政治・文化」（平成6～7年度実施）を決める
- 6（1994） 3月 第2部の千里山キャンパス移転に伴い天六分館有終閉館 ▲天六分館の蔵書「B系」「D系」「1系」を除却（「1系」の図書で必要分はロケーション記号「T」のまま高槻図書室へ移管し、「B系」の一部を総合図書館へ移す） ■総合情報学部学舎棟が竣工
- 4月 ■総合情報学部設置 ▲高槻図書室をオープン ▲関西大学図書館自己点検・評価委員会発足（規程の制定は、同年1月） ▲磁気カード化された教職員証・学生証（図書館利用者ID番号付）が交付され、「KUL-card」を廃止 ▲目録システムをKULPISと併合し「図書館情報システム」として全稼動 ▲平成6年度より新規受入図書の「カード目録」作成を中止し、オンライン目録KUL-II（OPAC）に切替える ■博物館が開館 ■第2部が天六から千里山へ移転
- 5月 私学振興財団（特色ある研究助成）に「書誌学基礎資料の整備充実及び学術資料の組織化研究（長澤文庫関連）」をテーマとして申請、平成6年度より助成を受けている
- 7月 『関西大学図書館影印叢書』第1回配本（第4巻）より刊行
- 9月 学外展示「関西大学文学部創設70周年記念・関西大学図書館創設80周年記念 おおさか文藝書画展」大丸心斎橋店にて開催 ●関西国際空港開港
- 10月 学外展示「関西大学図書館創設80周年記念 近世・近代の文藝書画展」奈良県新公会堂にて開催
- 11月 カラーコピー機導入（1枚200円）
- 7（1995） 1月 ●学年末試験開始前日に、阪神・淡路大震災 ▲2月より4月まで、本学図書館を被災関連の阪神地区大学学生の利用に供する
- 3月 関西大学図書館報『籍苑』第40号にて終刊
- 4月 入館機（磁気カード対応）及び退館機を総合図書館1階エントランスホールに移設 ▲学内総合目録構築に向けて「関係所蔵機関蔵書管理システム」を開発、視聴覚教室・人権問題研究室・法学研究所等順次運用 ▲EC資料センターをEU資料センターと改称

- 7月 「図書館の電子化構想（図書館電算化第2期構想）」を策定
- 9月 「第2期構想第1次中期計画（平成8～10年度）」を立案 ▲CD-ROMサーバーシステム（6クライアント）運用開始 ▲インターネット「関西大学図書館ホームページ」テスト公開（図書館のインフォメーションを含めて、大学のホームページも試験運用開始される） ▲外国の逐次刊行物の受入先につき、丸善・紀伊國屋等経常的取引書籍業者10社に代えて、オランダのスエッツ社に変更
- 10月 図書委員会により、テーマを設定した基本図書の選定に「災害と環境破壊」（平成7～8年度実施）を決める ▲第1回関西大学図書館セミナー「米国議会情報とインターナショナル」を開催
- 8（1996） 3月 『関西大学図書館フォーラム』を創刊 ▲図書館自己点検・評価委員会により自己点検・評価の「報告書」作成して図書委員会に報告 ▲同報告書を以降毎年度『図書館フォーラム』に収載する ▲新版の来館者用パンフレット『総合図書館』発行
- 5月 館内LAN（教育研究用、及び事務用LAN）整備、拡張
- 7月 CD-ROMサーバーシステムを教育研究用LANに接続し、高槻図書室にクライアントを設置 ●堺市内の小学校で病原性大腸菌（O157）集団食中毒発生
- 9月 インターネット版利用者用蔵書検索システムの開発に着手
- 10月 ■インターネットで関西大学ホームページ（図書館インフォメーションを含む）運用開始 ▲新関西大学会館竣工記念特別展示「関西大学図書館所蔵文書戦国武将の書状展」開催
- 12月 総合図書館1階雑誌コーナー等に閲覧座席増設
- 9（1997） 3月 『関西大学所蔵 大坂画壇目録』刊行 ▲図書館案内ビデオ『知識と情報へのアクセス』を製作 ●私立大学図書館協会が「新私立大学図書館改善要項」を制定
- 4月 私有複写機にプリペード・カード方式導入（ディスプレイ、カード自動販売機設置） ▲第2バージョンの改訂新版『図書館利用案内』（1996年度版）発行

- エクステンション・リードセンター開設 ●消費税法律改訂（5%となる）
- 5月 京阪百貨店守口店のギャラリーで学外展示「大坂の書と画と本——関西大学所蔵——」を開催
- 10月 第18代図書館長・山野博史就任 ▲第2回関西大学図書館セミナー「インターネットと法情報」を開催
- 11月 インターネット版利用者用蔵書検索システム（愛称「KOALA」）の館内試験運用開始
- 10（1998） 3月 ■大学基準協会より「貴大学は大学基準に適合し」「相互評価の認定を行うことが適当である」（ただし、閲覧座席数等に関する指摘事項を含む）旨の通知あり
- 4月 総合情報学部完成（第1期生卒業）と同時に高槻キャンパスに設置の高槻図書室が図書館の組織となる ▲KOALAの本運用開始 ●明石海峡大橋が開通（7月に「中村幸彦文庫」が洲本市の中村邸から本学図書館へこの大橋を渡ってくる）
- 10月 インターネットでKOALAの公開を開始 ▲洋雑誌目次検索システムを開発し（約14,000タイトルの最新の目次情報が検索可能）運用開始 ▲電子ジャーナルのサービス（英国 MCB University Press 発行の雑誌8タイトル）をテスト運用
- 11月 第3回関西大学図書館セミナー「いま図書館員に求められるもの」を開催
- 12月 「関西大学図書館がめざす方向」ビジョン7項目を策定
- 11（1999） 2月 文部科学省学術情報センター NACSIS の「学術雑誌目次速報データベース」に参画
- 3月 公開性の高いCD-ROMサーバーへの移行により、学内LAN上でのサービス提供を可能とした ▲第2期目録情報週及3ヵ年計画を策定（第1期7ヵ年計画最終年度96%完了）
- 4月 KOALA及び「洋雑誌目次検索システム」の各英語版サービス開始
- 5月 漢籍を中心としたCD-ROM版目録『内藤文庫目録 KUL-bijou』を刊行し、全国の大学図書館等へ配付
- 11月 第4回関西大学図書館セミナー「書誌の学苑に遊ぶ」を開催 ▲図書館ホームページをサービス主導型に全面リニューアルし、新しい窓口（電子カウンター）

- として位置づけた ▲電子ジャーナル導入計画推進
(エルゼビア・サイエンスのサイエンスダイレクト等
1000 誌以上のオンラインジャーナルにアクセスを可
能にした)
- 12 (2000) 3月 第2期目録情報週及3ヵ年計画を開始
4月 図書館事務組織改編(図書情報管理課を元の運営課
に、閲覧サービス課とレファレンスサービス課を併
せて元の閲覧参考課にし、学術資料課継続して3課
体制となる) ▲閲覧サービス部門にアウトソーシ
ングを導入し、通常22時まで延長して夜間開館すると
ともに国民の祝日も開館してサービスの拡大を図る
(この件、大学から6月の理事会に報告される) ▲既
蔵書の目録データ週及入力(第2次3ヵ年計画)開
始 ●文部省学術情報センターが廃止・転換されて、
国立情報学研究所(NII)に改組される ■全学共通
教育推進機構と外国語教育研究機構を設置
- 6月 本誌『関西大学図書館フォーラム』の第5号から図
書館ホームページに全文を掲載
- 7月 インターネット環境の整ったパソコンの設置 ■大
学院学舎棟・尚文館が竣工 ▲同学舎棟と結ぶ研究
者専用通路を設置し、研究者カウンター開設
- 8月 『内藤文庫目録 KUL-bijou』刊行に対して、私立大学
図書館協会より1999年度「協会賞第1部賞(図書館
学の研究・調査業績)」を授与される ●介護保険制
度スタート
- 13 (2001) 1月 ●国の中央省庁改編、1府に12省となる
3月 「中村幸彦文庫(L24)」を創設
4月 電子展示委員会の設置(～H19年度)
5月 監査法人により「図書台帳の電子化について」を了
承される ▲監査法人の承認により、図書館図書管
理規程にもとづく現物照合を循環方式によって再開
する
7月 「関西大学図書館規程」制定 ▲私立五大学図書館
(関西大・慶應義塾大・早稲田大・東京慈恵会医大・
九州産大)はISIコンソーシアム代表委員会を組織し、
文献データベースWeb of Science 導入(lexis.com
導入など外部データベースやオンラインジャーナル
導入の拡充を図り、〈本学の図書館ビジョン第1項目

- 「メディアの多様化に対応しうる図書館」を推進)
 ▲所有権が無く利用権のみある電子ジャーナルや外部データベースの利用にかかる費用を、図書館図書費で可とする旨、図書委員会、学部長会議、理事会の承認を得る
- 9月 国立情報学研究所・私立大学図書館協会・関西大学図書館共催「目録システム地域講習会図書コース」を開催 ●米国で同時多発テロが発生
- 10月 第19代図書館長・永沼博道就任 ▲関西大学図書館Web of Science 導入記念セミナー」を開催
- 14 (2002) 3月 「廣瀬文庫 (L25)」を創設
- 4月 図書館等を傘下とする学術情報事務局が置かれる
 ▲図書館オープンシステム LINUS 運用開始 ▲収集整理部門の発注から整理・納品までの業務にアウトソーシング導入 ▲オープンシステム稼動に伴い、登録番号「A系」「B系」を凍結し、新番号体系の「21系」(固定資産図書用)、「22」系(館外整理洋図書固定資産用)、「23系」(館外整理和図書固定資産用)、「31系」(準資産図書用)、「32系」(館外整理和図書準資産用)、「33系」(館外整理洋図書準資産用)、「41系」(製本雑誌固定資産用)を、各々付与開始 ▲蔵書印の押印を廃止する
- 7月 国立情報学研究所(NII)が電子化する「紀要ポータルサイト」への協力を開始
- 9月 図書館オンラインサービス(利用状況照会・予約取り寄せ・購入希望申込み等)を開始 ▲関西大学の制度による「インターシップ学生」を図書館でも受入(開始初年度) ▲「目録システム地域講習会図書コース」を開催 ▲経済・政治研究所より、社史・地方史・団体史・Source OECD・統計書を図書館へ移管
- 10月 ●「身体障害者補助犬法」および関連法の施行に伴い、文部科学省より“身体障害者が身体障害者補助犬を同伴することを拒んではならない”旨の通知あり
- 11月 第6回関西大学図書館セミナー「米国の学術図書館における米英政府刊行物の利用実態」を開催
- 15 (2003) 3月 ウェブサイトに電子展示として「長谷川貞信(大阪の浮世絵)」を公開

- 4月 関西大学学術情報データベースの業務所管が大学事務局長秘書課から図書館運営課に変更（平成18年8月、同課から研究支援センターへ再移管） ■昼夜開講制を実施 ●国公立大学図書館協力委員会から「大学図書館における文献複写に関する実務要項」を周知される
- 5月 電子ジャーナル・データベース導入にかかる私立大学図書館コンソーシアム PULC を形成（早稲田大、慶應義塾大、関西大、関西学院大、同志社大、立命館大が発起代表委員となり、OUP 社の電子ジャーナル継続購読問題、Elsevier 社への公正取引委員会提訴や価格問題解決にあたり、電子ジャーナル提供各社への価格交渉と各大学への積極的な導入を推進）
- 10月 第20代図書館長・田中登就任 ▲第7回関西大学図書館セミナー「Westlaw リーガル・リサーチ講習会」開催
- 12月 ●米国産牛海綿状脳症 BSE 発生
- 16（2004） 1月 ●鳥インフルエンザ発生
- 3月 ウェブサイトに「関西大学図書館 電子展示室」を開設し、すでに公開済みの「長谷川貞信（大阪の浮世絵）」に加えて「伊勢物語」を公開、以降平成19年度末までに「北山切新古今集」「八代集の世界」「ちりめん本」および「戦国武将の書状」の画像を公開
- 4月 ■法科大学院設置 ■情報処理センターが圓神館（旧専門図書館）に移転し、ITセンターと改称
- 5月 図書館利用教育 Web コンテンツ「KUL GATEWAY〈関西大学総合図書館案内 on the Web〉」を図書館ホームページに公開
- 10月 ■スーパー SINET の運用を開始
- 17（2005） 3月 旧情報処理センター跡地を図書館に編入する手続を完了（これを「第2書庫」と名称。総合図書館の面積は19,105.87→21,749.93㎡となる）
- 4月 ■社会連携推進本部開設 ●JR 福知山線脱線事故大惨事
- 7月 ●英国で同時多発テロが発生
- 11月 図書館の社会貢献（図書館の公開）計画策定のため「関西大学総合図書館公開モニター」を実施（本学社会連携センターを通じ吹田市民に広報し、112名が1

- カ年間モニターとなる) ●全国のマンションやホテルに耐震データ偽造発覚
- 18 (2006) 2月 ●神戸空港開港
- 4月 ■会計専門職大学院設置
- 8月 大学の事務組織の改編に伴い、図書館・博物館を傘下とする学術センターが置かれ、図書館事務組織は、運営課・閲覧参考課・収集整理課の3課、高槻図書室、学部資料室が統合し、「図書館事務室」の1つとなる
- 10月 ■学部事務室・大学院事務室等が改組され教務センターが創設される ●冥王星が太陽系惑星から“降格”
- 11月 ■創立120周年記念式典を挙げる ▲「関西大学創立120周年記念大坂画壇の絵画展」開催
- 19 (2007) 3月 ■大学基準協会より「貴大学は本協会の大学基準に適合していると認定する。認定の期間は2014(平成26)年3月31日までとする」との認証評価の通知あり
- 4月 ■簡文館(旧図書館千里山本館)が文化庁の「登録文化財」に指定される ■2007世界フィギュア選手権大会において高橋大輔が銀メダルに輝く(オリンピック・世界選手権で日本の男子選手が銀メダルを獲得したのは初の快挙) ●『図書館雑誌』が創刊1000号となる
- 4月 「図書館の市民利用」(申込制による一般社会人100名を越える利用)を正式に開始(吹田市民対象) ▲音声ガイドシステム=イヤホンガイドを開始(イヤホンガイドは全部で20台あり、20箇所を、説明時間20分の音声で館内を案内している) ▲EU資料センターをEUi(EU情報センター)と改称 ■政策創造学部開設 ■工学部の改編によりシステム理工学部・環境都市工学部および化学生命工学部が開設される
- 5月 8年ぶりにリニューアルした図書館ホームページ正式にオープン
- 9月 図書館業務システム iLiswave-J 稼働
- 20 (2008) 2月 EUi トレーニングセッション 2007-2008 を開催
- 4月 ■関西大学北陽高等学校・中学校開設
- 5月 第29回 EUi セミナーを本学図書館にて開催
- 6月 図書委員会にて「図書館リニューアル計画(案)」が

- 審議・了承される
- 7月 ■「KU Vision 2008-2017」を策定
- 9月 館内全面禁煙実施 ●リーマンショック
- 12月 「谷澤永一コレクション」の創設
- 21 (2009) 2月 理工系学部学生には4年次生から認めていた入庫について他学部同様3年次生からとする ▲「大阪市立大学学術情報総合センター・関西大学図書館の相互利用事業に関する覚書」、及び「大阪府立大学学術情報センター・関西大学図書館の相互協力事業に関する覚書」の締結
- 4月 私立大学図書館協会 会長校就任、図書館長が同会長に就任（～H23.3.31） ■外国語学部開設 ■臨床心理専門職大学院（心理学研究科・心理臨床学専攻）を設置 ▲市民利用の対象を、吹田市に加えて大学と協定を結んでいる大阪府内の各市（高槻、池田、堺、八尾）に拡大 ▲「関西大学図書館がめざす方向（図書館ビジョン7項目）」の廃止 大学中期行動計画に基づく運営へ
- 5月 ■新型インフルエンザの感染拡大防止のため1週間全学休講 ▲図書館は休館 ●裁判員制度スタート
- 6月 ハーバードイェンチン図書館（米国）と大学図書館間協定を締結（H21.6.27）
- 7月 学生の視点で活動するピア・コミュニティ「KU コアラ」発足 ▲「関西大学図書館、早稲田大学図書館の相互利用に関する覚書」の締結
- 9月 図書館リニューアル計画に基づき、秋学期から3階小グループ閲覧室4部屋及び休憩室の仕切りを取り払い1部屋の閲覧室に改装する（48席から91席に増席） ▲KU コアラが留学生の図書館案内を実施。留学生をサポートするピア・コミュニティ「KU ブリッジ」主催の留学生キャンパスツアーの一部を担う
- 10月 第22代図書館長・北川勝彦就任
- 12月 書庫の狭隘化のため、1980年以前の洋雑誌を第2書庫に移動
- 22 (2010) 2月 早稲田大学図書館との相互利用開始、事前の手続きなしに中央館の利用が可能になる
- 3月 総合図書館の入館機をICカード対応のものに変更 ▲校友等に発行していた磁気カードタイプの利用券

を IC カードに変更 ▲高槻図書室の開室日程について、授業・試験を行っている期間の土曜日の開室時間を 10 時～17 時から 9 時～17 時に変更。これにより、総開室時間数は、30 時間増の 2,440 時間となった

4 月 ■社会安全学部、人間健康学部開設 ■高槻ミュージックキャンパスに関西大学初等・中等・高等学校開設 ■ミュージック大学図書館開設、堺キャンパス図書館仮開設 ▲大阪市立大学学術情報総合センター（図書館）との相互利用の取り決めが変更され、学部学生も利用対象となる ▲OCLC が提供する和・洋書の電子ブックコレクションである『Netlibrary』の利用提供開始

5 月 学長を通じて高等部・中等部校長から依頼があったため、プロジェクト学習や卒業研究のために関西大学高等部生徒がミュージック大学図書館を利用することを許可 ▲KU コアラ主催「日本ファンタジーノベル大賞受賞者講演会」開催。平成 25 年 6 月には「謎解きはディナーのあとで」の東川篤哉氏の講演会を開催

6 月 関西大学図書館フォーラム第 15 号（2010）を発行。今号から Web での提供となる ●小惑星探査機「はやぶさ」帰還

9 月 学長の下に「図書館のありかた検討プロジェクト」を設置（～23 年 3 月） ▲「関西大学商学部連携校特別プログラム（KUSP-C）」受講生を科目等履修生と同等の資格での図書館利用を認める ▲Mobile OPAC のサービス開始 ▲高槻市との連携協定による高槻市民へのミュージック大学図書館一般開放開始

10 月 本学での化学情報データベース SciFinder の利用方法を、クライアント版方式から Web 版方式に変更

11 月 図書館リニューアル計画の一環としての閲覧席増設のための総合図書館の改修について、図書委員会にて報告、確認 ▲図書館蔵書検索システム（KOALA）の機能改善を行う

12 月 学生を対象に、図書館からの個人伝言サービス（インフォメーションシステムの個人伝言機能を通じて図書館から予約資料や ILL 複写物・借用本の到着、延滞資料の返却依頼などを連絡するもの）を開始

- 23 (2011) 3月 ●東日本大震災 ▲文化交渉学研究拠点が構築した「近代漢語文献資料データベース」の公開支援 ▲蔵書検索 KOALA の利用方法を説明するガイダンスビデオをネットワーク配信映像 (VOD) で利用できるようにする ▲図書委員に対する各館見学ツアーを実施
- 4月 堺キャンパス図書館が新しい棟に移転、本格開館 ▲KU コアラが文化会美術部白鷺会と連携して「コアラ・ミュージアム」を開催。以降も連携先を替えて毎年1～2回開催 ▲新登録番号体系「44系」(ミューズ大学図書館製本雑誌固定資産用)、「45系」(堺キャンパス図書館製本雑誌固定資産用) を付与開始
- 5月 教職員を対象に図書館からの個人伝言サービスを開始 ▲学長宛て「図書館のありかた」プロジェクト報告書を提出
- 8月 図書館リニューアル計画に基づき、総合図書館のレファレンスカウンターをメインカウンターの一角に移動、自然系雑誌コーナーを、人社系雑誌コーナーへ移動、テレリフトを撤去して小荷物昇降機を設置
- 9月 科学雑誌『Nature』及び『Science』を電子ジャーナルへ切替え
- 10月 KOALA Plus (横断検索サービス) の利用提供開始。本学以外の所蔵状況についても簡易に検索が可能となる
- 12月 総合図書館の正面出入口西側に風除室 (出口) を新設 ▲旧事務室 (総合図書館1階東側) を改装して東閲覧室 (252席) を開設
- 24 (2012) 2月 ■南千里国際プラザが竣工 ▲図書館リニューアル計画に基づき空調の熱源装置の取替工事を行うため、2月いっぱい暖房が一切入らない状態となる ▲「図書館利用規程」を一部改正 (図書館の休館日から第1土曜日を外すため) ▲堺キャンパス図書館において校友および協定大学利用登録者への利用提供開始 ▲『Business Source Complete』、『EconLit with Full Text』の利用提供開始
- 3月 高槻図書室にICカード対応の入館機を設置。これで全館に入退館機がそろふ
- 4月 ■留学生別科開設 ■ガバナンス研究科開設 ▲電

- 子ジャーナルポータルを更新 ▲「30分でぐるり1周」
として新入生のための図書館ツアーリニューアル
▲図書館案内ビデオ（約5分間）を作成、新入生指
導行事期間中に上映してもらう ▲大阪大学附属図
書館と関西大学図書館の相互利用に関する覚書の締
結（3月）により、本学学部学生・大学院学生・専任
教職員は、大阪大学附属図書館4館の利用手続きが
簡単になる ▲堺市民への堺キャンパス図書館一般
開放開始
- 5月 駐日欧州連合代表部が主催するイベント EU IN
JAPAN ROADSHOW「EUがあなたの街にやってくる」を開催
- 6月 図書館プチゼミ（各種データベースの使い方説明、
書庫案内）の実施を開始 ▲お知らせにRSS機能が
追加され、図書館からの最新の情報を入手可能にな
る
- 7月 ●第30回夏季オリンピックがロンドンで開催 ▲予
約連絡票の掲出基準を見直し、インフォメーション
システムの個人伝言受取可能な利用者を対象外とす
る
- 10月 第23代図書館長・内田慶市（外国語学部教授）就任
（～現在） ■大学基準協会による大学評価実施調査
▲総合図書館で無線LAN「KUWiFi」のサービスを
開始。静かに資料を読みたいという利用者のために
サイレントエリアを設置 ▲出納システムをメイン
カウンター前 KOALA 端末で開始。（KOALA の予
約機能で書庫本を請求できる） ▲学生対象の図書館
広報誌『KULione』を創刊
- 25（2013） 1月 総合図書館でのオンデマンド印刷サービス導入 ■
本学で学認（学術認証フェデレーション）がスタート。
学外から CiNii を利用する場合、大学が付与した統合
認証の ID / PW で学内と同じ環境の CiNii が利用で
きるようになる ▲2階グループ閲覧室の使用を申
込制に変更する
- 2月 「電子ジャーナルポータル」が「電子リソースポータル」に変更。トップ画面で資料種別（ジャーナル・ブック）毎の絞り込みが可能になる ▲ルーヴェン大学図書館（ベルギー）と相互協力覚書を締結 ▲

- 総合図書館でオンデマンド印刷システムを導入
- 3月 内藤文庫の中の各種資料（講義ノート、拓本、書画、原稿、書簡、写真など）リストを公開 ▲第2書庫に移動していた洋雑誌のバックナンバーを書庫に戻す。第2書庫の空調機が改修されたので、代わりに文庫資料などを第2書庫へ移動
- 4月 堺キャンパス図書館の平日の開館時間を延長（18:30から20:00閉館に変更）し、高槻図書室、ミューズ大学図書館と同じ開館時間とする ▲総合図書館地上階トイレに防犯カメラ設置 ▲「KUL GATEWAY～関西大学総合図書館 on the Web～」の内容を更新 ▲関西大学による「大正癸丑蘭亭会百周年（おおさか）記念行事」の一環として、総合図書館第一会議室、展示室にて展覧会を開催 ▲大阪くらしの今昔館にて、関西大学図書館主催企画展示「なにわユーモア画譜」開催。それに先立ち、総合図書館展示室にて「プレ展覧会 春爛漫コレクション」実施 ■凧風館1階に学生の学習スキル向上を支援する「コラボレーションコモンズ」開設
- 7月 館内でのペットボトル、水筒など蓋つきの飲料の持ち込みと飲用を認める
- 9月 図書館システム iLiswave-J を V1 から V3 にバージョンアップ、スマートフォン対応等の機能が追加。それに伴い KOALA Plus はサービス終了、横断検索機能は KOALA に統合される ●第32回夏季オリンピック東京開催決定
- 10月 東閲覧室の開室時間を延長（17:00から18:00閉室に変更）
- 11月 香港大学図書館と相互協力覚書を締結
- 26 (2014) 2月 資料の利用方法を案内するためのウェブサイト LibGuides の提供開始
- 3月 ●「あべのハルカス」オープン
- 4月 「高槻図書室」を「高槻キャンパス図書館」に改称 ▲関西大学創立130周年記念事業 関西大学図書館創設100周年・関西大学博物館開設20周年記念 図書館 博物館 連携企画展 「関西大学名品万華鏡館館選イチオシ！」を博物館にて開催（4/1～5/18） ▲「関西大学図書館100年のあゆみ展」を総合図書

館展示室にて開催（4/1～5/18） ▲総合図書館2階
開架閲覧室に自動貸出機を導入 ●消費税5%から8
%に増税 ■「関西大学学術リポジトリ管理運用規
程」制定にともない、リポジトリの管理・運用を図
書館が行うと規定される

5月 香港城市大学図書館と相互協力覚書を締結

6月 ■関西大学コモンズ委員会が開催される

7月 ■天六キャンパスを売却し、梅田に新拠点を開設す
ることが発表される

図書館創設100周年を迎える

サービスに係る統計（総合図書館）

年 度		開館 日数	入館者数	利用者数			利用冊数			レファレンス 利用者数		
元号	西暦			館内 閲覧者数	館外 貸出者数	合計	館内 閲覧冊数	館外 貸出冊数	合計	学内	学外	合計
平成 7	1995	288	1,027,132	16,189	167,066	183,255	44,974	327,698	372,672	889	18	907
平成 8	1996	285	1,043,410	17,589	173,670	191,259	48,944	340,032	388,976	543	11	554
平成 9	1997	286	984,966	17,203	172,035	189,238	47,214	338,691	385,905	712	31	743
平成 10	1998	285	1,009,067	19,690	191,441	211,131	54,467	377,014	431,481	886	25	911
平成 11	1999	283	1,056,406	21,076	208,675	229,751	54,871	407,462	462,333	660	20	680
平成 12	2000	296	1,188,376	21,419	217,729	239,148	54,291	422,572	476,863	519	13	532
平成 13	2001	298	1,210,970	23,074	212,181	235,255	59,552	414,718	474,270	230	23	253
平成 14	2002	298	1,165,884	29,127	223,084	252,211	56,621	398,512	455,133	303	11	314
平成 15	2003	295	860,273	27,507	214,429	241,936	53,281	389,861	443,142	203	12	215
平成 16	2004	293	1,034,155	25,522	193,563	219,085	49,737	353,502	403,239	168	14	182
平成 17	2005	301	934,632	22,577	175,002	197,579	44,230	323,528	367,758	115	22	137
平成 18	2006	304	875,334	22,716	159,734	182,450	45,242	301,887	347,129	91	10	101
平成 19	2007	301	840,721	19,619	151,825	171,444	40,810	305,805	346,615	122	2	124
平成 20	2008	303	807,136	14,916	143,295	158,211	31,849	302,147	333,996	74	8	82
平成 21	2009	296	761,348	13,966	145,456	159,422	29,578	309,813	339,391	64	8	72
平成 22	2010	303	809,254	13,258	157,197	170,455	27,389	328,717	356,106	90	6	96
平成 23	2011	305	731,963	12,100	152,252	164,352	26,032	316,468	342,500	49	4	53
平成 24	2012	308	710,168	9,618	142,130	151,748	21,414	297,472	318,886	70	4	74
平成 25	2013	310	726,580	9,661	133,523	143,184	20,426	284,529	304,955	86	1	87

相互利用件数															
国内								国外							
提供				依頼				提供				依頼			
閲覧	貸出	複写	合計	閲覧	借用	複写	合計	閲覧	貸出	複写	合計	閲覧	借用	複写	合計
458	122	2,731	3,311	563	203	2,433	3,199	—	0	1	1	—	0	165	165
400	304	3,403	4,107	429	238	2,998	3,665	—	0	0	0	—	0	171	171
428	540	4,042	5,010	450	302	2,829	3,581	—	0	3	3	—	0	305	305
462	408	3,339	4,209	482	323	2,779	3,584	1	0	0	1	11	2	158	171
424	415	3,759	4,598	459	402	3,053	3,914	1	0	0	1	18	1	110	129
591	348	4,082	5,021	325	362	3,255	3,942	0	0	0	0	11	0	113	124
491	297	3,472	4,260	351	563	3,400	4,314	0	0	0	0	0	0	48	48
580	372	3,709	4,661	398	696	3,882	4,976	0	0	6	6	4	2	137	143
513	410	3,490	4,413	440	724	4,347	5,511	0	0	4	4	2	2	112	116
508	302	2,491	3,301	311	662	3,885	4,858	3	0	0	3	7	0	154	161
486	632	4,318	5,436	221	888	4,190	5,299	2	0	1	3	13	2	94	109
621	846	4,755	6,213	213	755	3,492	4,460	1	0	5	6	14	1	50	65
530	726	4,520	5,776	326	765	4,137	5,228	2	0	3	5	7	0	47	54
469	793	4,293	5,555	237	673	3,315	4,225	3	0	0	3	6	1	46	53
448	667	3,908	5,023	169	764	3,364	4,297	6	0	0	6	3	2	80	85
388	654	3,436	4,478	217	622	3,148	3,987	3	0	1	4	17	1	29	47
378	614	3,481	4,473	157	648	2,856	3,661	1	6	16	23	18	0	19	37
441	650	3,440	4,531	150	604	2,512	3,266	3	0	29	32	7	1	23	31
453	575	2,829	3,857	121	513	2,455	3,089	0	0	0	0	12	0	29	41

※国外の閲覧は平成10年度より開始

サービスに係る統計（高槻図書館）

年 度		開館日数	入館者数	利用者数	利用冊数
元号	西暦				
平成 7	1995	256		4,895	8,039
平成 8	1996	258		7,433	12,163
平成 9	1997	251		9,423	16,202
平成 10	1998	251		12,641	22,192
平成 11	1999	251		13,728	24,280
平成 12	2000	250		13,885	24,668
平成 13	2001	249		12,142	22,153
平成 14	2002	252		11,127	19,881
平成 15	2003	251		11,544	21,010
平成 16	2004	249		11,891	22,078
平成 17	2005	244		11,402	22,212
平成 18	2006	255		10,530	22,082
平成 19	2007	257		7,100	14,004
平成 20	2008	253		6,110	11,832
平成 21	2009	245		5,411	10,734
平成 22	2010	254	41,908	6,058	11,520
平成 23	2011	258	47,715	6,132	11,473
平成 24	2012	260	39,453	5,570	10,201
平成 25	2013	262	28,303	4,465	8,344

※平成 14 年度までは館外貸出利用者数および冊数

※平成 15 年度より館外貸出・館内閲覧利用者数及び冊数

※平成 22 年度より入館者数を計数

サービスに係る統計（ミューズ大学図書館）

年 度		開館日数	入館者数	館外貸出・館内閲覧	
元号	西暦			利用者数	利用冊数
平成 22	2010	251	17,581	2,418	4,560
平成 23	2011	258	26,200	3,808	7,722
平成 24	2012	260	32,459	4,750	9,868
平成 25	2013	262	36,938	5,403	10,532

サービスに係る統計（堺キャンパス図書館）

年 度		開館日数	入館者数	館外貸出・館内閲覧	
元号	西暦			利用者数	利用冊数
平成 22	2010	241	8,340	1,569	2,765
平成 23	2011	257	12,801	2,549	4,390
平成 24	2012	260	20,074	3,524	5,812
平成 25	2013	262	27,652	4,494	7,865

蔵書数の推移

年 度		蔵書数									
元号	西暦	図 書 (冊数)			雑誌・新聞 (種類数)			マイクロ資料 (点数)			その他 の資料
		和	洋	合計	和	洋	合計	フィルム	フィッシュ	合計	
平成 7	1995	961,187	567,775	1,528,962	5,041	3,737	8,778	53,320	13,801	67,121	1,955
平成 8	1996	987,460	596,705	1,584,165	4,468	3,560	8,028	56,040	14,318	70,358	2,175
平成 9	1997	1,016,415	616,549	1,632,964	4,401	3,456	7,857	61,895	14,747	76,642	2,391
平成 10	1998	1,025,121	633,076	1,658,197	4,830	3,497	8,327	65,768	15,113	80,881	2,647
平成 11	1999	1,046,782	642,988	1,689,770	4,553	3,435	7,988	69,319	16,208	85,527	2,854
平成 12	2000	1,072,319	660,941	1,733,260	4,282	3,307	7,589	75,675	16,765	92,440	3,360
平成 13	2001	1,092,816	678,468	1,771,284	4,396	3,386	7,782	77,063	17,676	94,739	3,905
平成 14	2002	1,108,281	694,008	1,802,289	3,928	3,277	7,205	79,249	18,406	97,655	4,155
平成 15	2003	1,144,852	713,215	1,858,067	3,857	3,301	7,158	80,259	18,904	99,163	4,761
平成 16	2004	1,173,846	726,945	1,900,791	3,679	3,226	6,905	81,812	20,069	101,881	4,902
平成 17	2005	1,187,331	729,666	1,916,997	3,247	2,567	5,814	84,900	20,282	105,182	5,021
平成 18	2006	1,175,523	739,921	1,915,444	3,071	2,020	5,091	86,187	21,323	107,510	5,144
平成 19	2007	1,192,342	750,032	1,942,374	3,085	1,958	5,043	87,047	22,017	109,064	5,187
平成 20	2008	1,199,763	758,130	1,957,893	3,045	1,918	4,963	87,643	23,025	110,668	5,482
平成 21	2009	1,207,713	763,358	1,971,071	2,917	1,872	4,789	90,090	23,074	113,164	5,237
平成 22	2010	1,214,475	771,252	1,985,727	2,826	1,704	4,530	92,206	23,117	115,323	5,135
平成 23	2011	1,227,197	780,255	2,007,452	2,743	1,669	4,412	93,055	23,783	116,838	5,195
平成 24	2012	1,236,656	790,465	2,027,121	2,724	1,629	4,353	94,759	23,888	118,647	5,429
平成 25	2013	1,249,257	797,155	2,046,412	2,609	1,555	4,164	95,039	24,129	119,168	5,535

※「その他の資料」は、AV 資料（オーディオ・ビデオ）及びニューメディア（CD-ROM・フロッピー）を含む

※ミューズ大学図書館と堺キャンパス図書館の資料は含まない

図書費執行額の推移

年 度		図書費（円）				
元号	西暦	図書		雑誌		電子媒体 (ニューメディア)
		和	洋	和	洋	
平成 7	1995	200,895,665	219,129,686			6,001,069
平成 8	1996	196,521,234	290,894,021			8,457,952
平成 9	1997	184,748,798	203,831,942	31,606,117	147,836,502	696,130
平成 10	1998	182,990,878	235,574,798	40,171,481	173,669,326	9,682,150
平成 11	1999	175,746,169	162,776,394	39,464,535	207,365,364	6,057,877
平成 12	2000	161,422,705	166,728,881	44,408,663	179,774,658	3,640,027
平成 13	2001	176,951,151	150,368,563	44,564,589	206,188,373	5,375,750
平成 14	2002	140,874,224	145,806,576	28,973,497	181,584,484	19,140,986
平成 15	2003	120,814,873	145,758,612	29,905,699	202,852,908	46,847,076
平成 16	2004	139,382,662	137,305,213	26,693,490	212,768,243	7,153,266
平成 17	2005	127,929,365	134,213,377	29,672,000	226,295,329	9,112,215
平成 18	2006	120,603,197	112,412,340	28,122,024	214,375,142	5,148,232
平成 19	2007	92,804,911	123,413,024	20,908,276	222,469,045	4,926,615
平成 20	2008	98,280,281	103,568,268	21,250,500	240,599,697	8,332,706
平成 21	2009	90,979,271	105,135,784	23,308,883	241,252,027	5,981,796
平成 22	2010	98,071,771	107,073,292	27,597,037	231,126,763	5,380,577
平成 23	2011	88,725,235	89,317,650	21,979,472	248,368,306	6,907,986
平成 24	2012	82,509,765	101,678,792	23,842,314	229,285,579	61,616,606
平成 25	2013	89,904,697	87,409,825	25,009,110	241,258,144	2,669,303

※ ミューズ大学図書館及び堺キャンパス図書館の図書費執行額は含まれていない

※ 「雑誌」は電子ジャーナルを含む

※ 「電子媒体」はCD-ROM、DVD-ROM等を含む

※ 「その他の資料」には、追録、AV資料を含む

図書費（円）					
マイクロ資料		その他の資料	外部 データベース	合計	製本費
和	洋				
86,917,826		988,984		513,933,230	
55,736,370		821,674		552,431,251	
101,104,231		39,782,289	857,309	722,989,794	10,731,753
35,723,089	19,897,914	34,227,671	998,735	732,936,042	9,810,528
50,301,932	47,960,644	40,502,432	857,309	731,032,656	9,012,514
81,121,343	18,468,995	41,924,659	2,545,763	700,035,694	9,964,227
17,736,970	28,502,869	6,504,024	34,408,360	670,600,649	11,174,520
27,794,889	39,689,393	62,994,489	29,796,968	676,655,506	11,528,370
1,347,623	40,408,923	52,878,702	31,130,446	671,944,862	11,470,347
14,759,782	70,258,979	39,685,501	23,921,897	671,929,033	11,753,910
8,264,670	69,776,366	27,977,194	39,281,192	672,521,708	10,914,687
8,914,500	72,797,916	28,304,404	46,997,469	637,675,224	9,494,016
3,771,000	51,348,223	19,673,001	50,320,962	589,635,057	8,510,901
5,838,720	47,487,700	15,038,092	49,890,682	590,286,646	7,185,024
2,808,000	51,383,314	17,713,047	52,013,539	590,575,661	7,246,638
7,804,336	56,439,641	9,771,836	50,396,618	593,661,871	7,724,600
0	51,503,090	15,213,413	66,823,480	588,838,632	7,371,672
25,962,701	13,500,574	25,082,713	77,430,343	640,909,387	7,441,140
4,269,195	21,555,775	11,220,639	65,133,961	548,430,649	7,911,540

展示一覧

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
		アダム・スミス「国富論」刊行200年記念	昭和51年11月19日(金)	関西大学商学部会議室	
1985	(第1回特別展)	関西大学総合図書館開館記念特別展示 内藤文庫	昭和60年4月28日～6月29日 第一期：5月末日まで 第二期：6月末日まで		
	第2回	大阪の古版地誌	昭和60年10月8日～10月16日		
	第3回	矢口文庫とその周辺—イギリス経済史を巡って—	昭和60年10月21日(月)～11月15日(金)		
		法律図書館連絡会第28回総会開催記念展示	昭和60年11月15日(金)	総合図書館3階302グループ閲覧室	
1986	第4回	古今の百科辞典	昭和61年4月3日(木)～4月30日(木)		
	第5回	近代日本の雑誌	昭和61年5月19日(月)～6月21日(土)		
	第6回	谷崎潤一郎 —関西在住時代の作品を中心に—	昭和61年9月22日(月)～10月18日(土)		【記念講演会】「谷崎の劇とヨーロッパ」名取栄史文学部教授 10月17日(金)
	第7回特別展	関西大学創立100周年記念 大阪名家自筆稿本百種	第Ⅰ記：昭和61年10月27日(月)～11月8日(土) 第Ⅱ期：11月10日(月)～11月22日(土) 第Ⅲ期：11月25日(火)～12月6日(土)		【記念講演会】①「初出資料の大切さについて」山野博史法学部助教授 11月6日(木) ②「近代文学に描かれた大阪」吉田永宏文学部教授 11月20日(木) ③「展覧本について」肥田皓三文学部教授 12月4日(木)
1987	第8回	さくらづくし	昭和62年4月3日(金)～4月30日(木)		
	第9回	世界の地図	昭和62年5月18日(月)～6月24日(木)		
	第10回	能の世界	昭和62年9月21日(月)～10月24日(土)		【記念講演会】「関大・能・本」関屋俊彦文学部教授 10月16日(金)
	第11回	河上肇と関西大学	昭和62年11月2日(月)～12月5日(土)		
1988	第12回	源氏物語の世界	昭和63年4月1日(金)～4月28日(木)		【記念講演会】「源氏物語と絵」清水好子文学部教授 4月21日(木)
	第13回	世界の聖書	昭和63年5月16日(月)～6月18日(土)		
	第14回	西洋法律学の古書—ローマ法を中心として—	昭和63年9月21日(木)～10月22日(土)		

*空欄は全て総合図書館1階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
1989	第15回	古典資料にみる科学・技術	昭和63年11月7日(月)～12月10日(土)		
	第16回	歌舞伎の世界	平成元年4月3日(月)～5月20日(土)		
	第17回	サミュエル・ジョンソン	平成元年5月29日(月)～7月8日(土)		
	特別展	藤澤恒夫展	平成元年7月17日(月)～8月4日(金)		
	第18回	マリク書店のあゆみ(1916～1947)	平成元年9月21日(木)～10月28日(土)		【記念講演会】「ドイツ20世紀とマリク書店」山下肇文学部教授 10月13日(金)
	臨時展	資料でみる関西大学—学内出版物を中心に—	平成元年12月11日(月)～12月25日(月)		
1990	第19回 春季 特別展	総合図書館開館5周年記念 近代の大阪文芸	平成2年4月9日(月)～5月30日(木)		【記念講演会】「近代文学にみる大阪 —人・風土・大阪弁—」吉田永宏文学部教授(図書館長) 5月14日(月)
	第20回 秋季 特別展	泊園記念会設立30周年記念 泊園書院	平成2年10月15日(月)～11月22日(木)		【記念講座】「泊園書院と懷徳堂 —大坂の学問—」加地伸行大阪大学文学部教授 11月17日(土)
	特別展	文化功労者 北條秀司米寿記念劇作展	平成2年12月3日(月)～12月15日(土)		
1991	第25回 春季 特別展	古典にみる象 —江戸期に渡来した象を中心に—	平成3年4月8日(月)～4月27日(土)		【記念講演会】「古典にみる象 —江戸時代に渡来した象の話—」大庭脩文学部教授 4月22日(月) ※当年度より開催回次は通算を採用
	第26回	大津事件100周年記念 児島惟謙と関西大学展	平成3年5月11日(土)～5月27日(月)		
	第27回 秋季 特別展	原典でみる経済思想の歩み	平成3年10月14日(月)～11月22日(金)		
1992	第28回	流伝の萬葉集	平成4年4月6日(月)～5月18日(月)		【記念講演会】「萬葉集研究一千年」神堀忍文学部教授 5月11日(月)
	第29回 常設 展示	平成元年～3年度『関西大学通信』で紹介された本	前期：平成4年6月1日(月)～9月29日(火) 後期：12月1日(火)～3月19日(金)		
	第30回 秋季 特別展	日本の数学 —和算を中心に—	平成4年10月12日(月)～11月21日(土)		

*空欄は全て総合図書館1階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
1993	第31回 春季 特別展	大坂画壇 一江戸から昭和に至る絵画一	第1期：平成5年4月5日(月)～4月30日(金) 第2期：5月17日(月)～6月12日(土) 第3期：7月5日(月)～7月30日(金)		【記念講演会】「大坂画壇について」山岡泰造文学部教授 4月22日(木) 7月28日-29日は「第54回私立大学図書館協会総大会記念展示」として、総合図書館第1会議室も使用して3期分をまとめて展示
	常設展	平成4年度『関西大学通信』に紹介された本	前期：平成5年8月23日(月)～9月30日(木) 後期：12月1日(木)～3月19日(土)		
	第32回 秋季 特別展	大阪芝居番付	平成5年10月12日(火)～11月20日(土)		
1994	第33回 春季 特別展	西田家寄贈 近世・近代の絵画	平成6年4月4日(月)～5月16日(月)		【記念講演会】「近代大阪の絵画 一恒富・楯彦・花朝一」中谷伸生文学部助教授 4月22日(金)
	常設展	平成5年度『関西大学通信』に紹介された本	平成6年6月6日(月)～3月10日(月)		
	第34回 学外展	関西大学図書館創設80周年記念 関西大学文学部創設70周年記念 おおさか文藝書画展 一近世から近代へ一	平成6年9月22日(木)～9月27日(火)	大丸心斎橋店	
	第35回	関西大学図書館創設80周年記念 近世・近代の文藝書画展	平成6年10月22日(土)～10月23日(日)	奈良県新公会堂2階会場	
1995	第36回 春季 特別展	回想 古きよき大阪江戸から明治の名所めぐり	前期：平成7年4月1日(土)～5月7日(日) 後期：5月14日(日)～6月18日(日)		【記念講演会】「江戸から明治の名所案内 一大阪がかわった時一」藪田貴文学部教授 4月26日(木)
	常設展 前期	平成6年5月から11月まで『関西大学通信』に紹介された本	平成7年7月3日(月)～9月30日(土)		
	第37回 秋季 特別展	蔵書が語る本の文化史	平成7年10月15日(日)～11月19日(日)		
	常設展 後期	平成7年1月から7月まで『関西大学通信』に紹介された本	平成7年12月4日(月)～3月9日(土)		
1996	第38回 春季 特別展	中井藍江とその周辺の画家たち	平成8年4月1日(月)～5月19日(日)		

※空欄は全て総合図書館1階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
	第39回 常設展	図書館蔵書紹介① —ヴァティカン図書館蔵本複製本—	平成8年7月1日(月) ～9月30日(月)		
		美学会全国大会展 近世大坂画壇周辺	平成8年10月11日(金) ～10月13日(日)		
	第40回 秋季特別展	スタインベックの広い世界	平成8年10月21日(月) ～11月22日(金)		【記念講演会】「スタインベックの広い世界」中山喜代市文学部教授 10月30日(水)
	第41回	新関西大学会館竣工記念 関西大学図書館所蔵文書展 戦国武将の書状	平成8年10月28日(月) ～12月20日(金)	新関西大学会館アートギャラリー	
	第42回 常設展	図書館蔵書紹介② —古筆・手鑑—	平成8年12月9日(月) ～1月17日(金)		
1997	第43回 春季展	ちりめん本 —外国語に訳されたおとぎ噺—	平成9年4月1日(火) ～5月30日(金)		
	第44回 夏季展	図書館蔵書紹介③ —大阪文芸資料作家特集 その1—	平成9年6月16日(月) ～7月25日(金)		
	第45回 学外展	大坂の書と画と本 —関西大学図書館所蔵—	平成9年5月30日(金) ～6月11日(水)	京阪百貨店守口店ギャラリー	
	第46回	北條秀司回顧展	平成9年5月6日(火) ～6月30日(月)	新関西大学会館アートギャラリー	
	第47回 秋季特別展	王朝物語の展開	平成9年10月20日(月) ～11月22日(土)		【記念講演会】「王朝物語の本〈写本・古活字本・板本〉」片桐洋一文学部教授 11月13日(水)
	第48回 冬季展	図書館蔵書紹介④ —大阪文芸資料作家特集 その2— 明治の詩歌	平成9年12月8日(月) ～1月17日(土)		
1998	第49回 春季展	プライベート・プレスの世界	平成10年4月1日(火) ～5月30日(土)		
	第50回 特別展	絵入り本の系譜	平成10年4月1日(火) ～5月30日(土)	新関西大学会館アートギャラリー	
	第51回 夏季展	マザーグース	平成10年6月8日(月) ～7月31日(金)		
	第52回 秋季展	いしいひさいち展	平成10年10月12日(月) ～11月7日(土)	新関西大学会館アートギャラリー	
	第53回 冬季特別展	王朝和歌の世界	平成10年11月11日(水) ～12月19日(土)		【記念講演会】「王朝和歌の世界 —写本の魅力」田中登文学部教授 11月17日(火)

*空欄は全て総合図書館1階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
1999	第54回 春季 特別展	聖書コレクション	平成11年4月1日(木) ～5月22日(土)		
	第55回 夏季展	大阪の雑誌創刊号 明治期	平成11年6月14日(月) ～7月30日(金)		
	第56回 秋季 特別展	作家の自筆展 —上方文藝玉手箱—	平成11年10月4日(月) ～11月13日(土)		【記念講演会】「三島由紀夫 初期作品の問題 一川端康 成との往復書簡を契機とし て—」吉田永宏文学部教授 10月25日(月)
	第57回 冬季 展示	この国の字書と辞書	平成11年12月6日(月) ～平成12年1月15日 (土)		
2000	第58回 春季 特別展	本草への招待 一本 草書とその周辺—	平成12年4月1日(土) ～5月20日(土)		
	第59回 秋季 特別展	生誕70周年記念 開高健展	平成12年10月16日(月) ～12月16日(土)		【記念講演会】「対談「開高 健を語る」」背戸逸夫氏/ 山野法文学部教授(図書館長) 11月18日(土)
2001	第60回 春季 特別展	中村幸彦先生を偲んで	平成13年4月1日(日) ～5月20日(日)		
		和歌文学会 第47回 大会記念展 勅撰和 歌集とその周辺	平成13年10月24日(水) ～10月27日(土)		
	第61回 秋季 特別展	伊勢物語 —注釈と 享受の世界—	平成13年11月7日(水) ～12月15日(土)		【記念講演会】「中世の『伊 勢物語』享受 一関大図書 館本を中心に—」片桐洋一 文学部教授 11月27日(火)
2002	第62回 春季 特別展	文字遺産集成 —文 字の出現から書物へ —	平成14年4月1日(月) ～5月19日(日)		
	第63回 秋季 特別展	英国近代女性作家展 —ブルーストッキン グからオースティン、 プロンテの時代へ—	平成14年11月7日(木) ～12月15日(日)		【記念講演会】「イギリス・ フェミニズムの胎動 —英 国近代女性作家展に寄せて —」坂本武文学部教授 11 月29日(金)
2003	第64回 春季 特別展	大阪文藝 長沖一展	平成15年4月1日(火) ～5月18日(日)		
	第65回 秋季 特別展	江戸・明治初期の占 書展 —庶民の生活 の中の占い—	平成15年11月6日(水) ～12月13日(土)		【記念講演会】「今でも使わ れている運勢歴と大雑書 の中の占い —その組み 組を知っていますか—」坂出 伸文学部教授 11月29日(土)

※空欄は全て総合図書館1階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
2004	第66回 春季 特別展	ローマ法の展開	平成16年4月1日(木) ～5月5日(木)		
	第67回 臨時展	「陳瞬臣」展	平成16年5月10日(月) ～5月16日(日)		【記念講演会】「陳瞬臣展記念フォーラム(関西大学主催)」 5月10日(月)
	第68回 臨時展 (記念展)	関西大学経済学部・ 商学部創設100年記念 展示	平成16年10月12日(火) ～10月23日(土)		経済学部・商学部の創設 100年に協賛して博物館、年 史編纂室と共に展示を行う
	第69回 秋季 特別展	「新」生田文庫の能 楽資料	平成16年11月15日(月) ～12月18日(土)		【記念講演会】対談「生田秀・ 耕一を語る 一小鼓のはなし」 生田秀昭氏/関屋俊 彦文学部教授 11月30日(火)
2005	第70回 春季 特別展	日本・明治期の新聞	平成17年4月1日(金) ～5月15日(日)		
	第71回 秋季 特別展	八代集の世界 ―古 今・新古今を中心に―	平成17年11月14日(月) ～12月17日(土)		【記念講演会】「本を写すこ とと切ること」田中登文学 部教授(図書館長) 11月 29日(火)
2006	第72回 春季 特別展	大阪の女流文学	平成18年4月1日(土) ～5月21日(日)		
	第73回 記念展	商学部創設100周年 展示 ―近世・近代 における商(あきない) の諸相と商学部 における学(まなび) の礎―	平成18年5月27日(土) ～6月24日(土)		
	第74回 記念展	関西大学創立120周年 大坂画壇の絵画 ―文人画・戯画から 長崎派・写生へ―	第1部:平成18年10月 15日(日)～11月8日(火) 第2部:11月13日(月)～ 12月1日(金) 第3部:12月3日(日)～ 12月16日(土)		【記念講演会】「大坂画壇の 絵画」中谷伸生文学部教授 11月16日(火)
	日・EU フレンド シップ ウィーク展	EUにおける大学 ―関西大学協定校を 中心に―	平成18年11月22日(火) ～12月9日(土)	総合図書館1 階エントラン スエリア	
2007	第75回 春季 特別展	子どもの遊びと絵本 ―近世・近代を中心 に―	平成19年4月1日(日) ～5月20日(日)		
	第76回 秋季 特別展	廣瀬文庫とチョーサー をめぐる本たち	平成19年11月12日(月) ～12月15日(土)		【記念講演会】「廣瀬文庫と チョーサーをめぐる本たち」 和田葉子外国語教育研究機 構教授 11月29日(火)
2008	第77回 春季 特別展	「百珍って何？」 ― 今に引き継ぐ江戸の 食文化―	平成20年4月1日(火) ～5月18日(日)		

*空欄は全て総合図書館1階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
	日・EU フレンド シップ ウィーク展	ヨーロッパのカフェ と文学	平成 20 年 5 月 26 日(月) ～ 6 月 4 日(水)		
	第 78 回 特別 企画展	内藤湖南 近代日 本の知の巨匠―	平成 20 年 6 月 12 日(水) ～ 7 月 12 日(土)		
	第 79 回 秋季 特別展	目で見える江戸俳諧の 真髓 ―芭蕉・蕪村、 そして俳諧の美―	平成 20 年 10 月 27 日(月) ～ 12 月 13 日(土)		【記念講演会】「目で見える江 戸俳諧の真髓～芭蕉・蕪村、 そして俳諧の美」藤田真一 文学部教授 11 月 17 日(月)
2009	第 80 回 春季 特別展	長谷川貞信 一大阪 の浮世絵師―	平成 21 年 4 月 1 日(水) ～ 5 月 17 日(日)		
	日・EU フレンド シップ ウィーク展	EU の公用語について	平成 21 年 5 月 25 日(月) ～ 6 月 13 日(土)		
	第 81 回 秋季 特別展	伊勢物語の世界	平成 21 年 10 月 1 日(水) ～ 10 月 31 日(土)		【記念講演会】『伊勢物語』 の成立と享受 ―展示品を 中心に― 山本登朗文学部 教授 10 月 20 日(火)
2010	第 82 回 特別展	資料に描かれた象 ―渡来象を中心に―	平成 22 年 4 月 1 日(水) ～ 5 月 16 日(日)		
	日・EU フレンド シップ ウィーク展	EU カレントアウェア ネス (EU 最新事情)	平成 22 年 9 月 21 日(火) ～ 10 月 1 日(金)	総合図書館 1 階エントラン スエリア	
	学外展 出陳	知と美の集大成 関 西大学所蔵名品展	平成 23 年 3 月 5 日(土) ～ 27 日(日)	財団法人柿衛 文庫展示室	主催：財団法人柿衛（かき もり）文庫（兵庫県伊丹市） 共催：関西大学 関西大学図書館・博物館所 蔵品を、関西大学の地域連 携事業として公開
2011	第 83 回 特別展	大坂文人・学者の世 界 ―江戸時代を中 心に―	平成 23 年 4 月 1 日(金) ～ 5 月 15 日(日)		
	日・EU フレンド シップ ウィーク展	ヨーロッパのメガネ 男子	平成 23 年 5 月 20 日(金) ～ 6 月 3 日(金)		
2012	日・EU フレンド シップ ウィーク展	LOVE LETTER from EUROPE ユー ロッパ著名人たちの ラブレター	平成 24 年 5 月 28 日(月) ～ 6 月 11 日(月)		
		織田作之助と「大阪」	平成 24 年 4 月 14 日(土) ～ 5 月 20 日(日)		主催：関西大学大阪都市遺 産研究センター 協力：オダサク倶楽部

*空欄は全て総合図書館 1 階展示室にて開催

開催年	回次	タイトル	期 間	開催場所*	備 考
		戦争の記録と表象： 火野葦平 ―日本・ アジア・ヨーロッパ―	平成 24 年 9 月 13 日(水) ～ 22 日(土)		主催：東西学術研究所 日 本文学・芸能研究班
2013		「なにわユーモア画譜」展 特別企画 プレ展覧会 大坂画壇 春爛漫コレクション	平成 25 年 4 月 1 日(月) ～ 8 日(月)		下記展示のプレ企画
	学外展	なにわユーモア画譜 ―関西大学所蔵大坂 画壇コレクションを 中心に―	平成 25 年 4 月 20 日(土) ～ 5 月 26 日(日)	大阪くらしの 今昔館	主催：大阪くらしの今昔館、 関西大学図書館
	蘭亭会 展覧会 第 1 部	大正癸丑（きちゅう） 蘭亭会百周年（おお さか）記念 ―近代 日本における翰墨の 盛典―	平成 25 年 4 月 12 日（月） ～ 5 月 19 日（日）		主催：関西大学大正癸丑蘭 亭会百周年記念行事実行委 員会「関西大学大正癸丑 （きちゅう）蘭亭会百周年 （おおさか）記念行事」の 一環として博物館と図書館 で展覧会を開催 博物館での左記展覧会（4 月 1 日～ 5 月 19 日）の一 部を図書館展示室で展示
	蘭亭会 展覧会 第 2 部	一九一三年蘭亭会へ の懐古と継承 一日 中名家書作品展―	平成 25 年 4 月 1 日(月) ～ 5 月 19 日(日)	総合図書館第 1 会議室	主催：関西大学大正癸丑蘭 亭会百周年記念行事実行委 員会「関西大学大正癸丑 （きちゅう）蘭亭会百周年 （おおさか）記念行事」の 一環として博物館と図書館 で展覧会を開催
	日・EU フレンド シップ ウィーク展	EU 諸国の言語に翻 訳された日本の小説	平成 25 年 6 月 3 日(月) ～ 6 月 14 日(金)		
2014	図書館・ 博物館 連携 企画展	関西大学名品万華鏡 ―館館選イチョシ！ ―	平成 26 年 4 月 1 日(火) ～ 5 月 18 日(日)	関西大学博物 館	関西大学創立 130 周年記念 事業 関西大学図書館創設 100 周年・関西大学博物館 開設 20 周年記念
	臨時展	関西大学図書館 100 年のあゆみ展	平成 26 年 4 月 1 日(火) ～ 5 月 18 日(日)		

※空欄は全て総合図書館 1 階展示室にて開催

他大学図書館との協定一覧

	協定図書館	所在地	協定名	締結日
1	関西学院大学図書館	兵庫	関西四大学図書館 相互利用協定	昭和 56（1981）年 3 月 23 日
2	同志社大学図書館	京都		
3	立命館大学図書館	京都		
4	大阪府立大学学術情報センター	大阪	相互協力事業に 関する覚書	平成 21（2009）年 3 月 25 日
5	大阪市立大学 学術情報総合センター	大阪		
6	ハーバードイェンチン図書館	米国・ ケンブリッジ	学術交流に関する協定書	平成 21（2009）年 6 月 27 日
7	早稲田大学図書館	東京	相互利用に関する覚書	平成 21（2009）年 7 月 1 日
8	大阪大学附属図書館	大阪	相互利用に関する覚書	平成 24（2012）年 3 月 23 日
9	ルーヴェン大学図書館	ベルギー・ ルーヴェン	相互協力覚書	平成 25（2013）年 2 月 6 日
10	香港大学図書館	中国・香港	相互協力覚書	平成 25（2013）年 11 月 28 日
11	香港城市大学図書館	中国・香港	相互協力覚書	平成 26（2014）年 5 月 23 日

編集後記

この記念誌をお読みいただきましてありがとうございます。

小誌は、当館創設 100 周年を迎えるこの年から直近 20 年を振り返ってその軌跡を辿って記述しています。しかし、20 年といえども、この間の国際化、情報化、技術の高度化の進展は非常に大きいものです。たとえば、今や一人一台は持っている携帯電話は、20 年前には、その普及率は僅か 3% ほどでした。でも、驚くのは普及率ではなく、その機能の多様化です。通話の道具であった電話が、メールの送受信ができたり、ネットサーフィンしたり、テレビを見たり、新聞も読め、お金の支払いもできるようになりました。図書館でも、蔵書の検索はスマートフォンでできるようになり、電子書籍の貸出を行っている館もあります。当館でも 2 世紀目のスタートとして、平成 27 年 4 月、総合図書館 1 階にラーニング・コモンズを設置する予定です。ひとり静かに書に親しむだけの空間から仲間と討議を交えることもできる空間へ、本との出会いの場から人との出会いの場へ、と図書館も機能を広げつつあります。印刷物や電子資料からの情報や設備・備品を提供するだけでなく、いかにして図書館職員が学生の学修支援を行っていくかが問われることとなります。

これからは今まで以上に環境変化が大きくなっていくでしょうが、当館のモットーである「継承と変革」をこの 100 年の節目に再認識し、図書館サービスを向上していきたいと思います。

最後に、寄稿していただきました方々、さまざまな形でご協力いただきました全ての方々に心より感謝申し上げます。

(高橋)

【編集担当者】 高橋 真澄・広瀬 雅子・加藤 博之

【表紙デザイン】 加藤 博之

関西大学図書館創設 100 周年記念誌

平成 26 年 10 月 31 日発行

編集・発行 関西大学図書館

〒 564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

TEL 06 - 6368 - 1157

<http://web.lib.kansai-u.ac.jp/library/>

印刷 (株)遊文舎

〒 532-0012 大阪市淀川区木川東 4-17-31

TEL 06 - 6304 - 9325
